

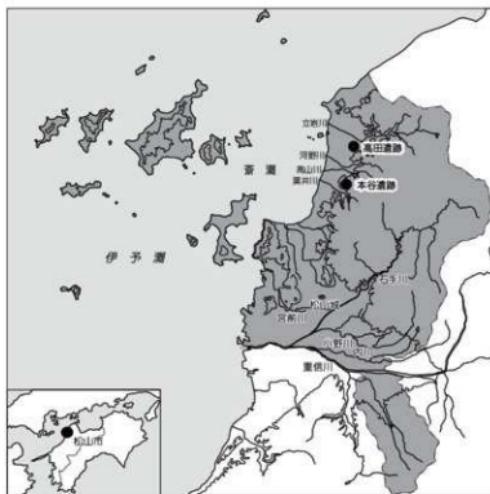
本谷遺跡 高田遺跡

2015

松山市教育委員会
公益財團法人松山市文化・スポーツ振興財團
埋蔵文化財センター

ほんだに
本谷遺跡

たかた
高田遺跡



2015

松山市教育委員会
公益財團法人松山市文化・スポーツ振興財團
埋蔵文化財センター



卷頭図版 1. 高田遺跡から斎灘を望む（南東より）



卷頭図版2. 榛之原16号墳A主体 槍・鎗出土状況（東より）



卷頭図版3. 榛之原16号墳B主体 折り曲げられた鎗出土状況（北より）

序　　言

本書は、平成18年度に上水道施設建設工事に伴い実施した本谷遺跡と高田遺跡の発掘調査報告書です。

本遺跡が所在する北条地区は、斎灘に面し南北に続く平野部と高繩山系を背後に控える丘陵部で形成されており、縄文時代以降の遺跡が数多く存在しています。これまでに丘陵部では古墳が多数確認されており、平野部では、地元の有力豪族であった河野氏の活躍を彷彿とさせる中世の遺跡等が発見されています。

今回報告する本谷遺跡では、弥生時代から古墳時代までの生活用具が多数出土しました。また、高田遺跡では、弥生時代前期の土坑と古墳時代前期の古墳を確認し、古墳の主体部からは副葬品と考えられる鉄製品が出土しました。こうした発掘調査例は、これまで北条地区では少ないことから、大変貴重な資料です。

本書が、文化財保護意識の向上と埋蔵文化財調査・研究の一助となり、松山市民の皆様をはじめ多くの方々に末永くご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査及び同書の刊行ができましたのは、関係各位の埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力の賜物です。ここに深く感謝申し上げます。

平成27年3月

松山市教育長　山本　昭弘

例　　言

1. 本書は、財團法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターが平成18年7月～平成18年12月まで屋外調査を実施した貯水池造成工事及び進入路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 整理作業と報告書作成作業は、公益財團法人松山市文化・スポーツ振興財團埋蔵文化財センターが行った。
3. 遺構の略号は、土坑：SK、溝：SD、柱穴：SP、性格不明遺構：SX、自然流路：SRとし、番号を付記した。古墳は愛媛県古墳分布調査報告書に記載されている番号を確認し、それに続く番号を付記した。
4. 本書で使用した標高数値は海拔標高を示し、方位は国土座標を基準とした真北である。
5. 基準点測量では、本谷遺跡は国際航業株式会社松山営業所、高田遺跡は株式会社エクセル調査設計に業務委託した。
6. 遺構の測量は、高尾和長と高尾の指示のもと作業員が実施した。
7. 本書掲載の遺構図、遺物図は、スケール下に縮尺を表記した。
8. 本書報告の遺構埋土、土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖（1996）』に準拠した。
9. 遺物の実測及び掲載図の製図は、高尾の指示のもと田崎真理、多知川富美子、丹生谷道代、寺尾いずみ、矢野久子が行った。
10. 写真図版は、遺構と遺物撮影は大西朋子が担当し、図版作成は高尾と協議のうえ大西が行った。
11. 本書に関する資料は、松山市立埋蔵文化財センターが保管・収蔵している。
12. 本書の執筆は、高尾が行った。
13. 報告書抄録は、巻末に掲載している。

本文目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査に至る経緯	
第2節 調査・刊行組織	
1. 調査組織 2. 刊行組織	
第3節 立地と環境	
1. 地理的環境 2. 歴史的環境	
第2章 本谷遺跡.....	5
第1節 調査の経過	
1. 調査に至る経緯 2. 調査の経緯 3. 調査体制	
第2節 層位	
第3節 遺構と遺物	
1. 性格不明遺構 2. 土坑 3. 溝 4. 柱穴 5. 自然流路	
第4節 小結	
第3章 高田遺跡	31
第1節 調査の経過	
1. 調査に至る経緯 2. 調査の経緯 3. 調査体制	
第2節 層位	
第3節 遺構と遺物	
1. 弥生時代 2. 古墳時代 3. 古墳時代以降	
第4節 小結	
第4章 まとめ.....	65

挿図目次

第1章 はじめに

第1図 調査地位置図及び周辺遺跡分布図	4
---------------------	---

第2章 本谷遺跡

第2図 調査地位置図	6	第15図 SD1出土遺物実測図	18
第3図 遺構配置図	7	第16図 SD2測量図	18
第4図 調査地西壁・北壁・東壁土層図	8	第17図 SD3測量図	19
第5図 SX1測量図・遺物出土状況図	10	第18図 SD4測量図	19
第6図 SX1出土遺物実測図(1)	11	第19図 SP1・2測量図	20
第7図 SX1出土遺物実測図(2)	12	第20図 SP1出土遺物実測図	21
第8図 SX1出土遺物実測図(3)	13	第21図 SP3～5測量図	21
第9図 SX1出土遺物実測図(4)	14	第22図 SP6～10測量図	21
第10図 SX2測量図・遺物出土状況図	15	第23図 SR1測量図	22
第11図 SX2出土遺物実測図(1)	15	第24図 SR1出土遺物実測図	23
第12図 SX2出土遺物実測図(2)	16	第25図 SR2測量図	23
第13図 SK1測量図	16	第26図 SR3測量図	24
第14図 SD1測量図	17		

第3章 高田遺跡

第27図 調査地位置図	32
第28図 遺構配置図	33
第29図 土坑(SK)配置図	34
第30図 SK1測量図・遺物出土状況図	35
第31図 SK1出土遺物実測図(1)	36
第32図 SK1出土遺物実測図(2)	37
第33図 SK2測量図	37
第34図 SK4測量図	38
第35図 SK4出土遺物実測図	38
第36図 SK6・7測量図	39
第37図 SK9測量図	40
第38図 SK11測量図	40
第39図 SK12測量図	41
第40図 SK13測量図	41
第41図 調査前地形測量図	42
第42図 榛之原14号墳調査後地形測量図	43
第43図 榛之原14号墳墳丘測量図	44

第 44 図	椋之原 14 号墳石室展開図・断面図	45
第 45 図	椋之原 14 号墳石室測量図・遺物出土状況図	46
第 46 図	椋之原 14 号墳出土遺物実測図 (1)	47
第 47 図	椋之原 14 号墳出土遺物実測図 (2)	48
第 48 図	椋之原 15 号墳・16 号墳配置図	49
第 49 図	椋之原 15 号墳 A 石棺測量図	50
第 50 図	椋之原 15 号墳 B 石棺測量図	51
第 51 図	椋之原 16 号墳 A 主体測量図・遺物出土状況図	52
第 52 図	椋之原 16 号墳 A 主体出土遺物実測図	53
第 53 図	椋之原 16 号墳 B 主体測量図	54
第 54 図	椋之原 16 号墳 B 主体測量図・遺物出土状況図	55
第 55 図	椋之原 16 号墳 B 主体出土遺物実測図	56
第 56 図	SD1 測量図	57
第 57 図	SK3 測量図	58
第 58 図	SK5 測量図	58
第 59 図	SK8 測量図	59
第 60 図	SK10 測量図	59

表目次

第 2 章 本谷遺跡	第 3 章 高田遺跡
表 1 性格不明遺構一覧	表 15 溝一覧
表 2 土坑一覧	表 16 土坑一覧
表 3 溝一覧	表 17 SK1 出土遺物観察表 (土製品)
表 4 柱穴一覧	表 18 SK4 出土遺物観察表 (土製品)
表 5 自然流路一覧	表 19 椋之原 14 号墳出土遺物観察表 (土製品)
表 6 SX1 出土遺物観察表 (土製品)	表 20 椋之原 14 号墳出土遺物観察表 (装身具)
表 7 SX1 出土遺物観察表 (石製品)	表 21 椋之原 14 号墳出土遺物観察表 (金属製品)
表 8 SX1 出土遺物観察表 (金属製品)	表 22 椋之原 14 号墳出土遺物観察表 (土製品)
表 9 SX2 出土遺物観察表 (土製品)	表 23 椋之原 14 号墳出土遺物観察表 (石製品)
表 10 SX2 出土遺物観察表 (石製品)	表 24 椋之原 16 号墳 A 主体出土遺物観察表 (装身具)
表 11 SD1 出土遺物観察表 (土製品)	表 25 椋之原 16 号墳 A 主体出土遺物観察表 (金属製品)
表 12 SD1 出土遺物観察表 (石製品)	表 26 椋之原 16 号墳 B 主体出土遺物観察表 (土製品)
表 13 SP1 出土遺物観察表 (土製品)	表 27 椋之原 16 号墳 B 主体出土遺物観察表 (金属製品)
表 14 SR1 出土遺物観察表 (土製品)	

写真図版目次

- 卷頭図版 1. 高田遺跡から斎灘を望む (南東より)
 卷頭図版 2. 椋之原 16 号墳 A 主体 横・鑑出土状況 (東より)
 卷頭図版 3. 椋之原 16 号墳 B 主体 折り曲げられた鑑出土状況 (北より)

第2章 本谷遺跡

- 図版 1 1. 調査地遠景（南東より）
2. 調査地掘削状況（南西より）
- 図版 2 1. 遺構検出状況①（南より）
2. 遺構検出状況②（南より）
- 図版 3 1. 遺構検出状況③（南西より）
2. SK1 土層検出状況（南西より）
- 図版 4 1. SP2 検出状況（南より）
2. SP4 土層検出状況（北西より）
- 図版 5 1. SX2・SR2 完掘状況（南より）
2. SX1・SD2・SP・SR1 完掘状況（南上方より）
- 図版 6 1. SR1 完掘状況（北より）
2. 作業風景（南西より）
- 図版 7 1. SX1 出土遺物①
- 図版 8 1. 出土遺物（SX1 ②：61・62・66・67、SX2：68～70・72、SD1：75、SP1：76、SR1：78・80）

第3章 高田遺跡

- 図版 9 1. 調査地遠景（北西より）
2. 棕之原 14号墳上部状況（北より）
- 図版 10 1. SK1 遺物出土状況①（南西より）
2. SK1 遺物出土状況②（南西より）
3. SK1 完掘状況（南西より）
- 図版 11 1. SK4 土層検出状況（西より）
2. SK4 遺物出土状況（西より）
3. SK9 完掘状況（北東より）
- 図版 12 1. 棕之原 14号墳陶器壺出土状況①（西より）
2. 棕之原 14号墳陶器壺出土状況②（西より）
- 図版 13 1. 棕之原 14号墳と土坑完掘状況（南東より）
2. SD1 完掘状況（北東より）
- 図版 14 1. 棕之原 15号墳A・B石棺検出状況（西より）
2. 棕之原 15号墳A・B石棺、16号墳A主体完掘状況（北西より）
- 図版 15 1. 棕之原 16号墳A主体遺物出土状況（南より）
2. 棕之原 15号墳A・B石棺、16号墳A・B主体完掘状況（南東より）
- 図版 16 1. 棕之原 16号墳B主体粘土・赤色顔料検出状況（北より）
2. 棕之原 16号墳B主体遺物出土状況（北より）
- 図版 17 1. 棕之原 16号墳B主体棺外赤色顔料検出状況（北西より）
2. 棕之原 16号墳B主体完掘状況（南西より）
- 図版 18 1. 調査区より鹿島を望む（南東より）
- 図版 19 1. 出土遺物（SK1：1・9・12・13、棕之原 14号墳①：19・20・23・28・29・34）
- 図版 20 1. 棕之原 14号墳出土遺物②
- 図版 21 1. 棕之原 16号墳出土遺物（A主体：36～38、B主体：39～44）

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

2006（平成18）年5月、松山市公営企業局建設整備課（以下、公営企業局）より、松山市本谷乙170番1、乙170番3の各一部の貯水池建設工事と松山市高田乙10番、乙11番3、乙11番4、乙223番4の各一部の貯水池造成及び進入路建設工事にあたり、当該地の埋蔵文化財確認申込書が松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。

申請地の本谷は、一部が削平され破壊された部分があり事前に踏査を実施した。その結果、弥生土器と土師器が表面採集されたため、5月29日に構造確認の試掘調査を行った。試掘調査からは、遺構と遺物が出土した。遺構は竪穴住居、溝、柱穴、遺物包含層を検出し、遺物は弥生土器や土師器、須恵器が出土した。

一方、申請地の高田は、既存の配水池（直径18mのコンクリート製タンク）、柑橘畠、雑木林の丘陵地である。5月12日と16日に試掘調査と踏査を実施した。その結果、配水池南側の丘陵部に幅2m、長さ3mの石組みと、申請地の南頂上部に直径約10mの高まりがあり石組みと瓦製祠を確認した。

これらのことより、文化財課、財團法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）と公営企業局は遺跡の取り扱いについて協議を行い、開発工事によって消失する遺跡に対して、記録保存のための発掘調査を実施することになった。発掘調査は文化財課の指導のもと、埋文センターが主体となり、本谷遺跡は2006（平成18）年7月24日より、高田遺跡は2006（平成18）年9月15日より本格調査を実施した。

第2節 調査・刊行組織

1. 調査組織〔平成18年度〕

松山市教育委員会

財團法人松山市生涯学習振興財團

教 育 長	土 居 貴 美	理 事 長	中 村 時 広		
事 務 局	局 長	石 丸 修	事 務 局	局 長	吉 間 一 雄
企 画 官	江 戸 通 敏			次 長	丹 生 谷 博 一
企 画 官	仙 波 和 典			調 査 監	杉 田 久 恵
企 画 官	宮 内 健 二	埋 蔵 文 化 財 センター 所長	兼 考 古 館 館 長	丹 生 谷 博 一	
文 化 財 課	課 長	家 久 則 雄	次 長 兼 管 理 係 長	重 松 幹 雄	
	主 幹	西 尾 幸 則	次 長 兼 調 査 係 長	田 城 武 志	
	主 查	栗 田 正 芳	調 査 担 当	高 尾 和 長	

2. 刊行組織〔平成26年4月1日現在〕

松山市教育委員会

公益財團法人松山市文化・スポーツ振興財團

教 育 長	山 本 昭 弘	理 事 長	中 山 紘 治 郎		
事 務 局	局 長	樹 田 二 郎	事 務 局	局 長	中 西 真 也

企画官	隅田 完二	次長兼総務部長	紺田 正彦
企画官	津田 慎吾	施設利用推進部長	玉井 弘幸
文化財課 課長	若江 俊二	埋蔵文化財センター所長兼考古館館長	田城 武志
主査	楠 寛輝	調査・研究リーダー	山之内 志郎
		調査・研究リーダー	橋本 雄一
		編集担当	高尾 和長
		写真担当	大西 朋子

第3節 立地と環境

1. 地理的環境

本遺跡が所在する北条平野は、瀬戸内海に突出する高繩半島の西縁部に位置する。この平野は、高繩山系に水源を持つ立岩川や河野川・高山川・粟井川の浸食・堆積作用によって形成された扇状地が接合し形成された南北に長く延びる沖積平野である。その東には標高 986m の高繩山をはじめとする高繩山系が広がりをみせており、西は斎灘に面し、その奥には防予諸島を望むことができる。本谷遺跡は、高山川と粟井川に挟まれた丘陵頂上部に位置し、高田遺跡は斎灘に流れ込む立岩川の南側の丘陵部に位置する。

2. 歴史的環境（第1図）

旧石器時代

遺物は龍徳寺山からナイフ形石器が、和田池遺跡で角錐状石器が採集されているほか、安養寺谷（辻新池）の池床で緑色珪岩製の細石核や姫島産黒曜石製の石刃などが出土している。

縄文時代

遺物は、前田池遺跡で後期の六軒家I式、小松川式土器が採集されているほか、晚期II期の土器も出土している。そのほか後期の土器が採集された遺跡としてマス池遺跡、サオ池遺跡、河原池遺跡、阿部ヶ谷池遺跡、俵原池遺跡がある。小山田遺跡では、後期初頭と考えられる疑似縄文を施した深鉢が出土している。また、発掘調査では善応寺大庭北遺跡から後期の土器、別府遺跡2区では自然流路から晩期の突帯文土器及び石器が出土している。

弥生時代

前期は片山遺跡で、前期末の集落を区画する溝や貯蔵穴から多量の土器や石器が出土している。また、南宮の戸貝塚では石鎚・石匙・貝製垂飾品などが出土している。高山遺跡では、土器が採集されている。このように、立岩川左右岸における独立丘陵上に遺跡が点在している。河野川左岸の善応寺では、大相院遺跡7・8区から貯蔵穴と考えられる土坑が数基検出されている。

中期になると遺跡数は増加し、恵良山南東麓に稗佐古遺跡、女夫池遺跡、菖蒲谷遺跡、西ヶ谷遺跡などの高地性集落が数多く確認されている。この時期に、低地より丘陵頂部に集落を形成する点は特徴といえる。中尾山遺跡2次調査では、焼成後穿孔のある完形土器が数多く出土しており注目される。

後期には、椋之原清水遺跡から製塙土器が出土している。大相院遺跡5～9区では後期後半～古

墳時代初頭にかけての遺構から、在地の土器に伴い讃岐系、畿内系や山陰系などの外来系土器が数多く出土している。その他、老僧奥遺跡、夏狩遺跡、柳ヶ内遺跡、波田遺跡、西久保遺跡、平山池遺跡、大成遺跡、神田遺跡、陣屋遺跡、平原遺跡、土居遺跡、観音堂遺跡などにおいて遺物が採取されている。

古墳時代

集落遺跡では、北条常保免遺跡で前期から後期の竪穴住居を検出していることから、当該期の集落が継続して営まれていたことが明らかとなった。

前期古墳では、立岩川周辺に櫛玉北壳命神社古墳（全長75m）や国津北古命神社古墳（全長50m）の前方後円墳が隣接して築造される。いずれも自然地形を利用して築造されており、墳丘には葺石を葺いており、円筒埴輪片が採集されている。また中期には浅海地区において、小竹古墳、名石古墳、若宮古墳、高山古墳などの箱式石棺を主体部とする古墳が数多く確認されている。上難波南古墳群は横穴式石室・竪穴式石室・箱式石室・木棺などを内部主体にもつ10基余りの古墳群で、中期以降に長期間にわたり築造されていたことが発掘調査によって明らかとなっている。

旧北条市域には300基以上の古墳が存在していると言われているが、そのほとんどが新城古墳群、上難波古墳群、小山田古墳群などの横穴式石室を主体部にもつ小規模の後期古墳である。その一方で、奥の谷古墳のような大型の石材を石室に用いる県下最大級の横穴式石室を有する古墳もある。これらの北部地域以外でも龍徳寺山古墳群、夏目古墳群などの中部地域、常竹大谷古墳群、センボ山古墳群などの南部地域でも古墳の存在が知られている。特に龍徳寺山1号墳は、玄室が前・後室の二室に分かれる特異な形態をもつ横穴式石室を主体部としており注目される。

古代

奈良・平安時代の遺跡は数多くなく、別府遺跡1区では掘立柱建物跡や土坑を検出しており、古代に位置付けられる遺構と考えられる。大相院遺跡10区ではSX内から古代の須恵器や円面硯が出土していることから、周辺地域に識字階級が存在した可能性が考えられる。その他、上難波庄部落に所在する薬師堂には奈良時代後半から平安時代初期と考えられる木心乾漆菩薩立像をはじめ、10~11世紀代の仏像が30体も安置されていることから、周辺に古代寺院が存在したことが考えられる。

中世

河野氏は風早郡河野郷の有力豪族で、13世紀以降にこの地域を拠点に台頭してきたが、その拠点を松山市道後の湯築城に移した後も隆盛を極めたことから、高縄山の西部山麓を中心に河野氏関連の中世山城が平野を取り囲むように存在している。これらの実態や築城時期については正式な発掘調査が行われていないために不明な点が多く、また旧来の根拠地である土居館は河野通盛が京都の東福寺に模して改築して善應寺としたが、現在のところ、その場所や寺域等を確認することはできていない。また大相院遺跡7区では、土坑から風字硯、短刀、龍泉窯系割花文青磁碗が出土していることから、識字階級の墓と考えられる。

【参考文献】

- 阪本安光ほか 1982 『北条市上難波南古墳群調査報告書』 愛媛県教育委員会
- 中野良一ほか 1990 『小山田Ⅱ遺跡 小山田文部』 (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 長井教秋 1992 『奥ノ谷山・西ヶ谷山遺跡群』 北条市教育委員会
- 大北冬彦ほか 1999 『片山遺跡 片山1号墳』 北条市教育委員会
- 土井光一郎 2003 『中丸山遺跡1次・2次』 (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 大北冬彦ほか 2004 『北条常保免遺跡』 北条市教育委員会
- 三好裕之ほか 2004 『西山寺跡遺跡 大相院遺跡 别府道跡』 (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 北条市企画人事課 2004 『飛 北条市合併記念誌』 北条市
- 山之内志郎 2008 『北条片岡跡』 松山市文化財調査報告書 第122集 松山市教育委員会・(財)松山市埋蔵文化財センター
- 西村直人 2014 『松山市内遺跡詳細分布調査』 松山市文化財調査報告書 第173集 松山市教育委員会・(公財)松山市埋蔵文化財センター
- 宮内慎一 2013 『河野小学校構内遺跡』 松山市埋蔵文化財調査年報25 松山市教育委員会・(公財)松山市埋蔵文化財センター



A 本谷遺跡

B 高田遺跡

- | | | | | | |
|-------------|-----------|----------|-----------|------------|-------------|
| ① 龍德寺山古墳群 | ② 和田池遺跡 | ③ 安養寺谷遺跡 | ④ 前田池遺跡 | ⑤ マス池遺跡 | ⑥ サオ池遺跡 |
| ⑦ 沢原池遺跡 | ⑧ 同部ヶ谷古道跡 | ⑨ 後原池遺跡 | ⑩ 小山田遺跡 | ⑪ 興応寺大庭北遺跡 | ⑫ 別府遺跡 |
| ⑬ 片山遺跡 | ⑭ 南宮の戸塚 | ⑮ 高山遺跡 | ⑯ 大相院遺跡 | ⑰ 神佐古遺跡 | ⑯ 女夫池遺跡 |
| ⑭ 黒瀬谷遺跡 | ⑯ 西ヶ谷遺跡 | ⑰ 中尾山遺跡 | ㉑ 榛ノ原清水遺跡 | ㉓ 宮懶園遺跡 | ㉔ 夏狩遺跡 |
| ㉑ 相が内遺跡 | ㉒ 油田遺跡 | ㉒ 西久保遺跡 | ㉔ 平山池遺跡 | ㉕ 大成遺跡 | ㉖ 神田遺跡 |
| ㉓ 墓屋遺跡 | ㉓ 平原遺跡 | ㉓ 西久保遺跡 | ㉖ 被呂堂遺跡 | ㉗ 北条常保免遺跡 | ㉗ 稲玉比売命神社古墳 |
| ㉔ 鹿澤比古命神社古墳 | ㉔ 小竹古墳 | ㉔ 名石古墳 | ㉗ 若木古墳 | ㉘ 高山古墳 | ㉘ 上難波南古墳群 |
| ㉕ 新城古墳群 | ㉔ 上難波古墳群 | ㉔ 小山田古墳群 | ㉙ 岩の谷古墳 | ㉙ 夏目古墳群 | ㉙ 常竹大谷古墳群 |
| ㉖ センボ山古墳群 | ㉖ 莱師堂 | ㉖ 榊之原山遺跡 | ㉙ 榊之原古墳群 | | |

第1図 調査地位置図及び周辺遺跡分布図

第2章 本谷遺跡

第1節 調査の経過

1. 調査に至る経緯

平成18年5月、松山市佐古甲231番及び232番1（以下、佐古区）並びに松山市本谷乙170番1及び乙170番3（以下、本谷区）における上水道施設建設工事に先立ち、埋蔵文化財確認願が、松山市公営企業局管理者（以下、申請者）より松山市教育委員会（以下、市教委）に提出された。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地内には該当していない。

これを受けた市教委は、当該地における遺跡の有無とその範囲及び性格を確認するため、財團法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）に委託し、平成18年5月22日に踏査を、同年5月29日に試掘調査を実施した。結果、佐古区では埋蔵文化財は確認できなかつたが、本谷区では弥生土器及び土師器を含む遺構及び遺物包含層を確認し、当該地の一部において遺跡が存在することが判明したため、これを申請者に通知するとともに保存について協議した。後日、当該地における文化財保護法第93条第1項による届出書が申請者より市教委に提出されたため、先の試掘結果と併せてこれを愛媛県教育委員会（以下、県教委）に進呈した。

その後、平成18年6月27日に県教委より遺跡を保護できない部分について発掘調査（記録保存）の指示が下りたため、市教委の指導の下、原因者負担により埋文センターが平成18年7月24日より発掘調査することとなった。

2. 調査の経緯

発掘調査（屋外調査）は、2006（平成18）年7月24日～同年9月8日の間に実施した。7月24日テントを設営し発掘道具、備品の搬入を行う。調査区を設定し重機と運搬車を使用して、表土の掘削を西側下部から行う。排水口は東側に設定した。7月26日より調査区を精査し遺構検出を行い、8月4日に高所作業車を使用し検出状況の写真撮影を行う。

検出した遺構は溝、柱穴、土坑、性格不明遺構、自然流路である。性格不明遺構（SX1）の下面からは土坑、柱穴、溝を検出した。調査区中央部と南東部の一部が、現代の廃棄土坑と作業場として掘削されている。各遺構にベルトを設定し、掘り下げを行う。遺構掘削後測量を行い、9月7日に高所作業車を使用し完掘状況の写真撮影を行う。9月8日に測量補足を行い発掘道具を片付け、備品を撤去し調査を終了する。

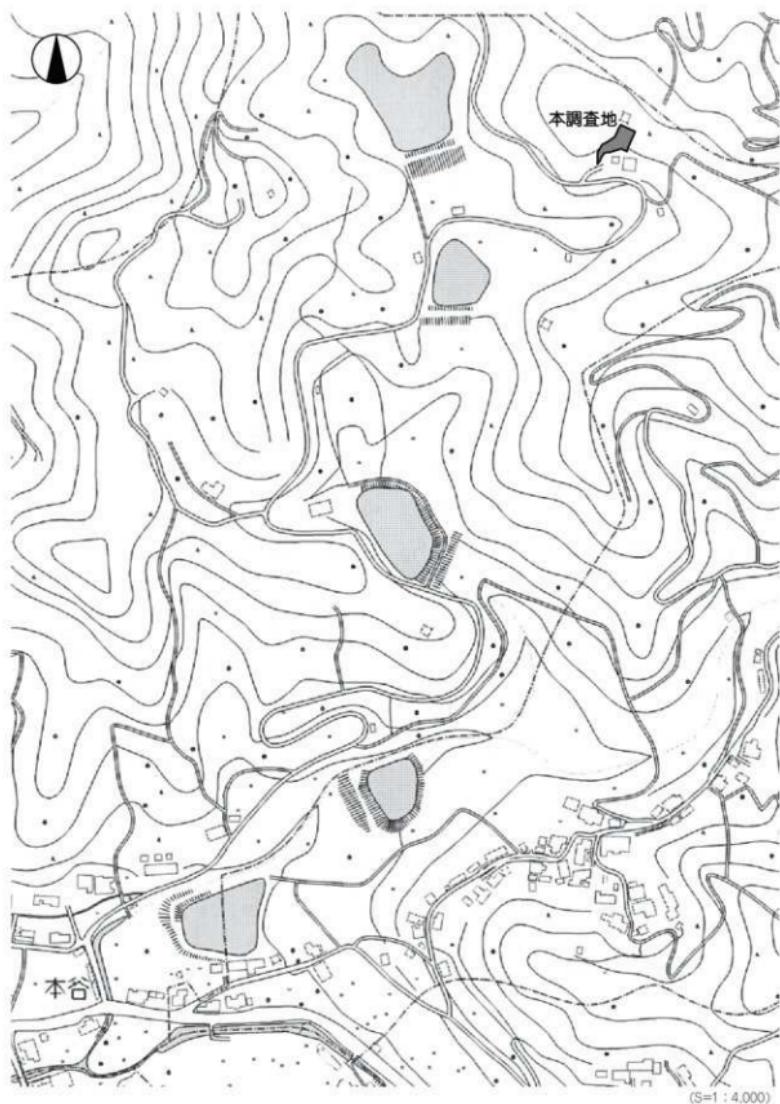
3. 調査体制

土地所有者 松山市公営企業局

調査委託 松山市公営企業局建設整備課

調査担当 財團法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター

高尾和長

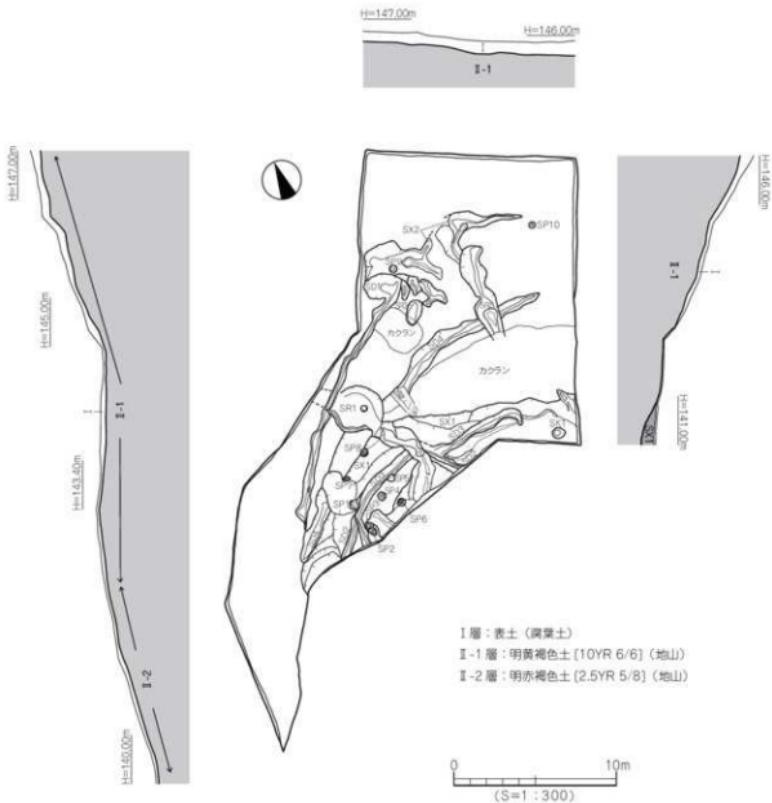


第2図 調査地位置図

遺構と遺物



第3図 遺構配置図



第4図 調査地西壁・北壁・東壁土層図

第2節 層位（第4図）

本調査では、2層の土層を確認した。I層 表土（腐葉土）、II-1層 明黄褐色土[10YR 6/6]（地山）、南西側でII-2層 明赤褐色土[25YR 5/8]（地山）であり、II層上面が遺構検出面となる。調査区は斜面であり、南北の高低差 7.5m を測る。

第3節 遺構と遺物（第3図）

検出した主な遺構は、土坑（SK）1基、溝（SD）4条、柱穴（SP）10基、自然流路（SR）3条、性格不明遺構（SX）2基である。遺物は、遺構内から出土している。その遺物には、縄文土器、弥生土器、土師器、漁撈具、須恵器、石製品（石鏃、石庖丁、敲石）、鉄製品（刀子）、炭化物がある。ここでは、遺構の大部分を占める時期決定の基準となる性格不明遺構から報告を行う。

1. 性格不明遺構（SX）

SXI（第5～9図、図版5・7・8）

SXIは調査区南部、E2～E・F6区に位置する。規模は長さ20.60m、幅5.00m、深さ0.8m～1.2mを測る。埋土は8層に分層でき、①層 マサ土、②層 黒褐色土[7.5YR 3/1]、③層 暗褐色土[10YR 3/3]、④層 にぶい褐色土[7.5YR 5/4]、⑤層 褐灰色土[7.5YR 4/1]（炭を含む。）、⑥層 褐灰色土[7.5YR 5/1]、⑦層 橙色土[7.5YR 6/6]、⑧層 灰褐色土[7.5YR 5/2]である。出土遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、漁撈具、石製品、鉄製品、炭化物がある。

出土遺物（1～60）

縄文土器（1）

鉢形土器（1）浅鉢。上げ底の底部。

弥生土器（2～8）

甕形土器（2・3）2は丸みを持つ底部。3は底部に焼成後の穿孔があり、所謂コシキとして使用されている。

壺形土器（4～6）4は上げ底の底部。5は複合口縁壺の口縁部。6は広口壺で頸部に断面三角形の突帯文と棒状浮文を貼り付ける。

高坏形土器（7）緩やかに広がる脚部。基部に2条の沈線文。

手づくね土器（8）ミニチュアの手づくね土器。

土師器（9）

甕形土器（9）緩やかに外反する口縁部で、口縁端部は面をもつ。

漁撈具（10～12）

土鍤（10～12）10は丸みがある形状で、中央に穿孔がある。11・12は棒状である。11は片方の端部を欠損し、端部に穿孔がある。12は完形品で、両端部に穿孔がある。

須恵器（13～60）

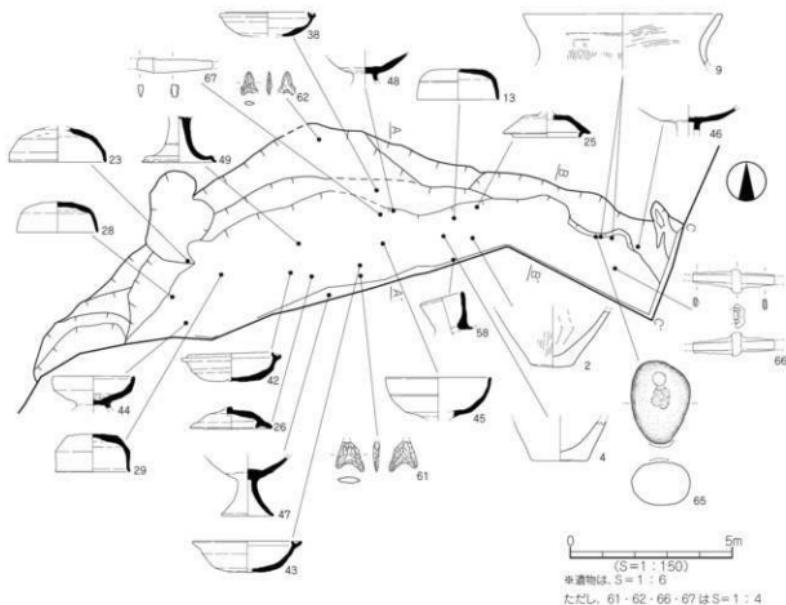
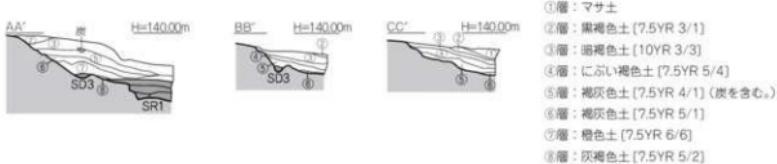
壺蓋（13～27）13～19は、口縁部と天井部を分ける境に断面三角形の稜を持つ。13の天井部は扁平である。14は丸みを持つ天井部。20～22は、天井部と口縁部を分ける稜は丸みを持ち、23・24

の口縁部から天井部は丸みを持つ。26はボタン状のつまみが付き、27は乳頭状の小さなつまみが付く。

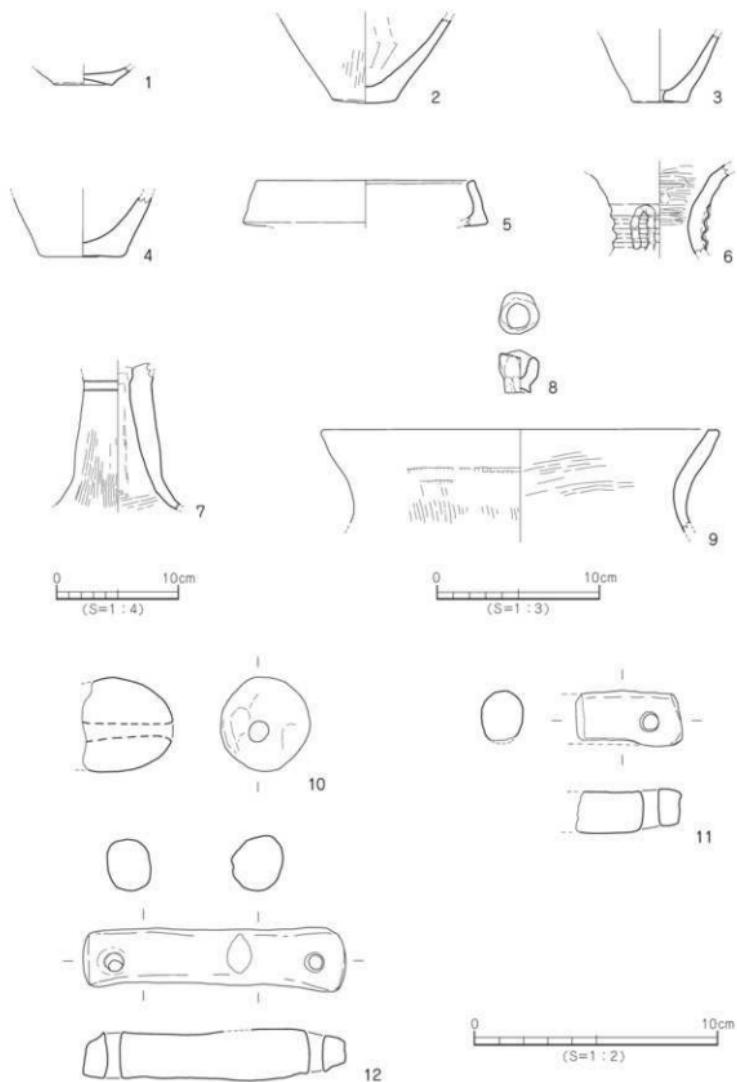
蓋（28・29）短頸壺の蓋で、29の口縁部は尖り気味で内傾する段を持つ。

坏身（30～43）30・31のたちあがりは内傾し、口縁端部は丸みを持つ。32のたちあがりは反り気味に内傾し、口縁端部は丸みを持つ。33～36のたちあがりは短く内傾し、口縁端部は尖り気味である。37のたちあがりは外反気味に内傾し、口縁端部は細く尖る。38～40のたちあがりは短く内傾し、口縁端部は尖る。41のたちあがりは、ごく短く内傾し、口縁端部は細く尖る。42・43のたちあがりは、ごく短く内傾し、口縁端部は尖る。

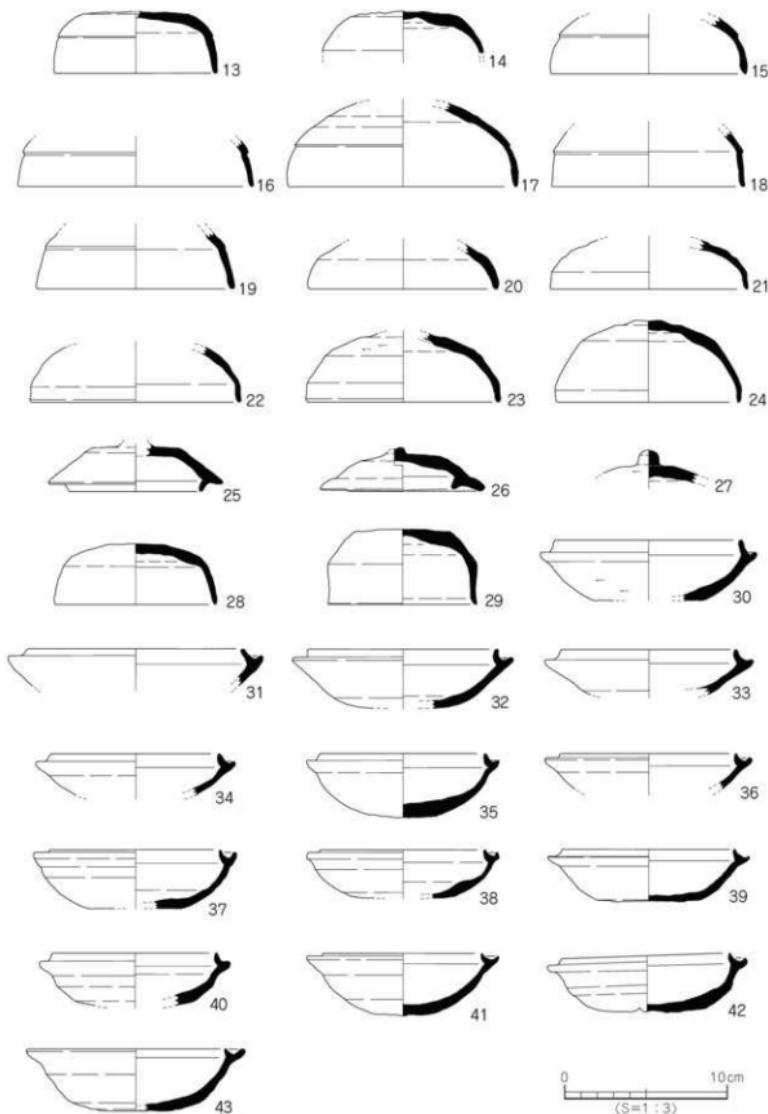
高坏（44～53）44は皿状の小型の坏部。45は塊状の丸みを帯びた坏部。46は扁平な坏底部。47の脚部は短く、「ハ」の字状に開く。48は丸みを持つ坏底部。49は脚中央部に1条の沈線を持つ。50の大きく広がる脚部の端部は面を持つ。51は大きく広がる脚部で、強いナデにより段を持つ。52の



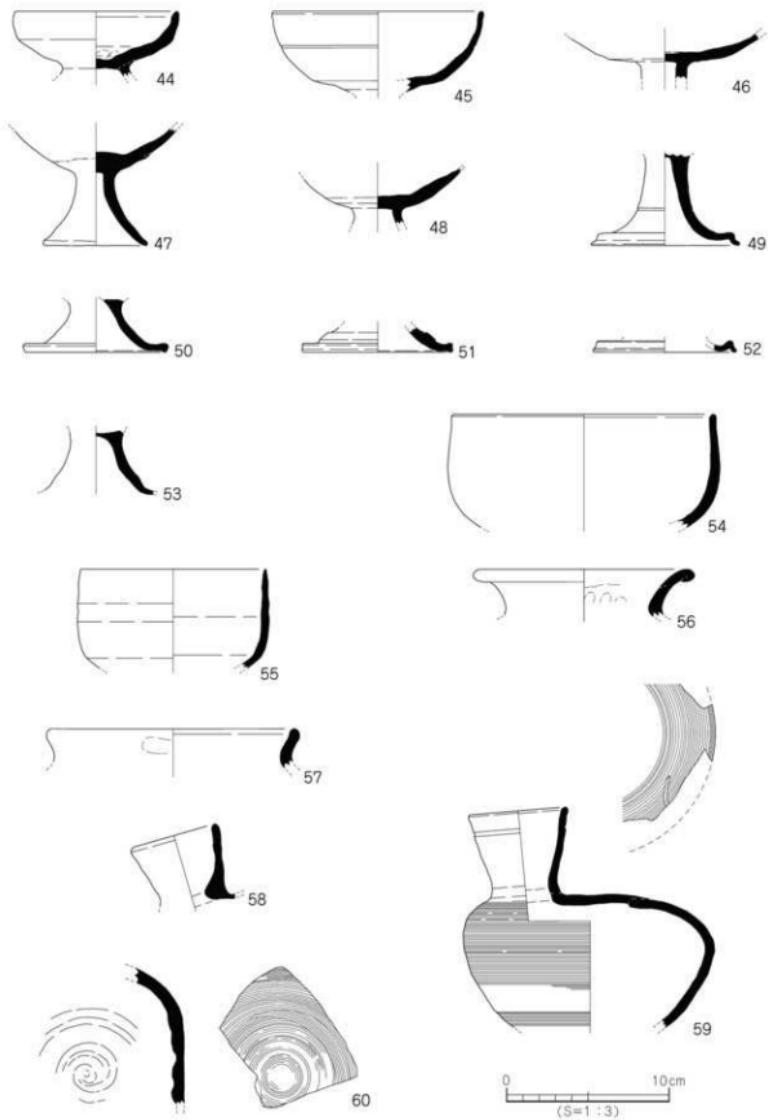
第5図 SX1測量図・遺物出土状況図



第6図 SX1出土遺物実測図(1)



第7図 SX1出土遺物実測図(2)



第8図 SX1出土遺物実測図（3）

脚端部は下方へ屈曲し、段をなす。53は大きく広がる脚部。

塊（54・55）54は丸みを帯びた体部に、直立気味に立ち上がる口縁部。55は体部から口縁部にかけて、ほぼ直立気味に立ち上がる。

壺（56）口縁部は大きく外反し、口縁端部は玉縁状に丸く肥厚する。

壺（57）口縁部は、短く外反する。

平瓶（58・59）58の口縁部は丸みを持つ。59の胴部は丸みをおびる。口縁部下に1条の沈線文を施し、肩部にヘラ記号の一部が残る。

横瓶（60）内面には粘土紐の巻き上げ痕が渦巻き状に残り、凹凸が激しい。

石製品（61～65）

石鎚（61・62）61は先端部を欠損し、62は基部の一部を欠損している。

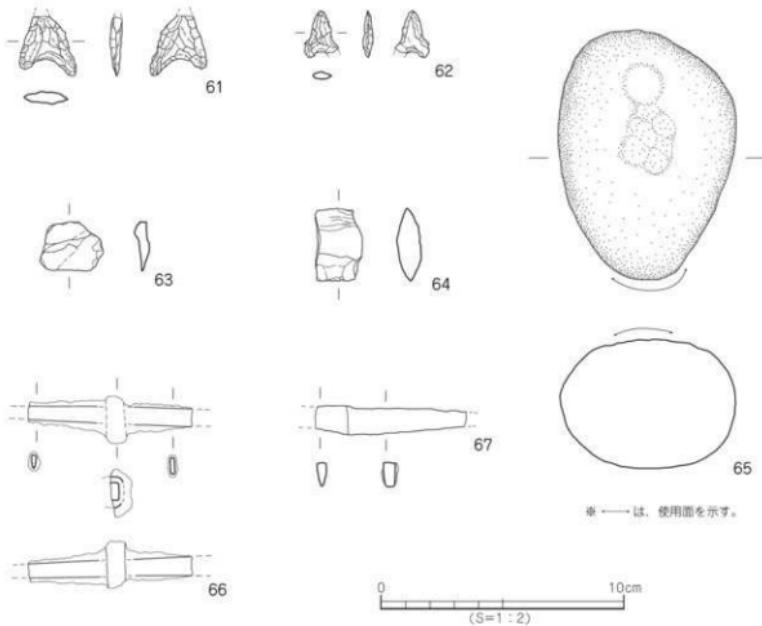
剝片（63・64）サスカイトの剥片である。

敲石（65）完形品。片面の中央部と片方の端部に敲打痕が顕著に残る。

鉄製品（66・67）

刀子（66・67）刃部の一部と茎部が残る。66は茎部と刃部との境に責金具を持つ。

時期：出土遺物の特徴より、7世紀中葉～後葉とする。



第9図 SX1 出土遺物実測図（4）

SX2(第11・12図、図版5・8)

SX2は、調査区北部C2～B・C4区に位置する。規模は、長さ10.50m、幅90cm～100cm、深さ40cm～70cmを測る。出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器の完形品と石庖丁がある。

出土遺物 (68 ~ 72)

須惠器 (68 ~ 71)

坏蓋 (68) つまみはボタン状で、中央部が窪む。口縁部は短く、端部は尖り、かえり端部は丸みを持つ。焼け亞互が跡らしい。

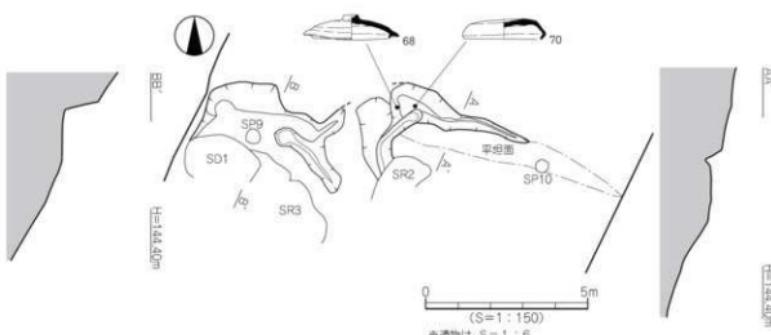
坏身(69)たちあがりはごく短く、受部はやや上方に立ち上がる。受部端部と口縁部が、ほぼ同じ高さである。

蓋 (70) 短頭壺の蓋である。口縁部は外反しながら立ち上がり、天井部との境目に甘い稜を持つ。

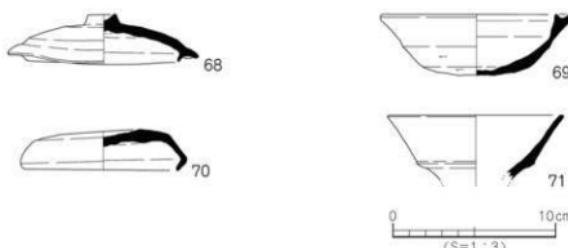
雌(71) 口縁部は大きく外反し、口縁端部は丸みを持つ。口縁部と頭部の境目は、明瞭な稜を持つ。
不育♀(72)

石磨工(72) 材質は緑色に黒で、1/2の球形。表面に研磨痕が残り、中央上部に穿孔がある所残す。

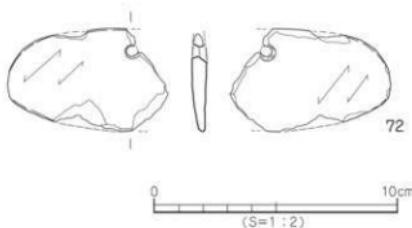
時期、出土遺物の特徴より、7世紀中葉～後葉とする。



第10図 SX2測量図・遺物出土状況図



第11図 SX2出土遺物実測図(1)



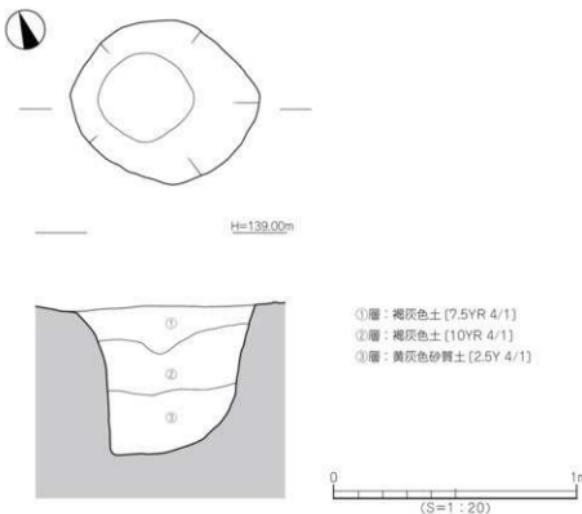
第12図 SX2出土遺物実測図（2）

2. 土坑（SK）

SK1（第13図、図版3）

SK1は、調査区南東部のE3区に位置する。SX1の床面にて検出した土坑で、平面形態は円形である。規模は、径80cm×60cm、深さ60cmを測る。断面形態は、逆台形状である。埋土は3層に分層でき、①層 褐灰色土[7.5YR 4/1]、②層 褐灰色土[10YR 4/1]、③層 黄灰色砂質土[2.5Y 4/1]である。出土遺物は土師器があるが、実測可能な遺物はない。

時期：SX1床面からの検出であるため、7世紀中葉～後葉とする。



第13図 SK1測量図

3. 溝 (SD)

SD1 (第 14・15 図、図版 8)

SD1 は、調査区の西部 C4 ~ E6 区に位置する。規模は長さ 16.70m、幅 20cm ~ 30cm、深さ 20cm ~ 25cm、高低差 2.1m を測る。断面形態は「U」字状である。埋土は、にぶい黄橙色砂質土 [10YR 7/4] の単層である。出土遺物は、弥生土器と石鎌がある。

出土遺物 (73 ~ 75)

弥生土器 (73・74)

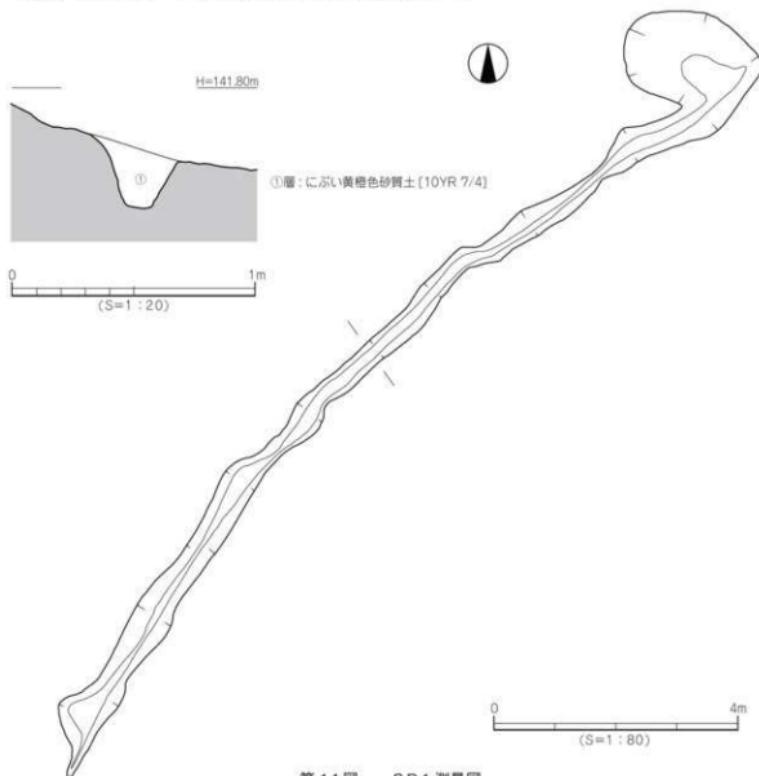
壺形土器 (73) 頭部は直立気味に立ち上がり、口縁部がやや外反する。

高坏形土器 (74) 浅い坏部から大きく外反する口縁部を持つ。

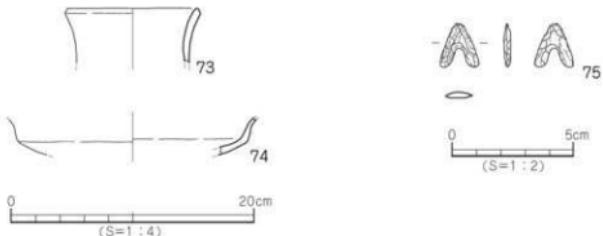
石製品 (75)

石鎌 (75) 完形品。石材はサヌカイトである。

時期：明確ではないが、出土遺物から弥生時代以降とする。



第 14 図 SD1 測量図

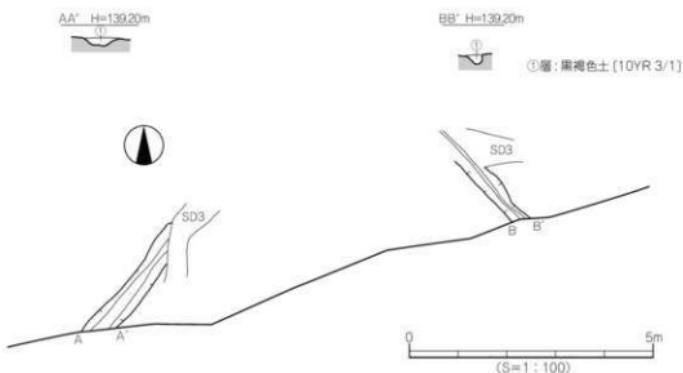


第15図 SD 1出土遺物実測図

SD2 (第16図、図版5)

SD2は、調査区南部E4～F6区に位置する。SX1の床面にて検出した溝で、SD3に切られる。規模は、長さ11.00m、幅25cm～50cm、深さ15cm～20cmを測る。断面形態はレンズ状である。埋土は黒褐色土[10YR 3/1]の単層で、とても硬い。出土遺物は弥生土器と土師器があるが、実測可能な遺物はない。

時期：SX1の床面からの検出であるため、7世紀中葉～後葉とする。

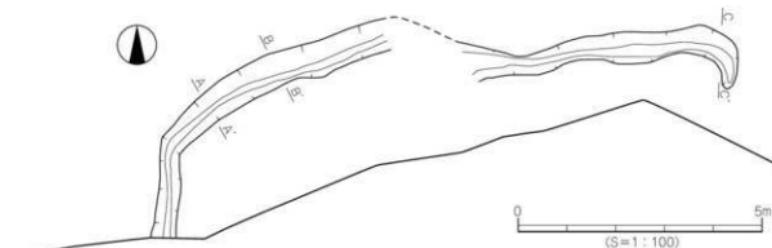
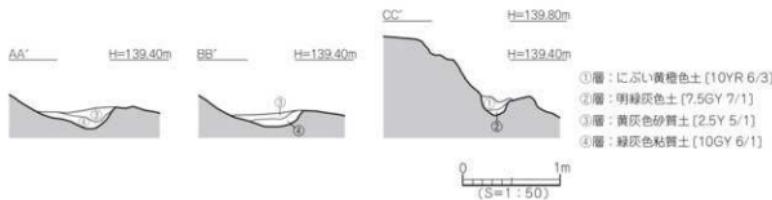


第16図 SD 2測量図

SD3 (第17図)

SD3は、調査区南部E3～F5区に位置する。SX1の床面にて検出した溝で、SD2を切る。規模は長さ14.00m、幅45cm～90cm、深さ10cm～20cmを測る。断面形態はレンズ状である。埋土は4層に分層でき、①層 にぶい黄褐色土[10YR 6/3]、②層 明緑灰色土[7.5GY 7/1]、③層 黄灰色砂質土[2.5Y 5/1]、④層 緑灰色粘質土[10GY 6/1]である。東西で埋土にわずかに違いがある。出土遺物は土師器があるが、実測可能な遺物はない。

時期：SX1床面からの検出であるため、7世紀中葉～後葉とする。

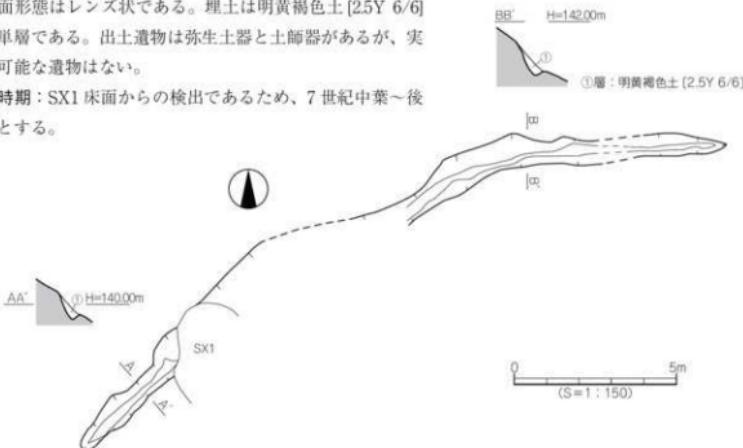


第17図 SD3測量図

SD4（第18図）

SD4は、調査区中央部D2～F6区に位置する。規模は長さ23.00m、幅40cm～120cm、深さ10cm～15cmを測る。断面形態はレンズ状である。埋土は明黄褐色土[2.5Y 6/6]の単層である。出土遺物は弥生土器と土師器があるが、実測可能な遺物はない。

時期：SX1床面からの検出であるため、7世紀中葉～後葉とする。



第18図 SD4測量図

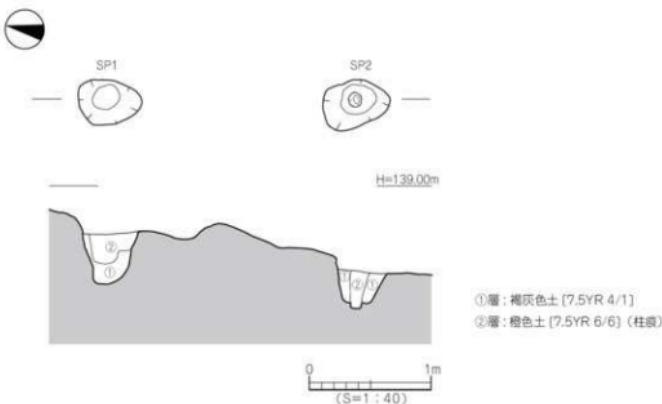
4. 柱穴 (SP) (第19~22図、図版4・8)

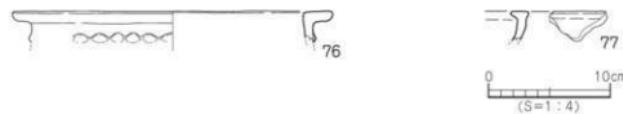
調査では、柱穴10基を検出した。SP1とSP2は南北方向に検出した柱穴で、SP1はE5区に位置し、平面形態は円形で規模は径40cm~44cm、深さ45cmを測る。埋土は褐灰色土[7.5YR 4/1]である。柱痕の平面形態は円形で、規模は径20cmを測る。柱痕埋土は橙色土[7.5YR 6/6]である。SP2はF5区に位置し、平面形態は円形で規模は径38cm~40cm、深さ32cmを測る。埋土は褐灰色土[7.5YR 4/1]である。柱痕の平面形態は円形で、規模は径15cmを測る。柱痕埋土は橙色土[7.5YR 6/6]である。SP3~5は東西方向に検出した柱穴で、SP3はE5区に位置し、平面形態は円形で規模は径44cm~45cm、深さ56cmを測る。埋土は橙色土[7.5YR 6/6]である。柱痕の平面形態は円形で、規模は径10cmを測る。柱痕埋土は褐灰色土[7.5YR 4/1]である。SP4はE5区に位置し、平面形態は円形で規模は径46cm~50cm、深さ62cmを測る。埋土は橙色土[7.5YR 6/6]である。柱痕の平面形態は円形で、規模は径15cmを測る。柱痕埋土は褐灰色土[7.5YR 4/1]である。SP5はE5区に位置し、平面形態は円形で規模は径45cm、深さ26cmを測る。埋土は橙色土[7.5YR 6/6]である。柱痕の平面形態は円形で、規模は径15cmを測る。柱痕埋土は褐灰色土[7.5YR 4/1]である。SP6はE5区に位置し、平面形態は円形で規模は径42cm~52cm、深さ24cmを測る。埋土は不明である。SP7はE5区に位置し、平面形態は楕円形で規模は径18cm~32cm、深さ18cmを測る。埋土は不明である。SP8はE5区に位置し、平面形態は円形で規模は径40cm~50cm、深さ59cmを測る。埋土は不明である。SP9はC4区に位置し、平面形態は円形で規模は径45cm~47cm、深さ47cmを測る。埋土は不明である。SP10はC2区に位置し、平面形態は円形で規模は径38cm、深さ44cmを測る。埋土は不明である。遺物は、SP1・2・4・9から弥生土器が出土しており、とりわけSP1からは弥生時代中期中葉や後期の土器片が出土している。なお、SP4の遺物は柱痕内からの出土である。

SP1出土遺物 (76・77)

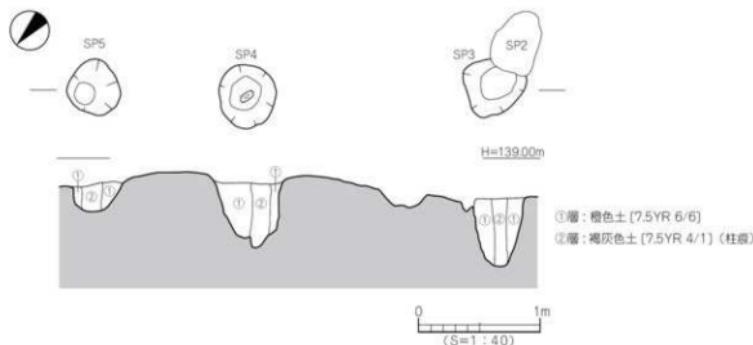
彫形土器 (76) 逆「L」字状の口縁部で、口縁下部に押圧のある断面三角形の突帯文を貼り付ける。

高環形土器 (77) 口縁端部は内側に拡張される。

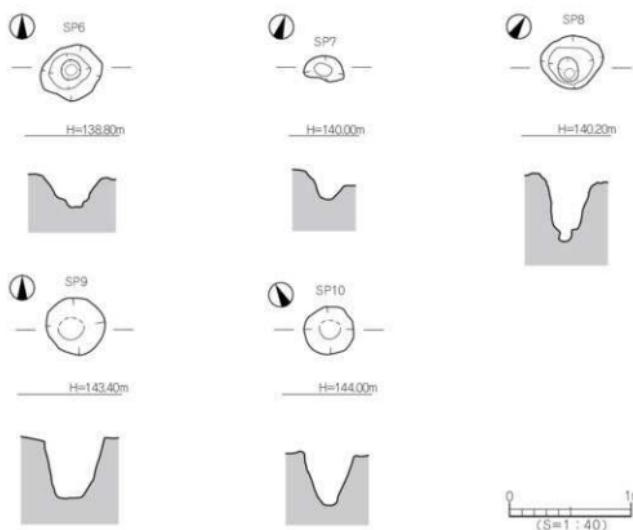




第20図 SP 1出土遺物実測図



第21図 SP 3~5測量図



第22図 SP 6~10測量図

5. 自然流路 (SR)

SR1 (第24図、図版5・6・8)

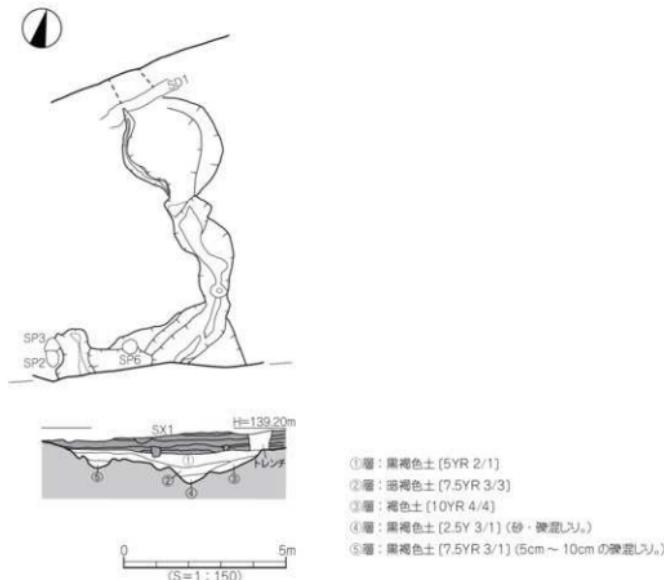
SR1は、調査区西部から南部のD5～E4・5区に位置し、SD1・SD3・SD4・SX1に切られる。規模は検出長9.10m、幅1.10m～3.00m、深さ15cm～86cm、高低差3.7mを測る。埋土は5層に分層でき、①層 黒褐色土[5YR 2/1]、②層 暗褐色土[7.5YR 3/3]、③層 褐色土[10YR 4/4]、④層 黒褐色土[2.5Y 3/1]（砂・礫混じり。）、⑤層 黒褐色土[7.5YR 3/1]（5cm～10cmの礫混じり。）である。出土遺物は、弥生土器がある。

出土遺物 (78～82)

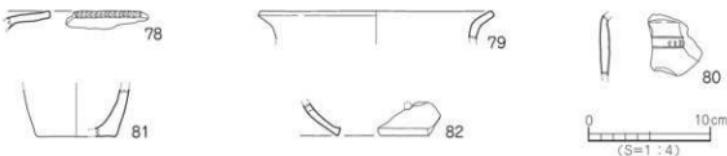
甕形土器(78～81)78は大きく外反する口縁部で、口縁端面に刻目を持つ。79は外反する口縁部で、端部は「コ」字状である。80は口縁部下に2条の沈線文が巡り、沈線文間に連続しない刺突文を施す。81は平底の底部。

高坏形土器(82) 大きく開く脚裾部。透かしの一部が残る。

時期：出土遺物には時期幅が認められるが、概ね弥生時代前期末から後期まで存在した流路と推測される。



第23図 SR1測量図

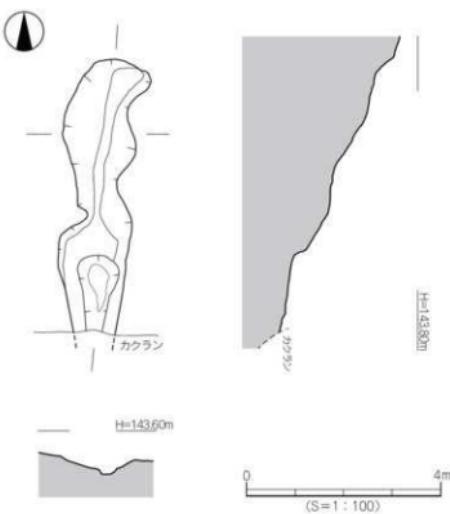


第24図 SR1出土遺物実測図

SR2 (第25図、図版5)

SR2は、調査区北東部C3～D3区に位置する。南側は削平されている。溝底は凹凸が見られる。規模は長さ5.60m、幅80cm～120cm、深さ20cm～55cm、高低差2.0mを測る。出土遺物は弥生土器があるが、実測可能な遺物はない。

時期：検出状況と出土遺物から、SR1と同じく弥生時代前期末から後期の流路とする。

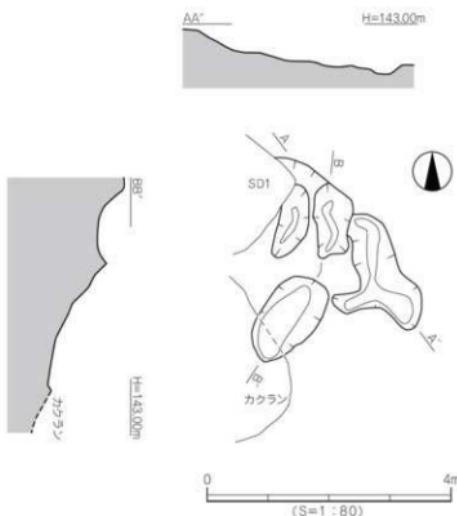


第25図 SR2測量図

SR3 (第26図)

SR3は、調査区北部C3・4区に位置し、平面形態は不整形な楕円形の集まりである。規模は長さ3.50m、幅300m、深さ10cm～30cmを測る。高低差1.2mを測る。出土遺物は弥生土器があるが、実測可能な遺物はない。

時期：明確ではないが、SR1と同じ弥生時代前期末から後期の流路と考える。



第26図 SR3測量図

第4節 小 結

本調査は、弥生時代から古墳時代における集落構造解明及び範囲確認を主目的として実施した。本調査地の立地は小川谷から佐古に抜ける農道頂上部の標高145mに位置し、弥生時代と古墳時代の遺構と縄文時代から古代までの遺物を確認することができた。

弥生時代の遺構はSR1があり、弥生時代前期末から後期の遺物が出土している。調査区内からは当該期の住居址や土坑などの生活に関係する遺構は検出されなかったが、SR内から遺物が出土したことから、周辺には弥生時代前期末から後期の生活関連遺構が存在すると思われる。

古墳時代の遺構では、性格不明遺構のSX1がある。SX1は段カットした上段にSD4、下段にSD2・3を巡らし、平坦面には土坑と柱穴が位置する。このSX1は斜面を壇状に掘削し、平坦面を作り出し遺構を配置する壇状遺構と考えられる。出土遺物には須恵器があり、時期は7世紀中葉～後葉である。なお、本調査での出土遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土錘、石鎌、石庖丁、敲石、刀子、炭化物がある。

調査地を含めた周辺には、縄文時代から古墳時代後期までの幅広い時期にかけて生活が行われていた事が確認でき、縄文時代～古墳時代の各時代の生活拠点である集落（住居址）が存在するものと思われる。本調査地東側斜面には開墾間もない柑橘畑が広がり、地表面から弥生土器、土師器、須恵器が採取できることから、本谷遺跡の範囲が谷部を挟み東側に大きく広がることが推測でき、周辺の調査が進めば壇状遺構を含め詳細な集落構造が明らかになると思われる。また、土錘3点の出土は標高145mの山間部からの出土であり大変興味深い資料である。

遺構・遺物一覧　－凡例－

(1) 以下の表は、本調査地検出の遺構と出土遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺物観察表の各掲載について

法量欄 () : 推定復元値

調整欄 土製品の各部名称を略記した。

例) 口→口縁部、肩→肩部、胴→胴部、体→体部、底→底部、脚→脚部、天→天井部、口上→口縁上部、口下→口縁下部、頭上→頭上部、頭下→頭下部、胴上→胴上部、胴下→胴下部、天上→天井上部、天下→天井下部、脚上→脚上部、脚下→脚下部、つまみ→つまみ部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、密→精製土、金→金ウンモ、赤→赤色酸化土粒。

() の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長(1~4) → 「1mm ~ 4mm 大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表1 性格不明遺構一覧

性格不明 遺構 (SX)	地区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	E2 ~ E·F6	半円形	逆台形状	20.60 × 5.00 × 0.80 ~ 1.20	マサ土・黒褐色土 暗褐色土・にぶい 褐色土・根灰色土 褐色土・灰褐色土	圓文土器・瓶形 土器・土瓶型土器 石製品・瓦製品 灰化物	7世紀中葉～後葉	
2	C2 ~ B·C4	不整形	逆台形状	10.50 × 0.90 ~ 1.00 × 0.40 ~ 0.70	不明	弦生土器・土 罐器・埴輪器	7世紀中葉～後葉	定形の頃高 出士

表2 土坑一覧

土坑 (SK)	地区	平面形	断面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	E3	円形	逆台形状	0.80 × 0.60 × 0.60	褐灰色土 黄灰色砂質土	土師器	7世紀中葉～後葉	

表3 溝一覧

溝 (SD)	地区	方向	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	C4 ~ E6	北東～南西	「U」字状	16.70 × 0.20 ~ 0.30 × 0.20 ~ 0.25	にぶい・黄褐色砂質土 石製品	弥生土器 石製品	弥生時代以降	高低差 21 m
2	E4 ~ F6		レンズ状	11.00 × 0.25 ~ 0.50 × 0.15 ~ 0.20	黒褐色土	弥生土器 土師器	7世紀中葉～後葉	SD3 に切られる。
3	E3 ~ F5	東～南西	レンズ状	14.00 × 0.45 ~ 0.90 × 0.10 ~ 0.20	にぶい・黄褐色土・明 緑灰色土・黄灰色砂 質土・灰褐色粘土質土	土師器	7世紀中葉～後葉	SD2 を切る。
4	D2 ~ F6	東～南西	レンズ状	23.00 × 0.40 ~ 1.20 × 0.10 ~ 0.15	明黄褐色土	弥生土器 土師器	7世紀中葉～後葉	

表4 柱穴一覧

柱穴 (SP)	地区	平面形	規 模 長径×短径×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	E5	円形	0.44 × 0.40 × 0.45	褐色土 橙色土 (柱痕)	弥生土器	7世紀中葉～後葉	
2	F5	円形	0.40 × 0.38 × 0.32	褐色土 橙色土 (柱痕)	弥生土器	7世紀中葉～後葉	
3	E5	円形	0.45 × 0.44 × 0.56	橙色土 褐色土 (柱痕)		7世紀中葉～後葉	
4	E5	円形	0.50 × 0.46 × 0.62	橙色土 褐色土 (柱痕)	弥生土器 Hirayodai出土	7世紀中葉～後葉	
5	E5	円形	0.45 × 0.45 × 0.26	橙色土 褐色土 (柱痕)		7世紀中葉～後葉	
6	E5	円形	0.52 × 0.42 × 0.24	不明		7世紀中葉～後葉	
7	E5	椭円形	0.32 × 0.18 × 0.18	不明		7世紀中葉～後葉	
8	E5	円形	0.50 × 0.40 × 0.59	不明		7世紀中葉～後葉	
9	C4	円形	0.47 × 0.45 × 0.47	不明	弥生土器	7世紀中葉～後葉	
10	C2	円形	0.38 × 0.38 × 0.44	不明		7世紀中葉～後葉	

表5 自然流路一覧

自然流路 (SR)	地 区	方 向	断面形	規 模 長さ×幅×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	D5～E4・5北西～南西	北西～南西	レンズ状	9.10 × 1.10 ~ 3.00 × 0.15 ~ 0.86 里南色土・暗褐色土・褐 色土・黒褐色土(砂)、礫混 じり里南色土(鐵道じり)	弥生土器	弥生時代 前期末～後期	高低差37 m SD1・SD3・SD4・ SK1に切られたり	
2	C3～D3	北～南	レンズ状	5.60 × 0.80 ~ 1.20 × 0.20 ~ 0.55	不明	弥生土器	弥生時代 前期末～後期	高低差2.0 m
3	C3・4		レンズ状	3.50 × 3.00 × 0.10 ~ 0.30	不明	弥生土器	弥生時代 前期末～後期	高低差1.2 m

表6 S X 1出土遺物観察表 (土製品)

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形 态・施 文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
1	浅鉢	底径 (4.8) 残高 14	上げ底の底部。 ②マメツ ③指おさえ・ナデ	マメツ	マメツ	淡赤褐色 褐色	石・長径 ~ 5金 ○		
2	甕	底径 (5.2) 残高 7.0	やや丸みのある平底。 ④ナデ	ハケ G 本 /cm →ナデ ④ナデ	工具によるナデ ナデ	褐色 褐色	石 (1 ~ 3) 赤 ○	黒斑	
3	甕	底径 (4.6) 残高 5.6	底部に焼成後の穿孔。コシキとして ナデ	ナデ	マメツ	赤褐色 黒褐色	石 (1 ~ 3) ○		
4	甕	底径 (6.6) 残高 4.9	上げ底。	マメツ (指痕直)	マメツ	にぶい褐色 明赤褐色	石・長径 ~ 4 ○		
5	甕	口径 (17.8) 残高 3.8	複合口縁甕。口縁抵張部は内傾し、 縁端部は「コ」字状。	マメツ	マメツ	黄褐色 黒褐色	石・長径 ~ 5 ○		
6	甕	残 高 7.3	頭部に断面三角形の貼り付け突帯文 3条。突帯文上面に逆「U」字状の 棒状浮文を貼り付ける。	ヨコナデ ヨコナデ	ミガキ ナデ	褐色 褐色	石・長 (1 ~ 3) ○		

出土遺物観察表

S X 1 出土遺物観察表 (土製品)

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
7	高杯	残高 12.0	縁やかに広がる筒状の脚部。脚基部に2条の沈線文が巡る。	ハケ (4本/cm)	⑩しまり痕 ⑪ハケ日本/cm	褐灰色 褐灰色	石・長径 ~ 2 ○		
8	ミニ チュア	口径 1.5 底径 1.5-1.7 器高 2.1-2.6	手づくね土器。	ナデ 指おさえ	ナデ 指おさえ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長径 ~ 3 ○	黒斑	7
9	甕	口径 (24.2) 残高 6.3	縁やかに外反する口縁部。口縁端部は「コ」字状で、口縁端面はやや垂む。	⑫ヨコナデ ⑬ヨコナデ ⑭ハケ日本/cm ⑮ハケ日本/cm	明赤褐色 にぶい橙色	石・長径 ~ 3 ○			
10	土瓶	長さ 3.7 幅 3.9	丸みがある形状で、中央部に穿孔が残る。重さ 47.850 g。	ナデ		にぶい橙色	石・長径 ~ 3 ○	黒斑	7
11	土瓶	長さ 4.4 幅 2.3 最大厚 1.7	棒状で端部に穿孔が残る。	ナデ		褐色	石・長径 ~ 2 ○		7
12	土瓶	長さ 10.8 幅 2.7 最大厚 2.1	棒状で両端部に穿孔が残る。完形品。重さ 60.220 g。	ナデ		明黄褐色	石・長径 ~ 3赤 ○		7
13	环蓋	口径 (10) 器高 3.8	口縁部と天井部の境目に断面三角形の棱を持つ。天井部は扁平。	⑯回転ヘラ切り →ナデ ⑰回転ナデ	回転ナデ	灰白色・灰色 灰白色	長 (I ~ 2) ○		
14	环蓋	残高 2.6	口縁部と天井部の境目に断面三角形の棱を持つ。丸えをおびた天井部。	⑱回転ヘラケズリ ⑲回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰黄色	石・長 (I ~ 2) 密 ○		
15	环蓋	口径 (11.8) 残高 3.5	口縁部と天井部の境目に断面三角形の棱を持つ。口縁端部はやや内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長 (微砂粒) 密 ○		
16	环蓋	口径 (14.4) 残高 2.8	口縁部と天井部の境目に断面三角形の棱を持つ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長 (I) ○		
17	环蓋	口径 (14.2) 残高 5.2	天井部は丸みを持ち、口縁部と天井部の境目に断面三角形の棱を持つ。口縁端部は尖り気味。	⑳回転ヘラケズリ ㉑回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (I) ○		
18	环蓋	口径 (11.8) 残高 3.4	口縁部は直立気味に立ち上がり、口縁部と天井部の境目に断面三角形の棱を持つ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長径 ~ 2 ○		
19	环蓋	口径 (11.7) 残高 3.5	口縁端部は丸みがあり、口縁部と天井部の境目は断面三角形の棱を持つ。	回転ナデ	回転ナデ	黄灰色 灰色	石・長 (I) ○		
20	环蓋	口径 (11.4) 残高 2.8	口縁部と天井部との境目は甘い棱となる。口縁端部は丸みを持つ。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長 (I) ○		
21	环蓋	口径 (12.0) 残高 3.1	口縁部は直立気味に強く立ち上がり、天井部との境目は甘い棱となる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○		
22	环蓋	口径 (12.8) 残高 3.4	口縁部は直立気味に強く立ち上がり、天井部との境目は甘い棱となる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長 (I) ○		
23	环蓋	口径 (11.9) 残高 4.2	口縁部から天井部にかけて丸みをおびる。口縁端部は丸みを持つ。	㉓回転ヘラケズリ ㉔回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長 (I) ○		
24	环蓋	口径 (11.0) 残高 5.0	口縁部から天井部にかけて丸みをおびる。口縁端部は尖り気味。	㉕自然釉かひれ ㉖回転ナデ	回転ナデ	灰白色・灰色 灰白色	石・長径 ~ 2 ○	自然釉	
25	环蓋	口径 (8.0) 残高 3.0	口縁端部とかえり端部は丸みを持つ。厚手。	㉗回転ナデ ㉘回転ヘラケズリ ㉙回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰 オリーブ灰	砂粒 密 ○		
26	环蓋	口径 (6.6) 器高 2.7	口縁端部とかえり端部の高さがほぼ同じ。ボタン状のつまみが付く。厚手で小型。	㉚回転ナデ ㉛回転ヘラケズリ ㉜回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長 (I) ○		7
27	环蓋	残高 2.0	乳頭状の小さなつまみが付く。	㉟回転ナデ ㉞回転ヘラケズリ ㉟回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長 (I) ○		
28	蓋	口径 (10.0) 残高 3.7	口縁部と天井部との境目は甘い棱となる。口縁端部は尖り気味。	㉟回転ナデ ㉞回転ヘラケズリ ㉟回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長 (I ~ 2) ○		

S X 1 出土遺物觀察表（土製品）

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
29	蓋	口径 器高	9.0 4.6	口縁部は直立気味に立ち上がる。口 縁部は丸り気味で、やや内傾する。	⑤回転ヘタ切り →ナデ ⑤回転ナデ	回転ナデ	暗青灰色 暗青灰色	石・長(1~3) ○	7
30	环身	口径 残高	11.4 3.8	たちあがりは内傾し、口縁部は丸 みを持つ。受部はごく短く端部は丸 い。底部は扁平である。	⑤回転ナデ ⑤回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長(1) ○	
31	环身	口径 残高	13.2 2.2	たちあがりは大きく内傾し、口縁部 は丸みを持つ。受部は短く端部は丸 い。	⑤回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(微砂粒) 密 ○	
32	环身	口径 残高	11.7 3.6	たちあがりは反り気味に内傾し、口 縁部は丸みを持つ。受部は短く端 部は丸い。底部は丸みを持つ。	⑤回転ナデ ⑤回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(1~3) ○	
33	环身	口径 残高	10.8 2.9	たちあがりは短く内傾し、口縁部 は丸みである。	⑤回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ○	
34	环身	口径 残高	10.2 2.6	たちあがりは短く内傾し、口縁部 は丸みである。受部はごく短く端 部は丸い。	⑤回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ色 灰色	長(1) 密 ○	自然釉
35	环身	口径 器高	10.0 4.0	たちあがりは短く内傾し、口縁部 は丸みである。受部は短く端部 は丸い。底部は丸みを持つ。	⑤回転ナデ ⑤回転ヘラケズリ →ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1) ○	
36	环身	口径 残高	10.8 2.2	口縁部は丸り気味で、かえり端部 は丸みを持つ。	⑤回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ○	
37	环身	口径 器高	10.4 3.7	たちあがりは外反気味に内傾し、口縁 部は端くぐる。受部は上方に立ち上 り、端部は丸い。底部は扁平である。	⑤回転ナデ ⑤回転ヘラケズリ →ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(1) ○	
38	环身	口径 残高	10.0 2.9	たちあがりは短く内傾し、口縁部 は丸みを持つ。受部は上方に短く屈曲し、 端部は丸い。底部は扁平である。	⑤回転ナデ ⑤回転ヘラケズリ →ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) 密 ○	
39	环身	口径 器高	10.6 3.2	たちあがりは短く内傾し、口縁部 は丸みである。受部はごく短く細い。底部 は扁平である。	⑤回転ナデ ⑤回転ヘタ切り →ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(砂粒) 密 ○	
40	环身	口径 残高	10.0 3.2	たちあがりは短く内傾し、口縁部 は丸みである。受部は短く厚手 で端部は丸い。	⑤回転ナデ ⑤回転ヘラケズリ →ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ○	
41	环身	口径 器高	9.6 3.9	たちあがりはごく短く内傾し、口縁部 は丸く実る。受部はやや上方に立ち上 り、端部は丸い。底部は丸みを持つ。	⑤回転ナデ ⑤回転ヘラケズリ →ナデ →ナデ 5~6mm	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○	自然釉
42	环身	口径 器高	10.4 3.7	たちあがりはごく短く内傾し、口縁部 は丸く実る。受部はやや上方に立ち上 り、端部は丸みを持つ。	⑤回転ナデ ⑤回転ヘラケズリ →ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1~2) ○	7
43	环身	口径 器高	10.8 3.9	たちあがりはごく短く内傾し、口縁部 は丸く実る。受部は短く同じ高さ さまで丸みを持つ。	⑤回転ナデ ⑤回転ヘラケズリ →ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(1) ○	
44	高环	口径 残高	10.0 4.0	口縁部は丸みを持つ。皿状の小型の 环部である。脚部を欠く。	⑤回転ナデ ⑤回転ヘラケズリ ⑤回転ナデ	⑤回転ナデ ⑤回転ナデ ⑤ナデ	灰色 灰色	長(1) 密 ○	
45	高环	口径 残高	12.8 5.0	碗状の形をとるびた环部を持つ。体 部中位に1条の沈線が沿る。口縁部 は丸い。	⑤回転ナデ ⑤回転ヘラケズリ ⑤ナデ	回転ナデ	黄灰色 黄灰色	石・長(1~3) ○	
46	高环	残高	2.7	扁平な环底部。細い脚基部を持つ。 マメツ	回転ナデ (一部、回転ヘラ ケズリ)	⑤回転ナデ ⑤ナデ	灰色 灰色	長(1) ○	
47	高环	底径 残高	6.4 7.2	厚みのある环底部から緩やかに外反 する体部を持つ。脚部は「ハ」の字 状に短く開く。脚端部は丸みを持つ。	マメツ	マメツ	灰黄色 灰黄色	白色粒・石粒 △	接合痕 7
48	高环	残高	3.4	丸みのある环底部。	回転ナデ (一部、回転ヘラ ケズリ)	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○	
49	高环	底径 残高	9.0 5.5	脚部は緩く傾やかに広がり。側面で大 きく外反する。脚部中位に1条の沈線を 持つ。脚端部は下方へ屈曲し、段をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	砂粒 密 ○	7
50	高环	底径 残高	8.6 3.0	大きさが広がる短い脚部で、脚部は 面を持ちや内傾する。	マメツ	マメツ	灰黄色 灰黄色	白色粒 △	

出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版	(4)
				外 面	内 面					
51	高坏	底径 9.0 残高 1.5	大きく広がる脚部。強い回転ナデによる段を持つ。脚部端面はやや歪む。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	白色粒 ○			
52	高坏	底径 8.6 残高 0.7	脚端部は下方へ屈曲し、段をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(I) ○			
53	高坏	残高 3.9	大きく広がる短い脚部。	マメフ	マメフ	浅黄色 浅黄色	石・長(I) △			7
54	塊	口径 16.0 残高 7.0	丸みをおびた体部。口縁部は直立気味に立ち上がり、口縁端部はやや内側する。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	砂粒 ○			
55	塊	口径 11.4 残高 6.1	体部から口縁部にかけてほぼ直立して立ち上がる。口縁端部は先細り。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(I) ○			
56	甕	口径 12.8 残高 2.8	口縁部は大きく外反し、口縁端部は玉縁状に丸く厚壁する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(I) ○			
57	甕	口径 14.9 残高 2.4	口縁部は短く外反する。口縁端部は丸くやや内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(I) ○			
58	平瓶	口径 5.1 残高 4.5	口縁端部は丸みを持つ。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長(I) ○			
59	平瓶	口径 6.0 残高 13.4	脚部は丸みをおびるが脚部に棱を残す。脚部上面を内盤状粘土で塞ぎ、口縁部を接合している。口縁部に1本の横文を施し、脚部はハラウラの形の9字紋。	①回転ナデ ②ナデ ③ヨコナデ・ナデ カキ目(6~10本/cm) ④回転ナデ	①回転ナデ ②ナデ ③ヨコナデ・ナデ カキ目(6~10本/cm) ④回転ナデ	灰色 灰色	密 ○			7
60	横瓶	残高 8.3	内面には粘土縁の巻き上げ痕が満巻き状に残り、凹凸が激しい。	カキ目(6本/cm) ナデ	回転ナデ ナデ	灰色 灰色	白色粒 ○			

表7 SX1出土遺物観察表(石製品)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
61	石礎	先端部欠損	サヌカイト	242	235	0.46	2045		8
62	石礎	基部一部欠損	サヌカイト	190	140	0.30	0.600		8
63	剥片		サヌカイト	200	250	0.50	2564		
64	剥片		サヌカイト	295	185	0.90	7.977		
65	敲石	完形	安山岩系	10.25	7.30	5.15	472.66		

表8 SX1出土遺物観察表(金属製品)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
66	刀子	刃部の一部と茎部	鉄	6.80	1.94	0.60	10.280	茎部と刃部との境に貴金属を持つ。	8
67	刀子	刃部の一部と茎部	鉄	6.20	1.20	0.50	7.963		8

本谷遺跡

表9 S X 2出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
68	壺蓋	口径 9.3-9.7 器高 31	口縁部は短く、口縁端部は尖る。かぶり縁部は丸みを持つ。つまみは丸太状で中央部が瘤む。歪みが激しい。	①口縁部は短く、口縁端部は尖る。 ②つまみは丸太状で中央部が瘤む。 ③歪みが激しい。	回転ナデ ②回転ナデ ③回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長直～2 ○		8
69	壺身	口径 9.6 器高 38	たらあらがはごく短い。受部はやや上方に立ち上がり、受部の端部が口縁部にはほほ高さである。	①回転ナデ ②回転ナデ ③回転ヘラケズリ ④回転ヘラケズリ	回転ナデ →ナデ	灰色 灰色	密 ○	自然釉	8
70	蓋	口径 9.3 器高 2.0-2.6	口縁部は外反しながら立ち上がり、天井部との境目に瘤を持つ。天井部は中央部が瘤む。歪みが激しい。	①回転ヘラケズリ ②回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(I) ○		8
71	瓶	口径 10.6 残高 40	口縁部は大きく外反し、口縁端部は丸みを持つ。口縁部と頸部の腹段は明瞭な接ぎな接ぎをなす。	①回転ヘラケズリ ②回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	砂粒 密 ○	自然釉	

表10 S X 2出土遺物観察表（石製品）

番号	器種	残存	材質	法量			備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
72	石庵丁	約1/2	緑色片岩	6.50	4.20	0.60	23.068	

表11 S D 1出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
73	壺	口径 (10.6) 残高 45	頭部は直立気味に立ち上がり、口縁部でやや外反する。口縁端部は面を持つ。	マメツ	ナデ?	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長直～2 ○		
74	高环	口径 (18.6) 残高 31	浅い环状部から大きく外反する口縁部を持つ。环部と口縁部の腹段は明瞭な接ぎな接ぎをなす。	マメツ	マメツ	明赤褐色 明赤褐色	石・長直～2 ○		

表12 S D 1出土遺物観察表（石製品）

番号	器種	残存	材質	法量			備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
75	石旗	完形	サヌカイト	1.80	1.60	0.24	0.460	

表13 S P 1出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
76	壺	口径 (26.0) 残高 26	逆「L」字状の口縁部。口縁部下に押印される断面三角形の突起部を貼り付ける。	マメツ	マメツ	灰白色 にぶい褐色	石・長直～4 ○		8
77	高环	残高 24	口縁部は内側に抵張され、ほぼ水平な口縁端面を持つ。	マメツ	ナデ?	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	石・長直～3 ○		

表14 S R 1出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
78	壺	残高 15	口縁部は大きく外反し、口縁端部は「コ」字状。口縁端面に刻目を持つ。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長直～2 ○		8
79	壺	口径 (19.0) 残高 23	口縁部は外反し、口縁端部は「コ」字状。	マメツ	マメツ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長直～3 ○		
80	壺	残高 50	口縁部下に2条の沈線文が墨り、沈線文間に連続しない刺突文を施す。	ナデ	ナデ	明褐色 明褐色	石・長直～3 ○		8
81	壺	底径 6.4 残高 39	底盤の底部。	マメツ(ナデ?)	マメツ(ナデ?)	灰褐色 灰褐色	石・長直～3 ○		
82	高环	残高 26	大きく聞く脚部。脚端部は「コ」字状。円孔の一部が残る。	マメツ	マメツ	黄褐色 灰色	石・長直 ○		

第3章 高田遺跡

第1節 調査の経過

1. 調査に至る経緯

平成18年4月、松山市高田乙10番、乙11番3、乙11番4及び乙223番4の各一部における上水道施設建設工事に先立ち、埋蔵文化財確認願が、松山市公営企業局管理者（以下、申請者）より松山市教育委員会（以下、市教委）に提出された。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地内には該当していない。

これを受けた市教委は、当該地における遺跡の有無とその範囲及び性格を確認するため、財團法人松山市生涯学習振興財团埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）に委託し、平成18年5月12日に踏査を、同年5月16日に試掘調査を実施した。結果、古墳の可能性のある直径約10mの高まりとそのほぼ中央に石組基壇をもつ瓦製祠を確認し、当該地の一部において遺跡が存在することが判明したため、これを申請者に通知するとともに保存について協議した。後日、当該地における文化財保護法第93条第1項による届出書が申請者より市教委に提出されたため、先の試掘結果と併せてこれを愛媛県教育委員会（以下、県教委）に進呈した。

その後、平成18年6月15日に県教委より遺跡を保護できない部分について発掘調査（記録保存）の指示が下りたため、市教委の指導の下、原因者負担により埋文センターが平成18年9月15日より発掘調査することとなった。

2. 調査の経緯

発掘調査（屋外調査）は、2006（平成18）年9月15日～同年12月5日の間に実施した。9月15日にテントを設営し発掘道具、備品の搬入を行う。その後調査区を設定し、草刈り作業を開始する。草刈り作業は試掘と踏査で確認した丘陵緩斜面の石組み周辺部を古墳の墳丘として開始し、順次、調査区の標高の高い南側に移動した。草刈りと併行し、現況の地形測量を25cm間隔で行った。現状の石組みの測量と地形測量後表土の掘削を行い、古墳主体部と墳丘内施設の検出を行う。丘陵尾根上には幅1mのトレンチを入れ遺構確認を行う。トレンチ東端で古墳の主体部を検出したため、主体部の全容を確認するために拡張を行った。調査範囲と調査期間の関係から、調査は主体部だけの調査となり墳丘の調査は行っていない。

検出した遺構は古墳、土坑、溝である。各遺構にベルトを設定し、掘削を行う。遺構掘削後測量を行い、12月1日に完掘状況の写真撮影を行う。12月5日に測量補足を行い、発掘道具を片付け、備品を撤去し調査を終了する。



第27図 調査地位置図

3. 調査体制

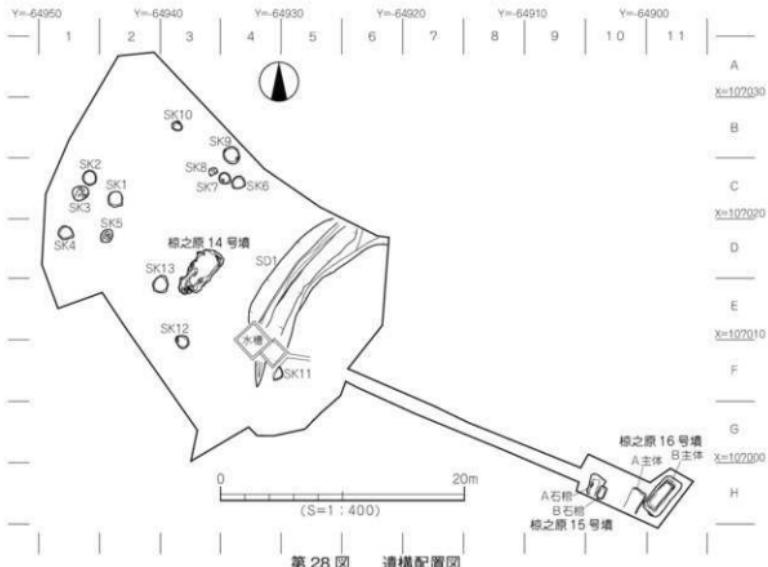
土地所有者 松山市公営企業局
 調査委託 松山市公営企業局建設整備課
 調査担当 財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
 高尾和長

第2節 層位

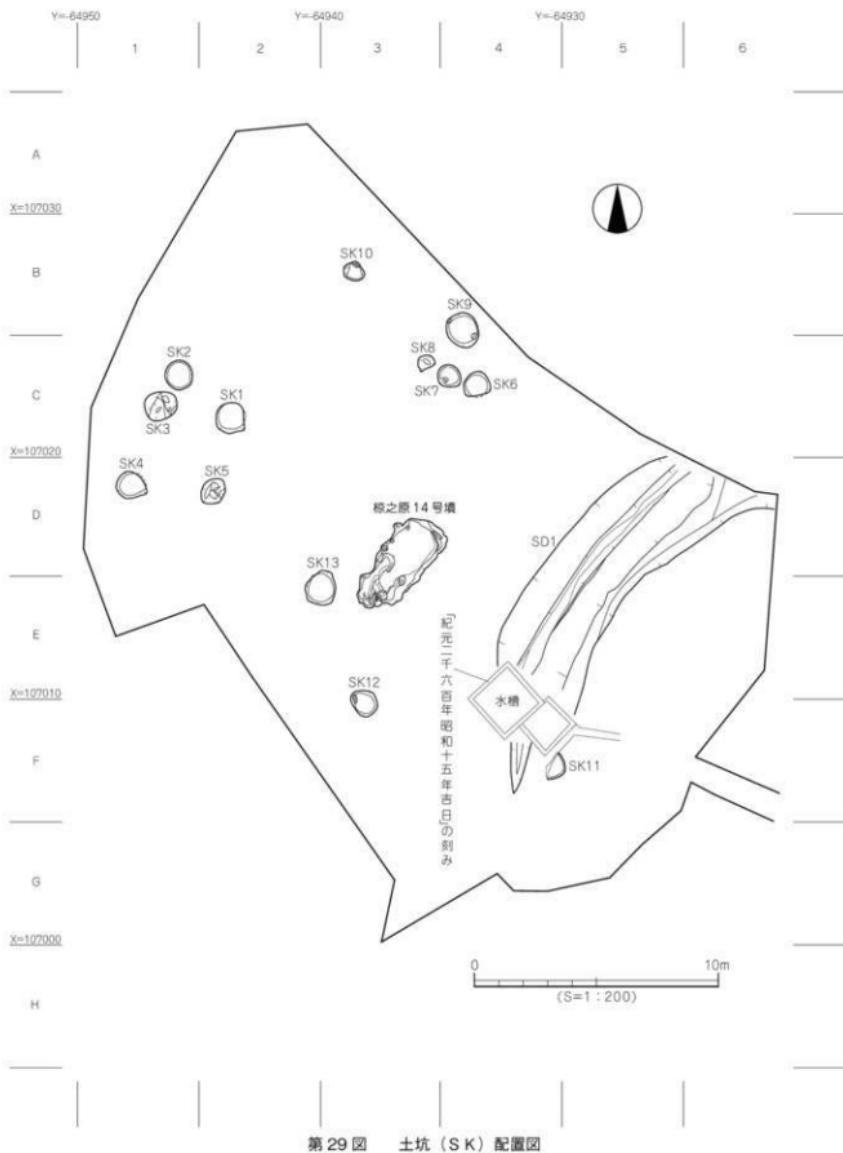
本調査では、2層の土層を確認した。I層 表土（腐葉土）、II層 黄色土（地山）であり、II層上面が遺構検出面となる。調査区は斜面であり、高低差30mを測る。

第3節 遺構と遺物

検出した主な遺構は、古墳3基（椋之原14号墳、椋之原15号墳A石棺・B石棺、椋之原16号墳A主体・B主体）、土坑13基（SK1～13）、溝1条（SD1）である。遺物は、遺構内から出土している。その遺物には弥生土器、土師器、須恵器、陶器、鉄製品（鎌、槍、鉈、鎌、鎌もしくは鋤先）、石製品（鎌）、装身具（管玉）、人骨、赤色顔料、粘土がある。



高田遺跡



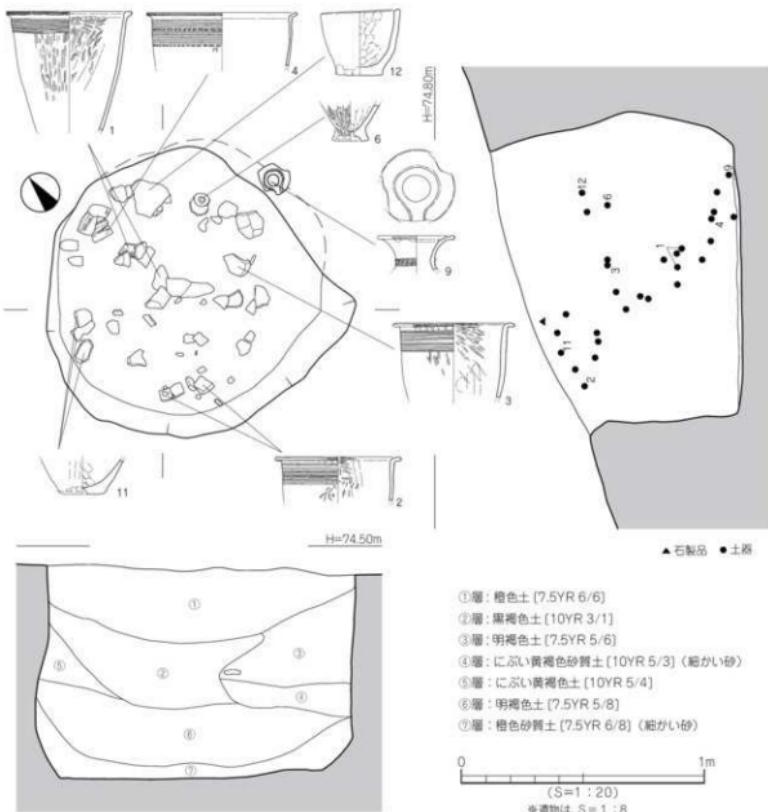
1. 弥生時代

土坑は、9基を検出した。これらの土坑は、B4区～F4区の標高73.5m～78.3mに位置する。

土坑（SK）

SK1（第30～32図、図版10・19）

SK1は、調査区北西部のC2区、標高74.6mに位置する。平面形態は円形で、規模は径1.25m、深さ1.00mを測る。断面形態はフラスコ状で、床面は水平である。埋土は7層に分層でき、①層 橙色土[7.5YR 6/6]、②層 黒褐色土[10YR 3/1]、③層 明褐色土[7.5YR 5/6]、④層 にぶい黄褐色砂質土[10YR 5/3]（細かい砂）、⑤層 にぶい黄褐色土[10YR 5/4]、⑥層 明褐色土[7.5YR 5/8]、⑦層 橙色砂質土[7.5YR 6/8]（細かい砂）である。遺物は弥生土器の壺形土器、壺形土器の破片が上層～下層で出土した。



第30図 SK1測量図・遺物出土状況図

出土遺物（1～13）

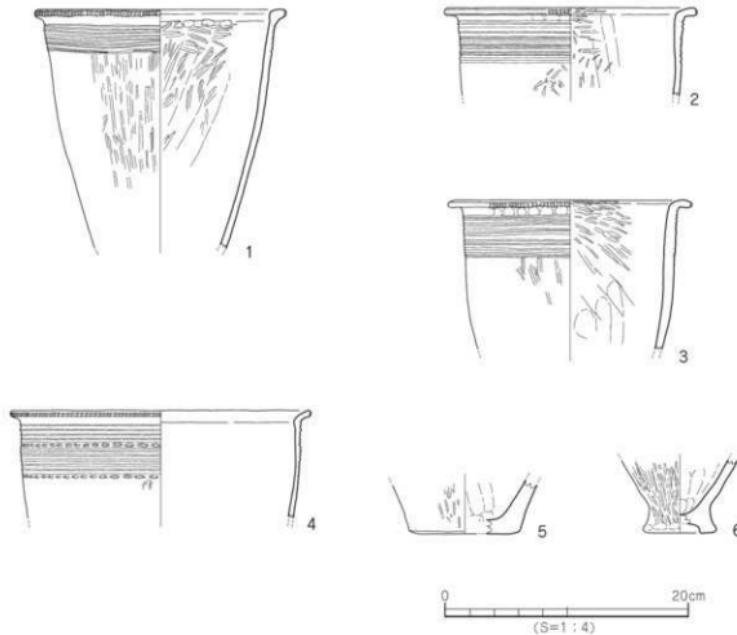
壺形土器（1～6）1は貼り付け口縁。口縁端部に刻目、口縁部下にヘラ描き沈線文を8～9条施す。2～4の口縁部は折り曲げ口縁。2・3は口縁部の折り曲げが強く、逆「L」字状を呈す。口縁端部に刻目、口縁部下にヘラ描き沈線文11条を施す。4の口縁部は「く」の字状に折り曲げられ、口縁端部に刻目、口縁部下にヘラ描き沈線文4条+刺突文1段+ヘラ描き沈線文6条+刺突文1段を施す。5は平底の底部、6はくびれのある上げ底の底部である。

壺形土器（7～11）7は口縁端部に沈線1条と刻目を施し、8は口縁部が大きく広がり、口縁端部は丸みを持つ。9は口縁部が大きく外反し、口縁部内側に注口状の貼り付け突帯文、口縁端部に刻目、頸部に押圧のある貼り付け突帯文2条が巡る。10はやや上げ底気味の平底、11は丸みのある平底である。

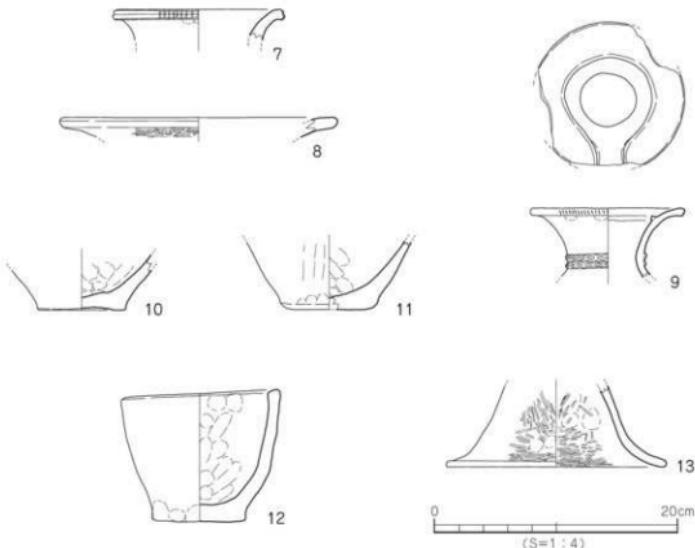
鉢形土器（12）直口口縁で口縁端部は「コ」字状を呈し、底部は平底である。

蓋形土器（13）壺の蓋で、口縁部は大きく外反し、口縁端部は丸みを持つ。体部はやや膨らみがある。

時期：壺形土器と壺形土器の形態から、弥生時代前期末から中期初頭とする。



第31図 SK1出土遺物実測図（1）

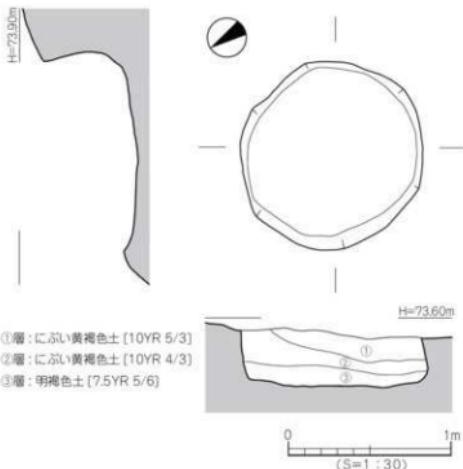


第32図 SK1出土遺物実測図(2)

SK2 (第33図)

SK2は調査区北西部のC1区、標高73.7mに位置する。平面形態は円形で、規模は径1.17m、深さ0.58mを測る。断面形態はフラスコ状で、床面は水平である。埋土は3層に分層でき、①層にぶい黄褐色土[10YR 5/3]②層にぶい黄褐色土[10YR 4/3]③層明褐色土[7.5YR 5/6]である。遺物は、弥生土器片が出土した。

時期：規模や断面と床面の形態、埋土がSK1に似ることから弥生時代前期末から中期初頭とする。



第33図 SK2測量図

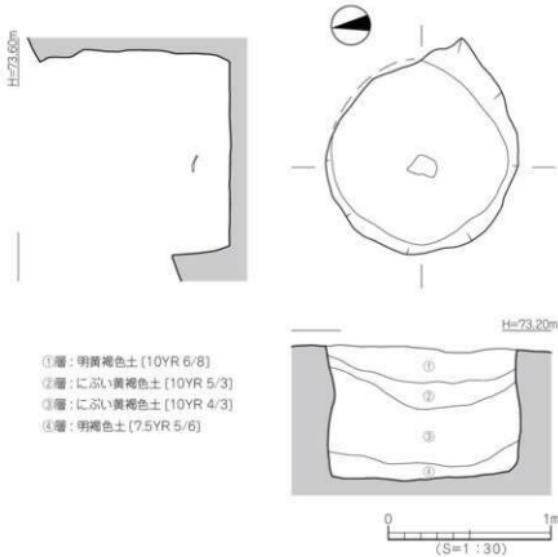
SK4（第34・35図、図版11）

SK4は調査区西部のDI区、標高73.5mに位置する。平面形態は橢円形で、規模は径1.18m～1.35m、深さ1.17mを測る。断面形態はフラスコ状で、床面は水平である。埋土は4層に分層でき、①層 明黄褐色土[10YR 6/8]、②層 にぶい黄褐色土[10YR 5/3]、③層 にぶい黄褐色土[10YR 4/3]、④層 明褐色土[7.5YR 5/6]である。遺物は弥生土器の壺形土器片が、床面よりやや浮いた状態で出土した。

出土遺物（14）

壺形土器（14）口縁部は折り曲げが強く、逆「L」字状を呈する。口縁部下に、ヘラ描き沈線文4条+刺突文2段+ヘラ描き沈線文5条を施す。

時期：出土遺物の形態と規模や断面と床面の形態、埋土がSKIに似ることから弥生時代前中期から中期初頭とする。



第34図 SK4測量図



第35図 SK4出土遺物実測図

SK6（第36図）

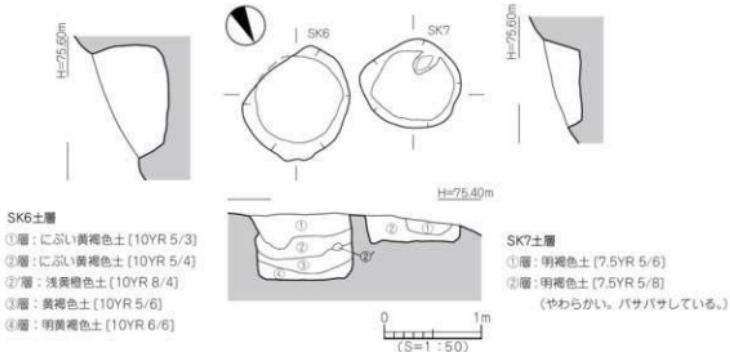
SK6は調査区北西部のC4区、標高75.4mに位置する。平面形態は円形で、規模は径1.20m、深さ0.77mを測る。断面形態はフラスコ状で、床面は水平である。埋土は4層に分層でき、①層にぶい黄褐色土[10YR 5/3]、②層にぶい黄褐色土[10YR 5/4]、③層 浅黄橙色土[10YR 8/4]、④層 黄褐色土[10YR 5/6]、⑤層 明黄褐色土[10YR 6/6]である。遺物は、出土していない。

時期：規模や断面と床面の形態がSK1に似ることから、弥生時代前期末から中期初頭とする。

SK7（第36図）

SK7は調査区北西部のC3・4区、標高75.4mに位置する。平面形態は梢円形で、規模は径0.90m～1.05m、深さ0.40mを測る。断面形態は逆台形状で、床面は水平である。埋土は2層に分層でき、①層 明褐色土[7.5YR 5/6]、②層 明褐色土[7.5YR 5/8]（やわらかい。バサバサしている。）である。遺物は、出土していない。

時期：規模や断面と床面の形態がSK1に似ることから、弥生時代前期末から中期初頭とする。



第36図 SK6・7測量図

SK9（第37図、図版11）

SK9は調査区北西部のB4区、標高74.3mに位置する。平面形態は梢円形で、規模は径1.25m～1.55m、深さ0.80mを測る。断面形態はフラスコ状で、床面は水平である。床面東西の端に、小ビット2基がある。埋土は4層に分層でき、①層 壤色土[7.5YR 4/6]、②層 明褐色土[7.5YR 5/8]、③層 暗褐色土[7.5YR 3/3]（木の根の痕跡）、④層 にぶい橙色土[7.5YR 6/4]（地山の風化土）である。遺物は、弥生土器片が出土した。

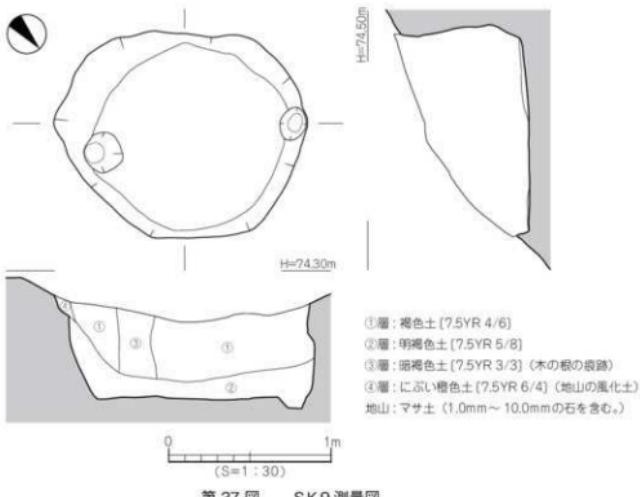
時期：出土遺物の形態と規模や断面と床面の形態がSK1に似ることから、弥生時代前期末から中期初頭とする。

SK11（第38図）

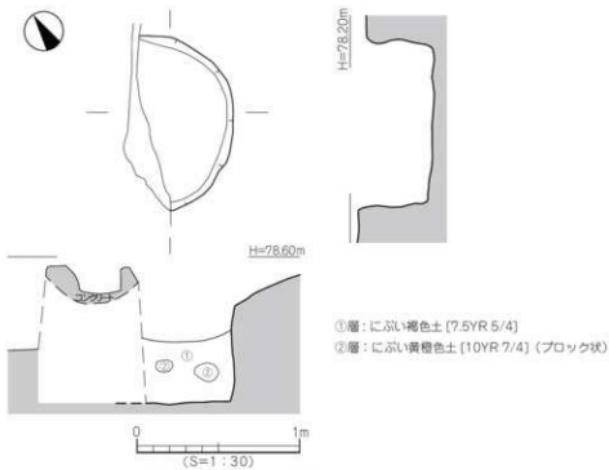
SK11は調査区中央部のF4区、標高78.3mに位置し、北西側は近現代の水路に切られる。平面形態は円形で、規模は径1.06m、深さ0.42mを測る。断面形態はフラスコ状で、床面は水平である。埋

土は、①層 にぶい褐色土 [7.5YR 5/4]、②層 にぶい黄橙色土 [10YR 7/4]（ブロック状）である。遺物は、弥生土器片が出土した。

時期：出土遺物の形態と規模や断面と床面の形態が SK1 に似ることから、弥生時代前期末から中期初頭とする。



第 37 図 SK9 測量図

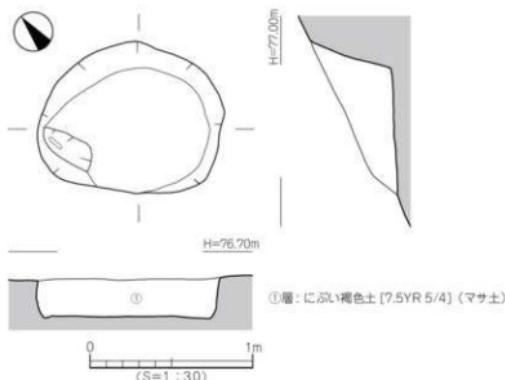


第 38 図 SK11 測量図

SK12（第39図）

SK12は調査区南西部のE・F3区、標高76.6mに位置する。平面形態は梢円形で、規模は径0.94m～1.16m、深さ0.52mを測る。断面形態は逆台形状で、床面は水平である。埋土は、にぶい褐色土[7.5YR 5/4]（マサ土）である。遺物は、出土していない。

時期：規模や断面と床面の形態がSKIに似ることから、弥生時代前期末から中期初頭とする。



第39図 SK12測量図

SK13（第40図）

SK13は調査区西部のE2・3区、標高77.3mに位置する。平面形態は梢円形で、規模は径1.23m～1.48m、深さ1.05mを測る。断面形態はフラスコ状で、床面は水平である。埋土は2層に分かれ、①

層 明褐色土[7.5YR 5/6]

（1mm～3mmの石粒を多く含む。しまりなし。）、②

層 明褐色土[7.5YR 5/6]

（①層よりしまりがある。）である。遺物は、出土していない。

時期：規模や断面と床面の形態がSKIに似ることから、弥生時代前期末から中期初頭とする。



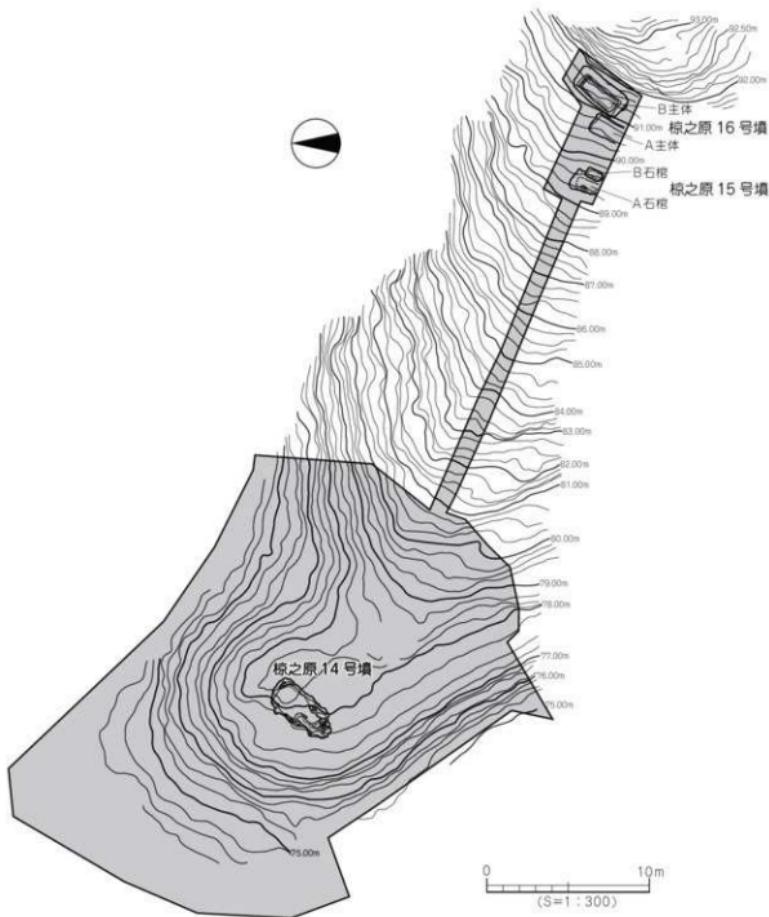
第40図 SK13測量図

2. 古墳時代

調査では14号墳（横穴式石室1基）、15号墳（箱式石棺2基）、16号墳（木棺主体部2基）の古墳3基を検出した。

（1）椋之原14号墳（第41～47図、図版9・12・13・19・20）

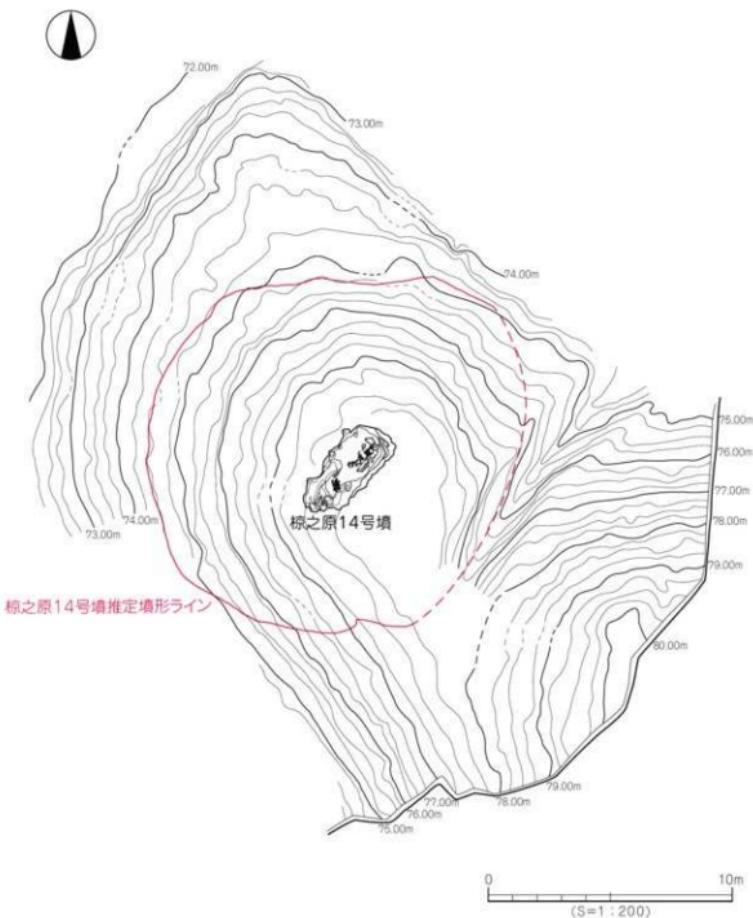
14号墳は調査区の中央西部D・E3区、標高77.9mに位置する。調査地は、果樹園として開墾され、その後は雑木林となっている。古墳は開墾時に破壊されたと思われ墳丘中央部（主体部上部）に石室の石材を一辺1.6m、高さ0.85mの基壇状に組み上げられていた。



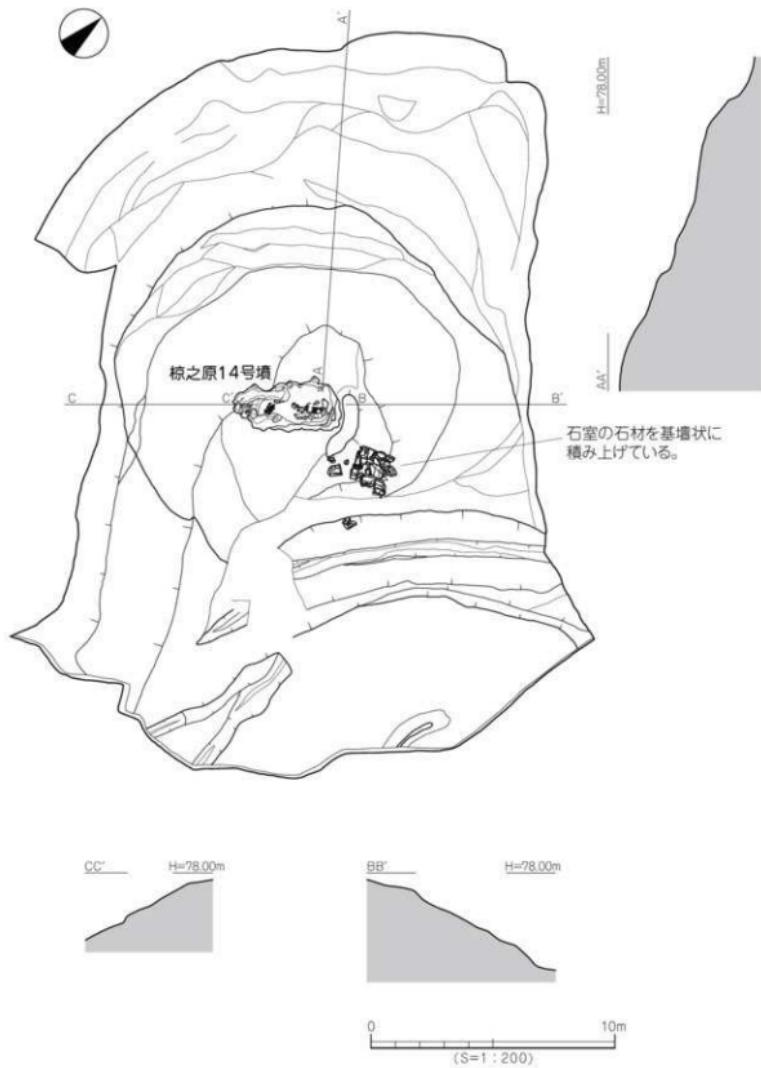
第41図 調査前地形測量図

i) 墳形

墳形は墳丘盛土が開墾時の削平により失われているため、古墳構築時の地山整形ラインが北東部から南西部かけて確認でき、その範囲から推測すると直径 15m 前後の円墳になると思われる。



第 42 図 棕之原 14 号墳調査後地形測量図

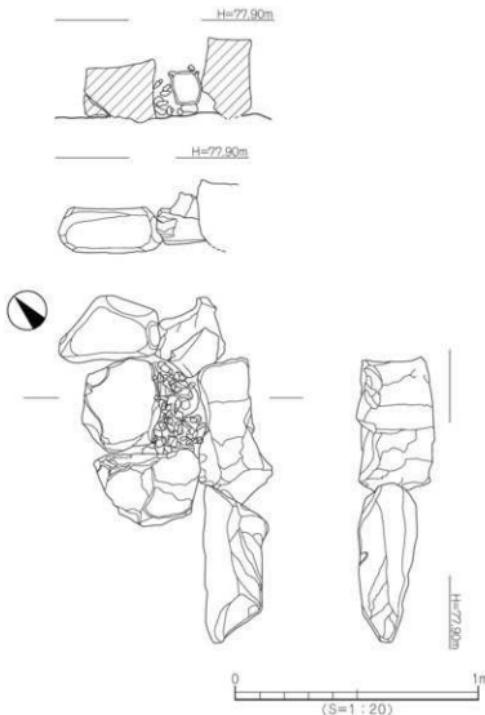


第43図 棕之原14号墳墳丘測量図

ii) 主体部

墓坑は、地山を「L」字状にカットし長方形状の平坦面を作り出す。墓坑の規模は長さ4.40m、幅2.00m、深さ0.70m（北東角）を測り、床面は平坦である。石室は北東角に奥壁と側壁の基底石4個が「L」字状に1段残り、床面の西側から南側にかけて抜き跡を検出した。石室は、ほぼ壊滅状態である。石材の法量は長さ45cm～65cm、幅25cm～30cm、厚さ20cm～30cmを測る。石室内部は残存する奥壁と側壁、抜き跡から想定すると玄室と羨導部に分かれ、玄室の規模は長さ1.40m、幅0.80m、羨導部の長さ1.20m、幅0.40mを測る。石材は花崗岩であるが、調査地の丘陵部では検出されていないことから、調査地以外から搬入されたと思われる。床面には2個の敷石と玉石がわずかに残るが、表土掘削時に多くの玉石が出土していることから、構築時の位置はとどめていない可能性が高い。

遺物は須恵器片、鉄製品（鎌、鍔もしくは鐔先）、管玉、石製品（鎌）、陶器と陶器内からは骨が出土している。玉石が散乱している状況から、すべて埋葬時の位置はとどめてないと考えられる。陶器は北東角に位置し石室と同じ石材2個で20cm～40cmの空間を作り出し玉石を敷き、その上に陶器の蓋を置き、玉石で充填し上部にも玉石が覆った状態で出土した。



第44図 榎之原14号墳石室展開図・断面図

出土遺物（15～35）

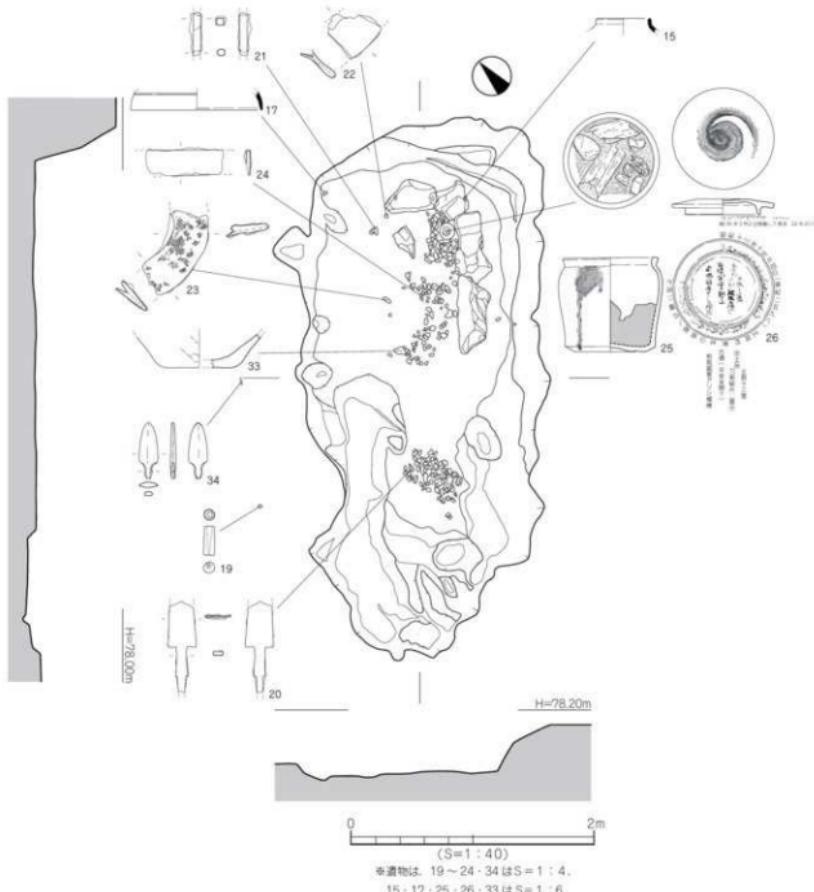
須恵器（15～18）

15は短頸壺で短い直口口縁の端部は丸い。16は高壺。体部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は反り気味に外反する。17は坏蓋。口縁端部は尖り気味でやや内傾し、縁部と天井部との境に沈線が巡る。

18は横瓶で、胴部中央部は円盤状の粘土により充填され塞がれている。

装身具（19）

管玉（19）碧玉製の完形品。重さ3.001gを測る。



第45図 植之原I-4号埴石室測量図・遺物出土状況図

鉄製品 (20 ~ 24)

鐵 (20・21) 20は先端部と茎部端部を欠く。茎部の断面は長方形状である。21は茎部の一部で、断面は方形状である。

鍬もしくは鋤先 (22・23) 22・23ともに破片であり、23の外面には布の痕跡が残る。

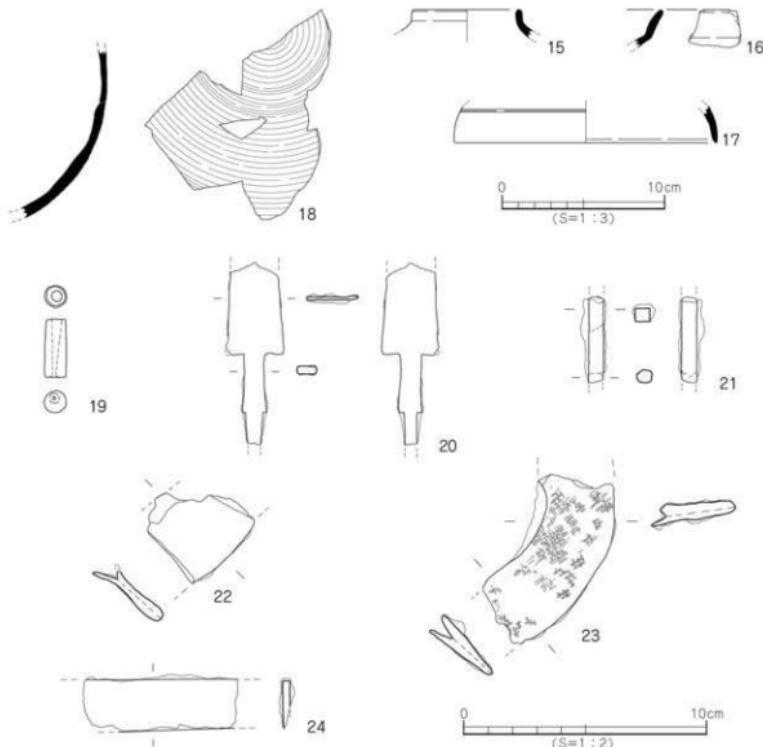
鎌 (24) 長さ 6.30cm の破片。

陶器 (25・26)

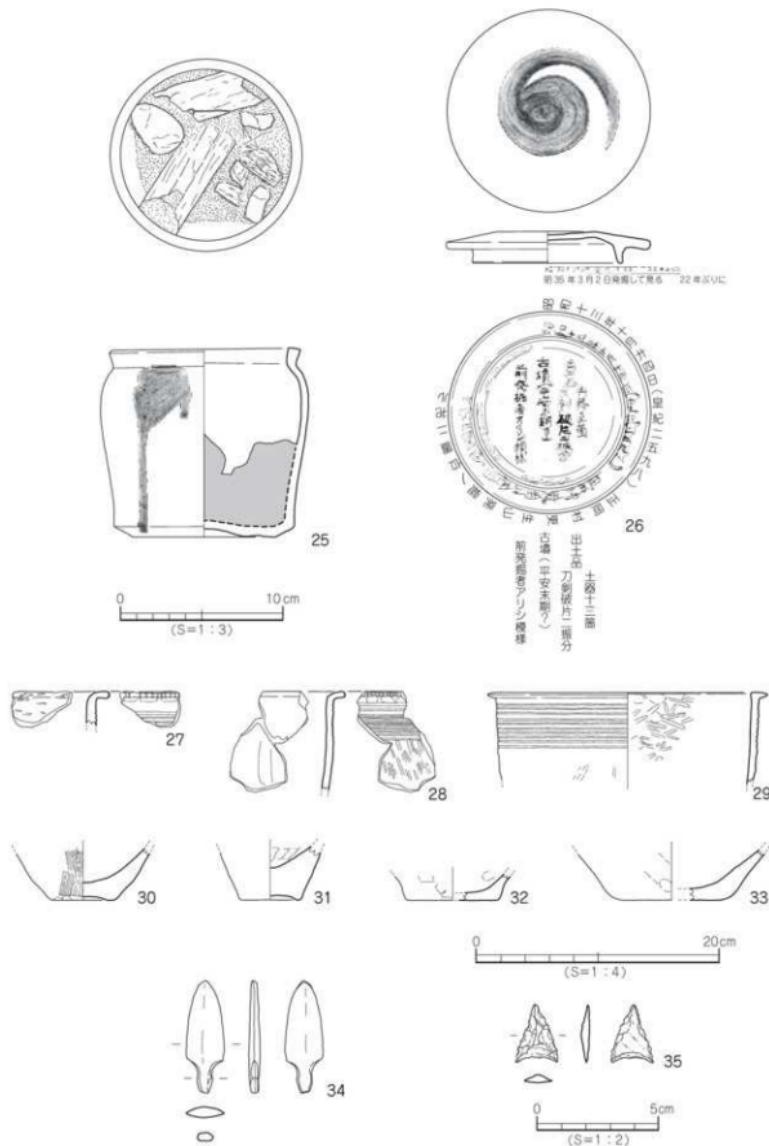
25は壺。頸部は短く外反し、口縁端部は肥厚し「コ」字状を呈する。肩部に、呉須が3ヶ所かかる。壺内には人骨が納められている。26は壺の蓋。天井部は扁平で、中央部がやや窪む。天井部だけに施釉し、呉須で渦巻文を描く。内面に、墨書や鉛筆による文字が残る。

弥生土器 (27 ~ 33)

甕形土器 (27 ~ 31) 27の口縁部は逆「L」字状を呈し、口縁端部に刻目と口縁部下にヘラ描き沈線文が3条残る。28は口縁部を逆「L」字状に折り曲げ、口縁端部に刻目、口縁部下にヘラ描き沈線



第 46 図 栃之原 1 4 号墳出土遺物実測図 (1)



第47図 桢之原1-4号墳出土遺物実測図(2)

文を11条施す。29は貼り付け口縁で、口縁部下にヘラ描き沈線文を10条施す。30はやや上げ底の底部。31はやや上げ底で厚みがある底部である。

壺形土器（32・33）32は平底の底部。33はやや丸みを持つ平底の底部。

石製品（34・35）

34は有茎式磨製石鏃の完形品。35は石鏃の完形品。材質はサヌカイトである。

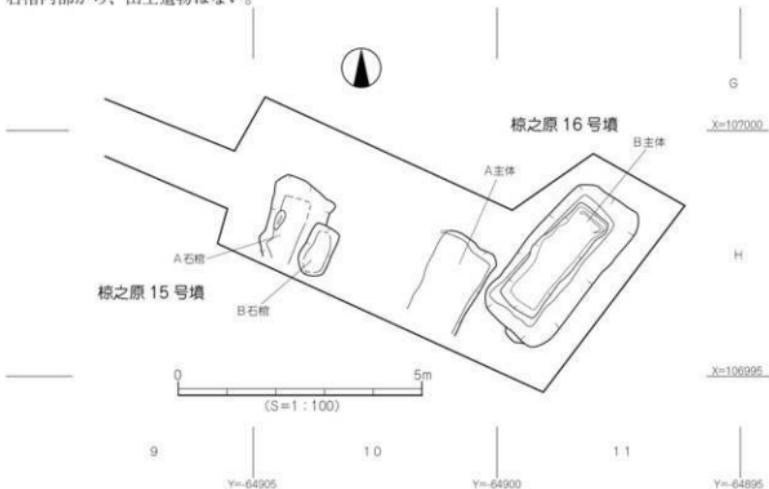
時期：出土した須恵器が小片のため明確ではないが、古墳時代後期前葉とする。

（2）椋之原15号墳（第48～50図、図版14・15）

15号墳は調査区の南東部H10区、標高89.3mに位置する。調査区は、幅3mのトレンチ状である。検出遺構は、主体部2基の箱式石棺（A石棺、B石棺）である。なお、墳丘の形態、規模は調査範囲の関係から確認できていない。

i) A石棺

A石棺は、尾根上にトレンチを掘削中に表面に石が露出していて検出した。石材は板状の石を正方形状に組み、上部に蓋をするように石を載せていた。この石組みは箱式石棺を破壊し、新たに組み直したように見られる。この石組みを撤去し掘り方の確認をすると、墓坑のプランを検出した。墓坑は、南側が調査区外に続く。平面形態は長方形で、規模は検出長1.75m、幅1.20m、深さ0.28mを測る。石棺は、元位置をとどめている石材2個を検出した。石材は、北東角に「L」字状に検出した。石材の法量は北側小口の石材は40cm×30cm、厚さ14cm、側石の石材は40cm×30cm、厚さ16cmを測る。西側には抜き跡と思われる窪みがあり、規模は長さ43cm、幅15cmを測る。床面は、ほぼ平坦である。石棺内部から、出土遺物はない。

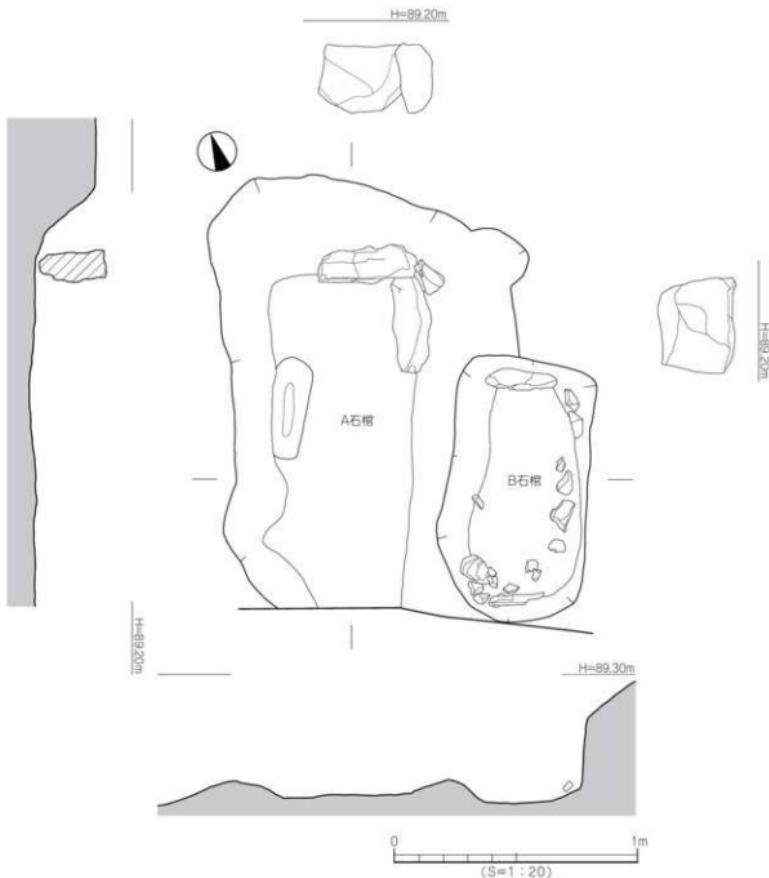


第48図 椋之原15号墳・16号墳配置図

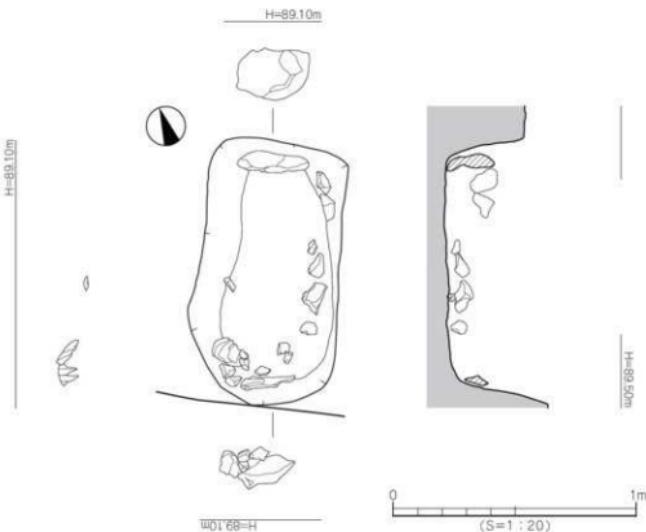
ii) B 石棺

B 石棺は、A 石棺の東側に平行に位置する。墓坑の平面形態は長方形状で、規模は長さ 1.09m、幅 55cm～60cm、深さ 38cm を測る。A 石棺よりも小型であり、検出した石材は A 石棺と同じ石材である。北側小口の石材法量は 30cm × 20cm、厚さ 7cm、南側小口の石材法量は 11cm × 14cm、厚さ 5cm を測る。そのほかの石材の形状は、細かく打ち欠かれた薄い割り石である。床面は、ほぼ水平である。石棺内部から、出土遺物はない。

時期：出土遺物がないため時期は明確でないが、15 号墳は 16 号墳に後続する時期と考える。



第 49 図 桢之原 15 号墳 A 石棺測量図



第50図 榊之原16号墳B石棺測量図

(3) 榊之原16号墳 (第51~55図、図版15~17・21)

16号墳は調査区南東部のH10・11区、標高91.6mに位置する。調査区は、幅4m×5mである。検出遺構は、A主体とB主体の2基の主体部である。墳丘の形態と規模は、調査範囲の関係から確認できていない。

i) A主体

A主体はB主体の下段のH10区に位置し、西側は削平され南側は調査区外に続く。墓坑の平面形態は、1ヶ所のコーナー部を検出したことより長方形と考えられ、規模は検出長1.85m、検出幅1.20m、深さ43cmを測る。断面形態は、箱状である。床面は北側から段状にわずかに下がり、南に緩やかに上り、主軸は北東方向である。木棺痕跡が検出され、出土遺物は赤色顔料、槍、鎗、管玉がある。木棺痕跡は幅63cm、長さ100cm、厚さ5cmを測り「コ」字状に検出した。赤色顔料は木棺内の北側に45cm×80cmの楕円形状に検出し、北東側が濃く北西から南にかけては薄い。槍と鎗は重なり合って、北西側の赤色顔料の上面から出土した。管玉は、北側の木棺痕跡から40cm南の赤色顔料の中から出土した。

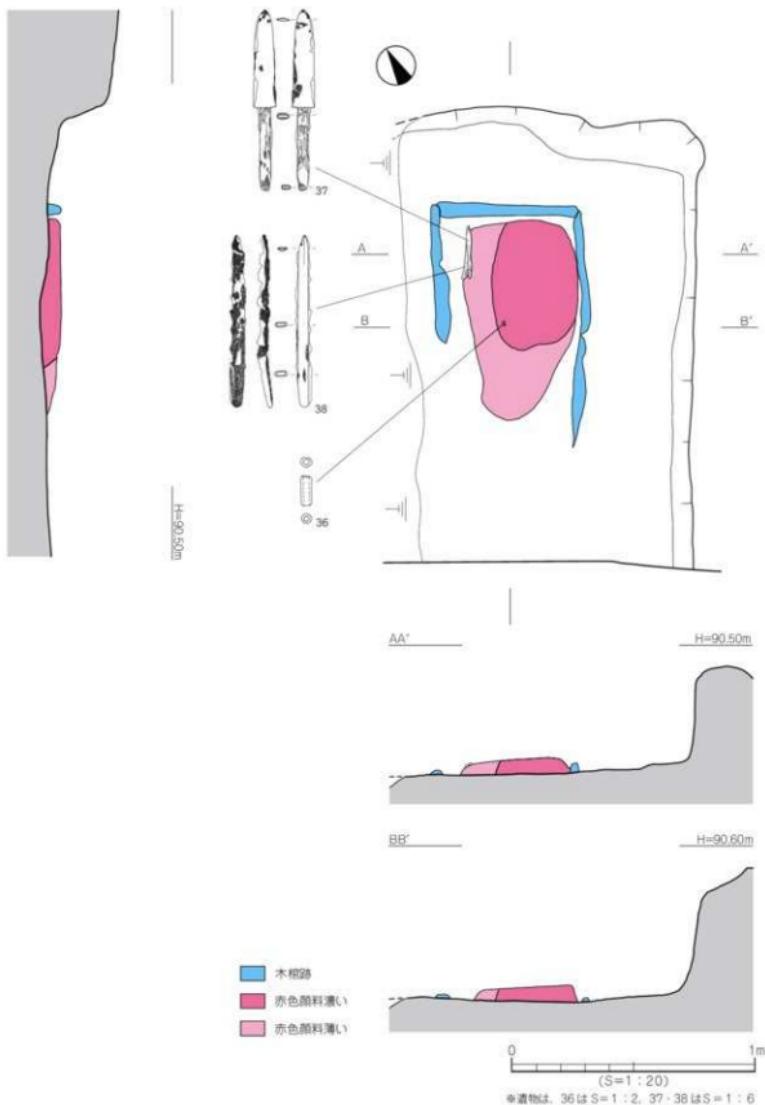
出土遺物 (36~38)

装身具 (36)

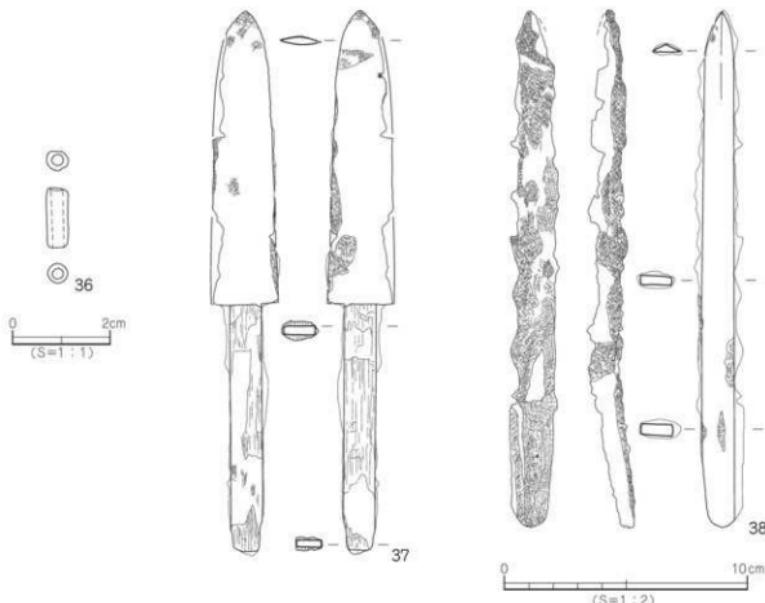
管玉 碧玉製の完形品で、重さ0.320gを測る。

鉄製品 (37・38)

37は槍のほぼ完形品で、外面に布目と木質が残る。38は鎗のほぼ完形品。外面に布目と木質が残り、布にくるまれていたと思われる。



第51図 栎之原16号墳A主体測量図・遺物出土状況図



第52図 棚之原16号墳A主体出土遺物実測図

ii) B主体

B主体は、A主体の上段のH11区に位置する。墓坑の平面形態は長方形で、規模は長さ3.48m、幅1.55m、深さ1.40mを測る。断面形態は、逆台形状である。床面からは木棺の掘り方を検出し、粘土、赤色顔料、鉈が出土した。木棺掘り方の平面形態は長方形であり、規模は長さ2.50m、幅94cm、深さ16cmを測る。床面は、ほぼ水平である。粘土は北側床面に「コ」字状と床面から浮いた状態で出土し、中央部東側床面からも出土した。赤色顔料は北側の粘土痕跡から70cm×45cmの範囲で検出し、北東部が濃く周辺は薄い。鉈は北側の床面から、「U」字状に折り曲げられた状態で出土した。棺外からは、土師器の高壺とその周辺から赤色顔料が出土した。

出土遺物（39～44）

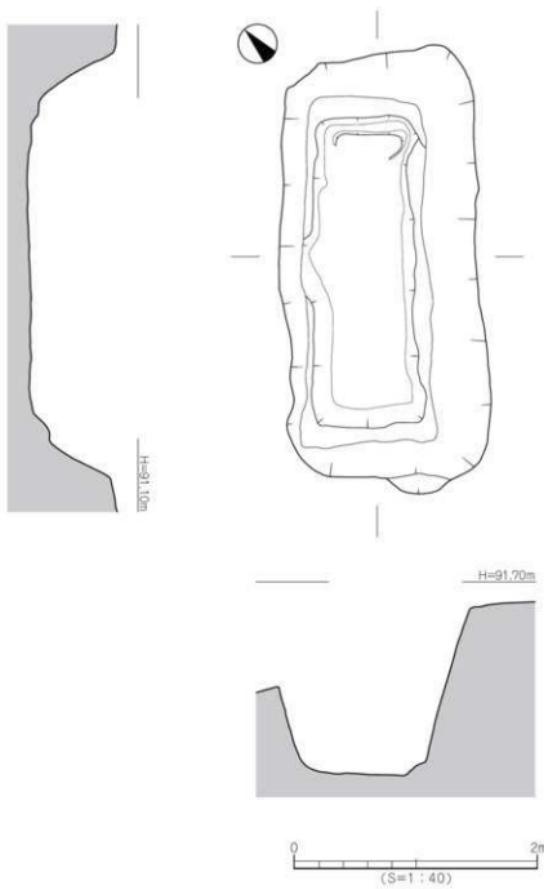
土師器（39～43）

39は壺形土器。「く」の字状に外反する口縁部。40は壺形土器。薄い丸底の底部で、底部内面に未貫通の円孔あり。41～43は高壺形土器。41は大きく開く口縁部で、壺中位に段を持つ。42は直線的に大きく広がる裾部で、3方向と思われる透かしあり。43はやや内湾気味に大きく広がる裾部。40～43には、赤色顔料が付着している。

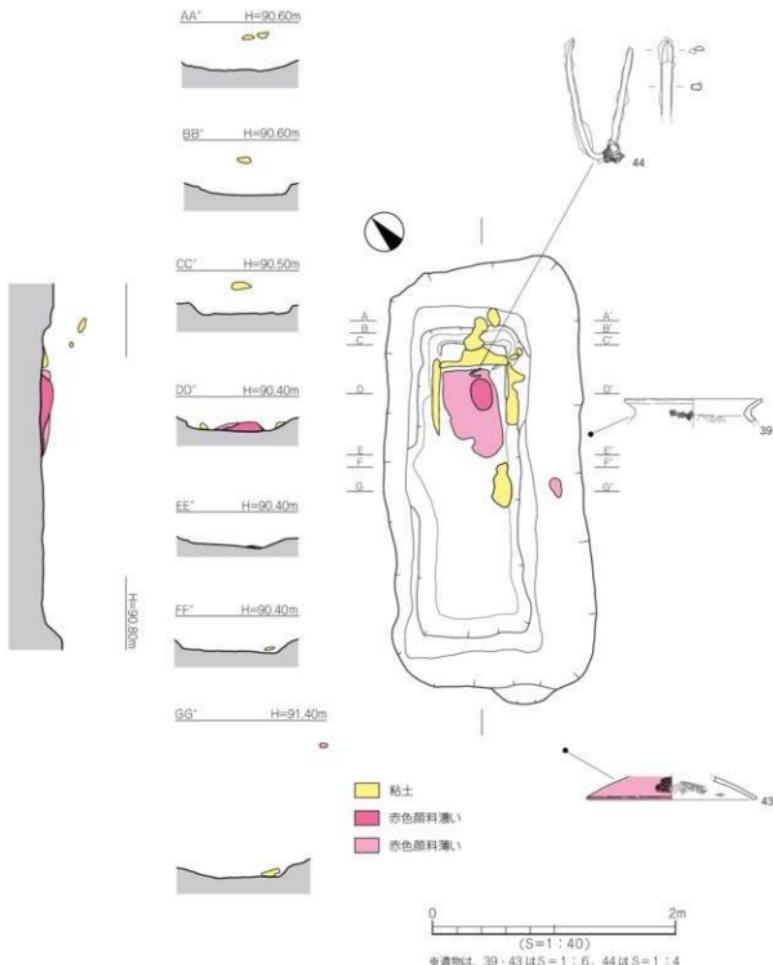
鉄製品（44）

ほぼ完形の鉈。「U」字状に折り曲げられる。布目が残り布にくるまれていたと思われる。

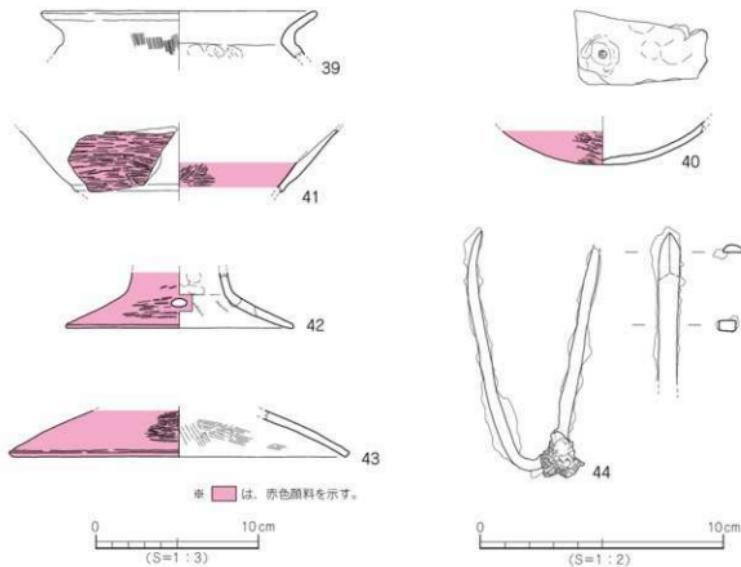
時期：棚之原16号墳A・B主体は、出土した土師器の形態から古墳時代前期前半とする。



第53図 桦之原16号墳B主体測量図



第 54 図 榊之原 16 号墳 B 主体測量図・遺物出土状況図



第 55 図 棚之原 16 号墳 B 主体出土遺物実測図

3. 古墳時代以降

(1) 溝 (SD)

SD1 (第 56 図、図版 13)

SD1 は調査区の中央部 D5・6 ~ F4 区に位置し、北東部は調査区外に続き、南部は現代のコンクリート製の水槽に切られる。規模は長さ 15.40m、幅 4.50m ~ 5.00m、深さ 1.80m (最大)、高低差 2.0m を測る。断面形態は、「V」字状である。埋土は、にぶい黄褐色土 [10YR 4/3] である。出土遺物は弥生土器、須恵器がある。

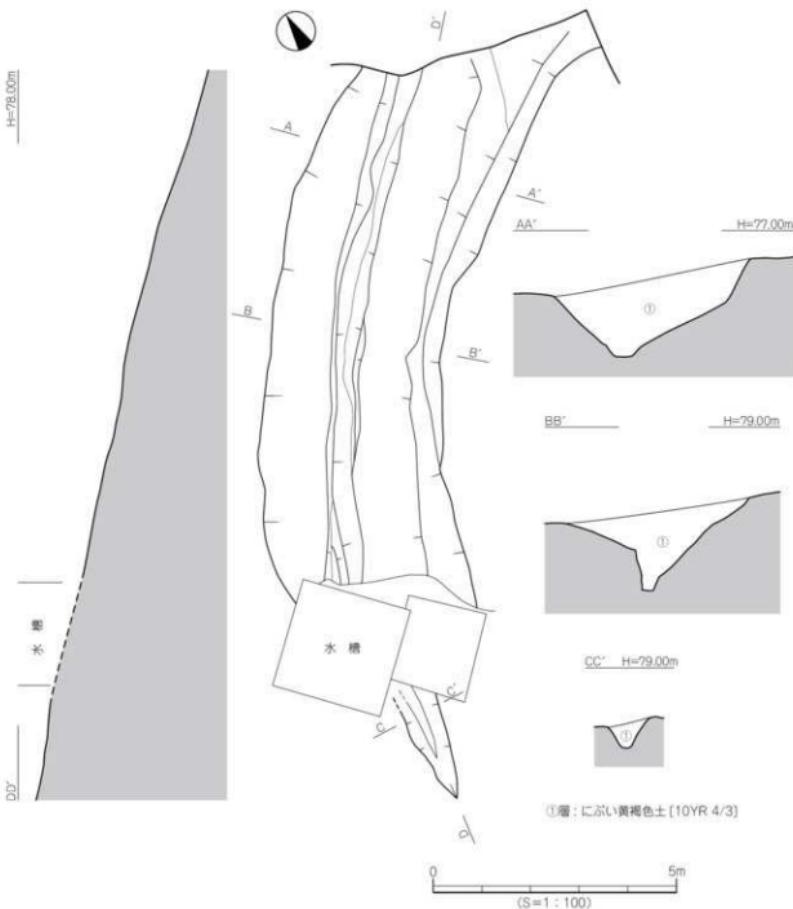
時期：棚之原 14 号墳の墳丘を切っていることから、古墳時代後期前葉以降と考える。

(2) 土坑 (SK)

SK3 (第 57 図)

SK3 は調査区の北西 C1 区、標高 73.5m に位置する。平面形態は不整形な楕円形である。規模は径 124m × 135m、深さ 0.40m を測る。断面形態は不整形で、床面は凹凸がある。埋土は 3 層に分かれ、①層 にぶい黄褐色土 [10YR 5/3]、②層 にぶい黄褐色土 [10YR 4/3]、③層 明褐色土 [7.5YR 5/6] である。①~③層ともにしまりがなく、やわらかい。土坑内からの出土遺物はない。

時期：平面や断面の形態が不整形で埋土もしまりがなくやわらかいことから、近現代の遺構と考える。

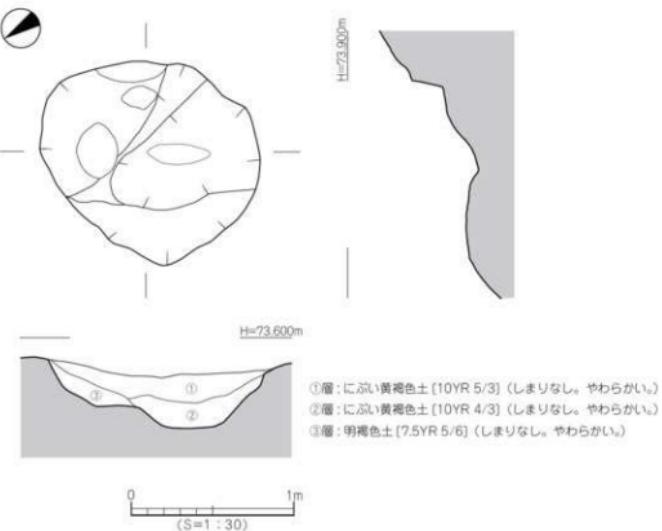


第 56 図 SD 1 測量図

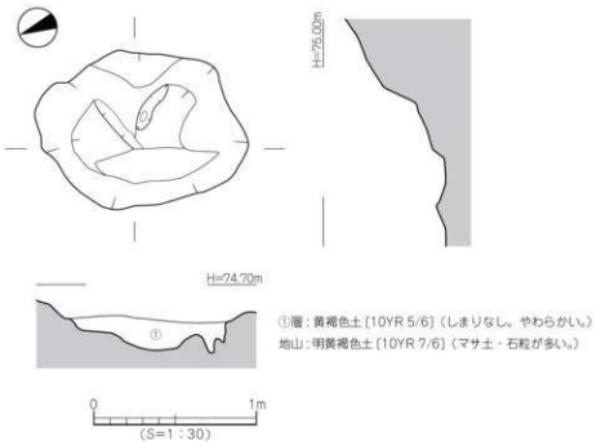
SK5 (第 58 図)

SK5 は調査区の北西 D2 区、標高 74.8m に位置する。平面形態は不整形な梢円形である。規模は径 0.94m × 1.23m、深さ 0.26m を測る。断面形態は不整形で、床面は凹凸がある。埋土は、黄褐色土 [10YR 5/6] (しまりなし。やわらかい。) である。土坑内からの、出土遺物はない。

時期：平面や断面の形態が不整形で埋土もしまりがなくやわらかいことから、近現代の遺構と考える。



第 57 図 SK3測量図



第 58 図 SK5測量図

SK8 (第 59 図)

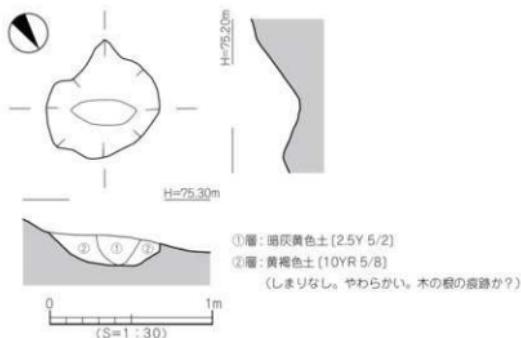
SK8 は調査区の北西 C3 区、標高 75.1m に位置する。平面形態は不整形な楕円形である。規模は径 0.70m、深さ 0.18m を測る。断面形態は不整形で、床面は凹凸がある。埋土は 2 層に分かれ、①層 暗灰黄色土 [2.5Y 5/2]、②層 黄褐色土 [10YR 5/8]（しまりなし。やわらかい。木の根の痕跡か？）である。土坑内から、出土遺物はない。

時期：平面や断面の形態が不整形で埋土もしまりがなくやわらかいことから、近現代の遺構と考える。

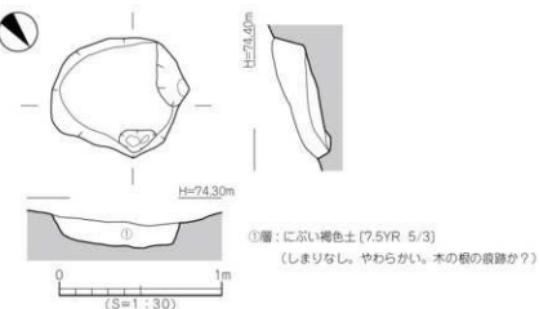
SK10 (第 60 図)

SK10 は調査区の北西 B3 区、標高 74.3m に位置する。平面形態は不整形な楕円形である。規模は径 0.75m ~ 0.85m、深さ 0.18m を測る。断面形態は不整形で、床面は凹凸がある。埋土は、にぶい褐色土 [7.5YR 5/3]（しまりなし。やわらかい。木の根の痕跡か？）である。土坑内から、出土遺物はない。

時期：平面や断面の形態が不整形で埋土もしまりがなくやわらかいことから、近現代の遺構と考える。



第 59 図 SK8 測量図



第 60 図 SK10 測量図

第4節 小 結

本調査からは、弥生時代・古墳時代の遺構と遺物を検出した。

弥生時代 古墳の墳丘内から、弥生時代前末期から中期初頭の土坑9基を検出した。土坑9基は、標高73.0m～78.0mに位置する。平面形態で分類すると、円形4基と楕円形5基となる。規模は円形が径106cm～125cm、深さ42cm～100cm、楕円形が90cm～155cm、深さ40cm～117cmを測る。断面形態は7基がプラスコ状、2基が逆台形状である。平面や断面の形態より、検出した土坑は貯蔵穴と考えられる。

古墳時代 古墳3基を検出した。古墳時代前期の古墳は、椋之原15号・16号墳の2基がある。椋之原16号墳は丘陵の頂上部より約2m下がった標高91.6mに位置し、A・B2基の木棺の主体部を持つ。15号墳は16号墳より約2m低い標高89.3mに位置し、A・B2基の箱式石棺を主体部とする。

16号墳A主体から完形の槍と鉈、碧玉製の管玉、赤色顔料が出土し、床面からは木棺痕跡が検出された。16号墳B主体からは折り曲げられた鉈、赤色顔料、木棺を覆っていたと思われる粘土が出土した。15号墳A・B石棺からは出土遺物はないが、石棺と同じ石材が14号墳の南にあるコンクリート製の水槽の石材として使われている。その石材には赤色顔料の付着がある。コンクリート上面には、「紀元二千六百年昭和十五年吉日」と刻まれている。昭和15年ごろまでに箱式石棺が破壊され、石材が水槽の枠として使用されたことが伺える。

古墳時代後期の古墳は、椋之原14号墳がある。14号墳の主体部は横穴式石室と考えられるが、石室は基底石が4個1段残るだけで石室内床面もほぼ壊滅状態であった。出土遺物には鉄器、管玉、陶器の蓋付壺がある。後世の段階で据え置かれた蓋付壺は、石室奥の北東コーナー部に据え置かれていた。壺の中には人骨が認められ、蓋内面には文字が書かれていた。文字は中央部に墨書きで「出土品土器十三箇刀劍破片二振分古墳（平安末期？）前発掘者アリシ模様」と書き、縁の部分に「昭和十三年十月廿四日（皇紀二五九八）正岡村更生山発掘ノ位置ニ祀ル」と書かれ、かえり部の内面に鉛筆で「昭35年3月2日発掘して見る 22年ぶりに」と書かれている。

このことから昭和13年に墨書きした壺に人骨を収め、石室内の北東角に埋葬し、22年後の昭和35年に壺を掘り返し蓋裏に鉛筆書きをしている。文字から読み取ると、昭和13年ごろまでは古墳の石室は存在し開墾により崩壊したときに壺に人骨を収めたと考えられる。壺には出土遺物の表記があり、土器13点、刀剣破片2本、前発掘者ありと書かれていることから、記載された遺物以外にも遺物は存在し、盗掘が行われ埋葬遺物は持ち去られていると思われる。

15号と16号の調査は、調査日程と調査範囲の関係から主体部だけの調査になり、詳細な資料が得られなかった。今後は、主体部出土遺物と周辺で調査が行われている前期古墳の出土遺物との比較検討が必要と考える。

【参考文献】

下條信行ほか 2003 『前期古墳の副葬品と地域間関係』 第4回 愛媛大学考古学研究室公開シンポジウム 愛媛大学考古学研究室
日本考古学協会 2006年度愛媛大会実行委員会 2006 『2006年度愛媛大会研究発表資料集』 日本考古学協会

遺構・遺物一覧　－凡例－

(1) 以下の表は、本調査地検出の遺構と出土遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺物観察表の各掲載について

法量欄 () : 推定復元値

調整欄 土製品の各部名称を略記した。

例) 口→口縁部、胴→胴部、底→底部、体→体部、天→天井部、口端→口縁端部、口上→口縁上部、口下→口縁下部、裾上→裾上部、裾下→裾下部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、密→精製土、金→金ウンモ。

() の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長(1~4) → 「1mm~4mm 大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好

表15 溝一覧

溝 (SD)	地区	方向	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	D5-6 ~ F4	北東~南	「V」字状	15.40 × 4.50 ~ 5.00 × 1.80	にぶい黄褐色土	弥生土器 須恵器	古墳時代 後期前半以降	高低差 20 m

表16 土坑一覧

土坑 (SK)	地区	平面形	断面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	C2	円形	フ拉斯コ状	1.25 × 1.25 × 1.00	褐色土、黒褐色土、暗褐色土、にぶい黄褐色土、明褐色土、粘土質砂質土	弥生土器	弥生時代 前期末~中期初頭	
2	C1	円形	フ拉斯コ状	1.17 × 1.17 × 0.58	にぶい黄褐色土 明褐色土	弥生土器	弥生時代 前期末~中期初頭	
3	C1	不整円形	不整形	1.35 × 1.24 × 0.40	にぶい黄褐色土 明褐色土		近現代	
4	D1	楕円形	フ拉斯コ状	1.35 × 1.18 × 1.17	明褐色土 にぶい黄褐色土 明褐色土	弥生土器	弥生時代 前期末~中期初頭	
5	D2	不整円形	不整形	1.23 × 0.94 × 0.26	黄褐色土		近現代	
6	C4	円形	フ拉斯コ状	1.20 × 1.20 × 0.77	にぶい黄褐色土、浅黄褐色土、黃褐色土、明黄褐色土		弥生時代 前期末~中期初頭	
7	C3・4	楕円形	逆台形状	1.05 × 0.90 × 0.40	明褐色土		弥生時代 前期末~中期初頭	
8	C3	不整円形	不整形	0.70 × 0.70 × 0.18	暗灰褐色土 黄褐色土		近現代	
9	B4	楕円形	フ拉斯コ状	1.55 × 1.25 × 0.80	褐色土、明褐色土、暗褐色土、にぶい 褐色土	弥生土器	弥生時代 前期末~中期初頭	
10	B3	不整円形	不整形	0.85 × 0.75 × 0.18	にぶい褐色土		近現代	
11	F4	円形	フ拉斯コ状	1.06 × 1.06 × 0.42	にぶい褐色土 にぶい黄褐色土	弥生土器	弥生時代 前期末~中期初頭	
12	E・F3	楕円形	逆台形状	1.16 × 0.94 × 0.52	にぶい褐色土		弥生時代 前期末~中期初頭	
13	E2・3	楕円形	フ拉斯コ状	1.48 × 1.23 × 1.05	明褐色土		弥生時代 前期末~中期初頭	

表 17 SK 1 出土遺物觀察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	甕	口径 (20.6) 残高 19.6	貼り付け口縁。口縁端部に割目。口縁部下にヘラ書き沈線文 8~9 条。	⑩ナデ ⑩ミガキ	⑩ナデ ⑩ミガキ(指頭痕)	黄橙色 黄橙色	石 (1~3) 金 ○	黒斑 煤付有	19
2	甕	口径 (20.6) 残高 7.2	口縁部の折り曲げが強く進「L」字状を呈す。口縁端部に割目。口縁部下にヘラ書き沈線文 11 条。	⑩ナデ (指頭痕) ⑩ミガキ	ミガキ (指ナデ)	暗赤褐色 灰赤色	石 (1~3) 金 ○		
3	甕	口径 (20.0) 残高 12.2	口縁部の折り曲げが強く進「L」字状を呈す。口縁端部に割目。口縁部下にヘラ書き沈線文 11 条。	⑩ナデ (指頭痕) ⑩ミガキ	ミガキ (指ナデ)	赤褐色 赤褐色	石・長 6~3 金 ○		
4	甕	口径 (24.2) 残高 8.8	口縁部は「く」の字状に折り曲げられ、口縁端部に割目。口縁部下にヘラ書き沈線文 4 条+刺突文 2 条+ヘラ書き沈線文 6 条+刺突文 1 条。	ハケ (4 本/cm) →ナデ	ナデ	明褐色 橙色・明褐色	石・長 6~2 金 ○		
5	甕	底径 (9.0) 残高 4.4	平底。	⑩ナデ (指頭痕) ⑩ミガキ	指ナデ (指頭痕)	明赤褐色 浅黄色	石 (1) 金 ○		
6	甕	底径 (6.8) 残高 5.9	くびれのある上げ底の底部。	ミガキ (指頭痕)	指ナデ (指頭痕)	にぶい赤褐色 黑褐色	石 (1~5) 金 ○		
7	壺	口径 (13.4) 残高 2.5	口縁部に沈線 1 条と割目。	ナデ	ナデ	明赤褐色 明赤褐色	石・長 (1) 金 ○		
8	壺	口径 (22.3) 残高 16	口縁部は大きく述べる。口縁端部は丸みを持つ。	⑩ナデ (指頭痕) ⑩ミガキ	ナデ (指頭痕)	褐色 褐灰色	石 (1) 金 ○	黒斑	
9	壺	口径 (12.2) 残高 5.6	口縁部は「く」の字状に折り曲げて突起部。口縁部下に割目。須部に押印のある貼り付け突起文 2 条ある。	ナデ	ナデ	黑色 黑褐色	石・長 6~3 金 ○		19
10	壺	底径 (7.2) 残高 4.5	やや上げ底氣味の平底。	マメフ (指頭痕)	指ナデ (指頭痕)	暗赤褐色 にぶい赤褐色	石・長 6~4 金 ○		
11	壺	底径 (8.0) 残高 5.6	丸みのある平底。	⑩ナデ (指頭痕) ⑩マメフ	指ナデ (指頭痕)	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長 (1) 金 ○		
12	鉢	口径 13.0 器高 100~108 底径 7.6	直口口縁。口縁端部は「コ」字状。	マメフ (ナデ?) (指頭痕)	マメフ (ナデ?) (指頭痕)	にぶい黄褐色 明褐色	石 1~5 長 6~2 ○	黒斑	19
13	甕の蓋	口径 (18.0) 残高 6.6	口縁部は大きく外反する。口縁端部は丸みを持つ。体部はやや膨らみがある。	⑩ナデ ⑩ミガキ	指ナデ (指頭痕)	明赤褐色 にぶい褐色	石 (1) 金 ○	黒斑	19

表 18 SK 4 出土遺物觀察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
14	甕	残高 5.3	口縁部は折り曲げが強く進「L」字状を呈す。口縁部下にヘラ書き沈線文 4 条+刺突文 2 条+ヘラ書き沈線文 2 条。	ナデ (ミガキ?)	ナデ (指頭痕)	灰褐色 にぶい褐色	砂粒 金 ○		

表 19 棕之原 14 号墳出土遺物觀察表 (土製品)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
15	短頸甕	口径 (6.4) 残高 1.8	短い直口口縁。口縁端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	砂粒 密 ○		
16	高环	残高 2.3	体部は「く」の字状に屈曲し口縁部はやや膨らみ気味に外反する。口縁端部は丸みを持つ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	砂粒 金 ○		
17	环茎	口径 (16.0) 残高 2.2	口縁端部は尖り気味でやや内傾する。口縁部と天部との境目に沈線が温る。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	砂粒 ○		
18	横瓶	残高 10.4	胴部中央部は円盤状粘土充填により塞がれている。	カキ目付~5 本/cm	回転ナデ	灰色 灰色	石・長 (1) 密 ○		

出土遺物観察表

表20 桃之原14号墳出土遺物観察表(装身具)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
19	管玉	完形	碧玉	240	0.90	0.15~0.45	3.001		19

表21 桃之原14号墳出土遺物観察表(金属製品)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
20	鍼	先端部と茎端部を欠く。	鉄	7.45	2.35	0.40	10.702		19
21	鍼	茎部の一部	鉄	3.50	1.05	0.75	4.119		
22	鍼もしくは歛先	破片	鉄	3.50	4.30	0.60	14.711		
23	鍼もしくは歛先	破片	鉄	6.00	4.00	0.80	44.527	毎日残る。 (1cm四方に、延べ5本、 横10本の鍼跡)	19
24	鍼	破片	鉄	6.30	2.20	0.35	12.456		

表22 桃之原14号墳出土遺物観察表(土製品)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
25	壺	口径 10.3 底径 8.8 高さ 11.7	頭部は切り出でて外反。口縁端部は肥厚し「コ」字状。底部は上げて底。内面と外底は擦痕。肩部3ヶ所に引頸がかかる。	施釉	回転ナデ ⑤回転ヘラケズリ	(胎土) 淡黄色 (内面物のため側部 下半は不明。) (輪) 淡黄色 (頸) 青色	密	磁器と して使用	20
26	壺の蓋	口径 9.0 底径 12.5 高さ 2.0	天井部は扁平で中央部をやや凹む。天井部及び内面には施釉し外底で波巻文を描く。	施釉 ⑥回転ナデ	回転ナデ	(胎土) 淡黄色 (輪) 淡黄色 (頸) 青色	密	磁器と して使用	20
27	甕	残高 2.8	口縁部は折り曲げが強く、造「L」字状を呈す。口縁端部に削目。口縁部下にヘラ描き沈綴文3条残る。	ナデ?	ミガキ	橙色 橙色	石・長(1) 金 ○		
28	甕	残高 8.2	口縁部は「L」字状に折り曲げられる。口縁端部に削目。口縁部下にヘラ描き沈綴文1条。	施釉 ⑦ヨコナデ	ナデ	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	長(1) 金 ○		19
29	甕	口径 (22.9) 残高 7.5	貼り付け口縁。口縁部下にヘラ描き沈綴文10条。	⑩ナデ ⑪ミガキ	指ナデ (指頭痕)	浅黄色 浅黄色	石・長(1~2) 金 ○		19
30	甕	底径 (5.2) 残高 4.2	やや上げ底の底部。	⑫ハケ (6本/cm) →ナデ(指頭痕) ⑬ナデ	マメツ	にぶい黄褐色 灰褐色	石・長(1~2) 金 ○	黒斑	
31	甕	底径 (4.8) 残高 4.4	やや上げ底の厚い底部。	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色 にぶい黄褐色	石・長(1~4)		
32	甕	底径 (7.7) 残高 2.2	平底の底部。やや立ち上がりを持つ。	⑭ハケ (12本/cm) →ナデ ⑮ナデ	ナデ (指頭痕)	灰褐色 灰褐色	灰褐色 石・長(1~2) 金 ○		
33	甕	口径 (8.4) 残高 4.1	やや丸みのある平底。	ナデ	ナデ	灰褐色 灰褐色	石・長(1~2) 金 ○		

表23 桃之原14号墳出土遺物観察表(石製品)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
34	鍼	完形		4.60	1.56	4.30	3.274	有茎式研製石鍼	19
35	鍼	完形	サスカイト	240	1.70	0.35	1.006	打製石鍼	

表 24 桦之原 16 号墳 A 主体出土遺物観察表（装身具）

番号	器種	残存	材質	法量			備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
36	管玉	完形	碧玉	1.21	0.42	0.30	0.329	21

表 25 桧之原 16 号墳 A 主体出土遺物観察表（金属製品）

番号	器種	残存	材質	法量			備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
37	槍	ほぼ完形	鉄	22.20	2.50	0.80	68.743	布目・木質残る。 (1cm四方に、鍛赤 20 本、 鍛赤 20 本の織紋)
38	鉤	ほぼ完形	鉄	21.10	1.90	0.80	52.053	布目・木質残る。 (1cm四方に、鍛赤 20 本、 鍛赤 20 本の織紋)

表 26 桧之原 16 号墳 B 主体出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外側) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
39	甕	口径(16.6) 残高 29	「く」の字状に外反する口縁部。口 縁端部は丸い。	①ナデ ②ハケ(1本/cm) →ナデ	①ナデ ②ハケ(0本/cm) →ナデ(指痕痕)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石(?)金 ○		21
40	甕	残高 27	薄手で丸底の底部。内底に径 5mm ほどの朱貫通の円孔あり。	ミガキ	ナデ (指痕痕)	赤褐色 明褐色	密金 ○	赤色顔料	21
41	高环	残高 38	大きく聞く口縁部。环部中位に段を 持つ。	ミガキ	ミガキ	橙色 橙色	石・長(1)金 ○	黒斑 赤色顔料	21
42	高环	底径(14.0) 残高 34	直線的に大きくながる裾部。透かし は 3 方向だと思われる。 (板状工具小口痕)	ミガキ ハケ(6 本/cm) →ナデ(指痕痕)	ハケ(6 本/cm) →ナデ(指痕痕)	明褐色 明褐色	石・長(1)金 ○	赤色顔料	21
43	高环	底径(20.2) 残高 29	やや内済気味に大きくながる裾部。	ミガキ ナデ	ハケ(0本/cm) →ナデ	赤褐色 明黄色	石・長(1)金 ○	黒斑 赤色顔料	21

表 27 桧之原 16 号墳 B 主体出土遺物観察表（金属製品）

番号	器種	残存	材質	法量			備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
44	鉤	ほぼ完形	鉄	10.00	1.20	0.45	25.237 (U 字状に凹凸面行 なれる。各面有 1cm四方に、鍛赤 10 本、 鍛赤 10 本の織紋)	21

第4章　まとめ

本報告では、北条地区にある本谷遺跡、高田遺跡の2遺跡の報告を行った。本谷遺跡からは、古墳時代の遺構と縄文時代から古代までの遺物を検出した。高田遺跡からは弥生時代の土坑群と木棺直葬の主体部2基、箱式石棺2基、横穴式石室1基を検出した。ここでは本谷遺跡の立地と壇状遺構について、高田遺跡の弥生時代の土坑と古墳主体部の副葬遺物についてまとめを行う。

本谷遺跡

立地は、小川谷から佐吉に抜ける農道頂上部の標高145mに位置する。このように標高の高い場所に位置し集落に関連する遺構が検出されている遺跡としては、松山市の食場から祝谷、堀江に抜ける途中の下伊台町にある大畠遺跡と伊台惣部遺跡がある。大畠遺跡と伊台惣部遺跡は、伊台川を挟んだ両岸に位置する。大畠遺跡は伊台川左岸の標高157.6mに位置し、縄文時代後半の遺物、弥生時代の堅穴住居2棟、貯蔵穴、土坑、溝、古墳時代の堅穴住居が検出されている。伊台惣部遺跡は伊台川右岸の標高143mに位置し、古墳時代の堅穴住居が検出され、住居内からは完形品の土師器と炭化物が出土し焼失住居と確認されている。このように、標高140mを超える伊台盆地には、弥生時代から古墳時代にかけて集落が展開していたことが明らかとなっている。

古墳時代の遺構では、性格不明遺構のSX1がある。SX1は段カットした上段にSD4、下段にSD2・3を巡らし、平坦面には土坑と柱穴が位置する。このSX1は、平坦面に遺構を配置する壇状遺構と考えられる。出土遺物には須恵器があり、時期は7世紀中葉～後葉である。このような壇状の遺構の類例では、福岡市元岡・桑原遺跡群第18次調査で報告されている。第18次調査では谷地形の中央に流路があり、流路両側の斜面に複数の壇状遺構を形成し、古墳時代から古代にかけて幾度も建替えながら掘立柱建物群を配置する。壇状遺構は、元岡桑原遺跡とは大小の違いはあるが高地での集落を形成するために必要な平坦面を確保する遺構であり、高地における古墳時代の集落構造を研究する一資料となるものである。また、出土遺物には縄文土器、弥生土器があり、周辺に調査が広がれば縄文時代から古墳時代までの集落変遷を復元できると考えられる。

高田遺跡

土坑：弥生時代前期末から中期初頭の土坑9基を検出した。土坑9基は標高73mから78mに位置する。平面形態で分類すると、円形4基と楕円形5基となり、断面形態では7基がラスコ状、2基が逆台形状である。

この時期の土坑が丘陵部の古墳の墳丘内から検出される事例は、松山市の東部に位置する鶴が峰遺跡に検出例がある。鶴が峰遺跡からは、弥生時代前期末から中期初頭・前半期の土坑が19基検出されている。土坑は貯蔵穴で平面形態は円形に近いものが多くあり、炭化米や豆、種実が検出されている。なお、調査面積が4,500m²の調査であるが、住居は1棟検出ただけである。

今回の調査から、検出した土坑9基は断面形状から貯蔵穴と考えられる。このように生活に直結する貯蔵穴を検出したが、住居は検出されていないことから、鶴が峰遺跡と同様に近現代の開墾が古墳構築時に破壊されたか、もしくは調査が行われていない丘陵上に住居が存在すると考えられ、周辺の丘陵部の調査が進めば、集落の貯蔵穴と住居の関係が明らかになると思われる。

副葬遺物：古墳時代前期の椋之原16号墳は標高91.6mに位置しA・B2基の木棺の主体部を持つ。

16号墳A主体からは、完形の槍と鉈、碧玉製の管玉、赤色顔料が出土し、床面からは木棺痕跡が検出された。16号墳B主体からは折り曲げられた鉈、赤色顔料、木棺を覆っていたと思われる粘土が出土した。

16号墳から出土した鉈は、「U」字状に折り曲げられていた。田中謙氏が集成されている「折り曲げ鉄器」の分類からは、Ⅱ類（屈曲部に角を持たずに湾曲する）に分類され、時期では古墳時代前期に鉈の出土が多いと報告されている。折り曲げ鉄器が出土する例は、愛媛県内では松山市の朝日谷2号墳の大刀、東山古墳29号墳の大刀、砥部町の土壇原古墳の「U」字状の大刀、東予に位置する今治市唐子台3号墳・唐子台10号墳の短剣（あるいはヤリ）、南予に位置する笠置岬古墳のヤリがある。高田遺跡以外の出土は大刀、短剣、ヤリであり、鉈の出土例は初めてとなり、古墳時代前期の愛媛県東予と南予との関係を考える上での一資料であり興味深い資料である。

椋之原遺跡

昭和44年に愛媛県文化財保護協会が高田遺跡に近接するゴルフ場開発において、3期約30日間に渡り膨大な開発区域の一部の発掘調査が行われ、北条椋ノ原遺跡として概要が報告されている。

北条椋ノ原遺跡は標高137m～166mに位置し、弥生時代や古墳時代、中世の遺構と遺物が出土している。概要報告からは明確な遺構は確認できないが、弥生時代の竪穴住居址7棟、古墳時代の土坑墓18基（粘土櫛）、箱式石棺6基、横穴式石室6基を検出し、踏査では250基以上の土坑を確認したと報告されている。遺物では弥生土器、石鎚、磨製石斧、石槍、須恵器、直刀、刀子、鉄斧、帶金具、棺釘、陶磁器が出土している。

今回の調査と椋之原遺跡の概要報告からすると、高田遺跡を含む丘陵上には、検出遺構から弥生時代の高地性集落が広がりと古墳時代の墓域の広がりが想定され、弥生時代から古墳時代の遺跡が広い範囲で密集していることが伺える。今後、より詳細な調査が進めば松山市内の中でも重要な遺跡地帯と考えられる。

【参考文献】

- | | |
|---------|--|
| 真鍋昭文はか | 2005 『大畠跡』 愛媛県埋蔵文化財発掘調査報告書 第120集 (財) 愛媛県埋蔵文化財調査センター |
| 梅木謙一 | 2002 『伊台惣部遺跡』 松山市文化財調査報告書 第85集 松山市教育委員会
(財) 松山市生涯学習振興財團松山市埋蔵文化財センター |
| 菅波正人 | 2009 『元岡・桑原道路群14(上)』 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1063集 福岡市教育委員会 |
| 菅波正人はか | 2009 『元岡・桑原道路群14(下)』 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1063集 福岡市教育委員会 |
| 吉留秀敏 | 2010 『元岡・桑原道路群16』 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第110集 福岡市教育委員会 |
| 吉留秀敏はか | 2012 『元岡・桑原道路群19』 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1172集 福岡市教育委員会 |
| 田中謙はか | 2003 『前期古墳の副葬品と地域間関係』 第4回 愛媛大学考古学研究室 公開シンポジウム 愛媛大学考古学研究室 |
| 日本考古学協会 | 2006 年度愛媛大会実行委員会 2006 「2006年度愛媛大会研究発表資料集」 日本考古学協会 |
| 大山正風 | 1997 『椋ノ原』 (北条市椋ノ原道路) 高地性住居址調査概要 個人発行 |

写 真 図 版

写真図版 1 ~ 8 本谷遺跡

写真図版 9 ~ 21 高田遺跡

写真図版データ

1. 遺構は、主な状況については、4×5判や6×7判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35mm判フィルムカメラ・デジタルカメラで補足している。一部の撮影には高所作業車を使用した。

使用機材：

カ メ ラ	トヨフィールド 45A	レ ン ズ	スーパー・アンギュロン 90mm他
	アサヒペンタックス 67		ペンタックス 67 55mm他
	ニコンニュー FM 2		ズームニッコール 28~85mm他
フィルム	白 黒 ネオパン SS・アクロス		

2. 遺物は、4×5判で撮影した。すべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材：

カ メ ラ	トヨビュ- 45G
レ ン ズ	ジンマー S 240mm F 5.6 他
ストロボ	コメット /CA32・CB2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド 101
フィルム	ネオパンアクロス

3. 単色図版は、一部を除き、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引 伸 機	ラッキー 450MD・90MS
レ ン ズ	エル・ニッコール 135mm F5.6A・50mm F2.8N
印 画 紙	イルフォードマルチグレードIV RC ペーパー

4. 製 版：写真図版 175 枚

印 刷：オフセット印刷

用 紙：ニューVマット（同等品） 76.5kg

【参考】『埋文写真研究』vol.1~20・『報告書制作ガイド』『文化財写真研究』vol.1~3

[大西 朋子]

本谷遺跡



1. 調査地遠景（南東より）



2. 調査地掘削状況（南西より）



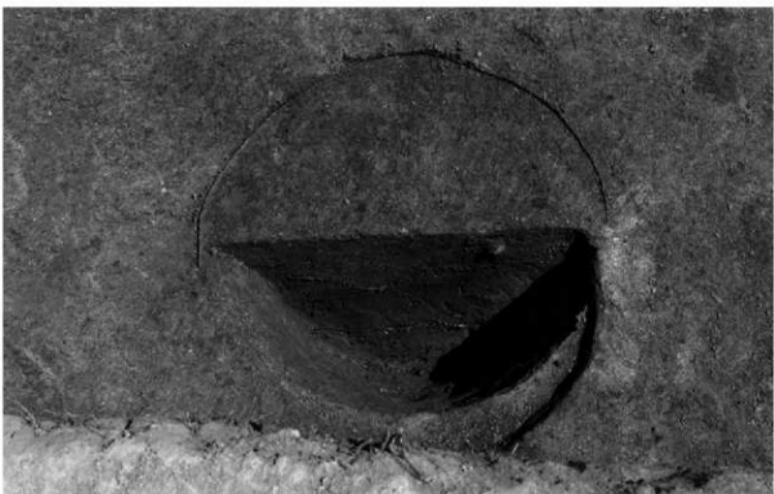
1. 遺構検出状況①（南より）



2. 遺構検出状況②（南より）



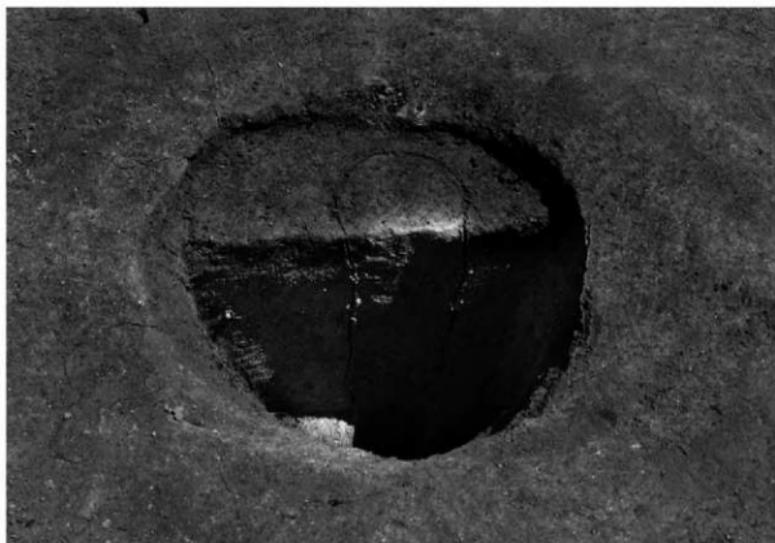
1. 造構検出状況③（南西より）



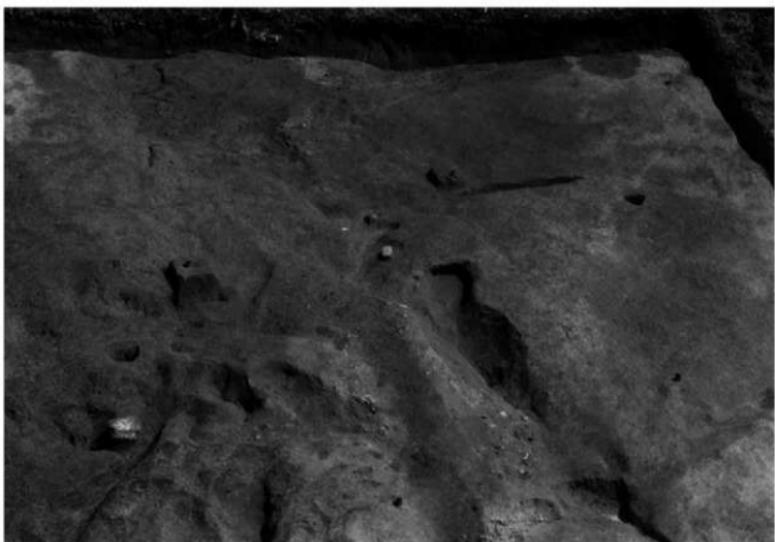
2. SK 1 土層検出状況（南西より）



1. S P 2 検出状況（南より）



2. S P 4 土層検出状況（北西より）



1. SX2・SR2完掘状況（南より）



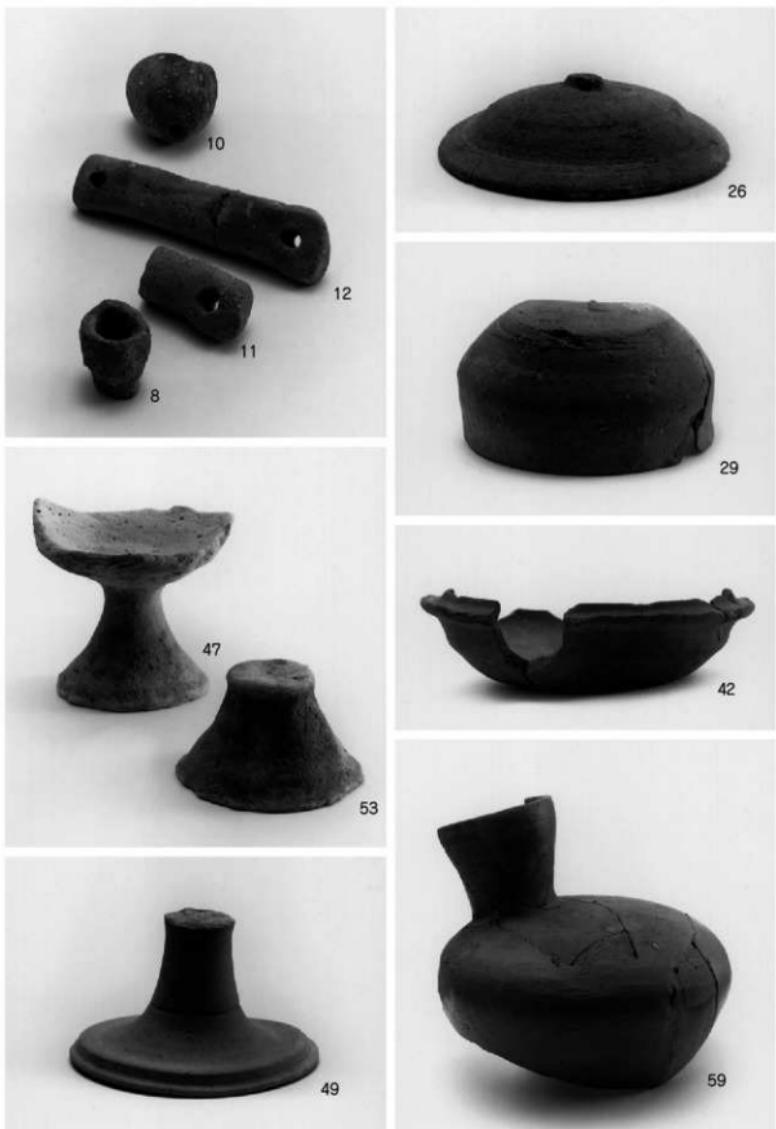
2. SX1・SD2・SP・SR1完掘状況（南上方より）



1. S R 1 完掘状況（北より）



2. 作業風景（南西より）



1. SX1 出土遺物 ①



1. 出土遺物 (SX1②: 61・62・66・67、SX2: 68~70・72、SD1: 75、SP1: 76、SR1: 78・80)



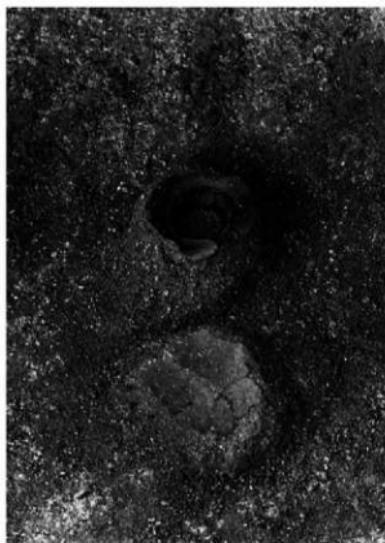
1. 調査地遠景（北西より）



2. 桦之原14号墳上部状況（北より）



1. SK 1 遺物出土状況①（南西より）



2. SK 1 遺物出土状況②（南西より）



3. SK 1 完掘状況（南西より）



1. SK 4 土層検出状況
(西より)



2. SK 4 遺物出土状況
(西より)



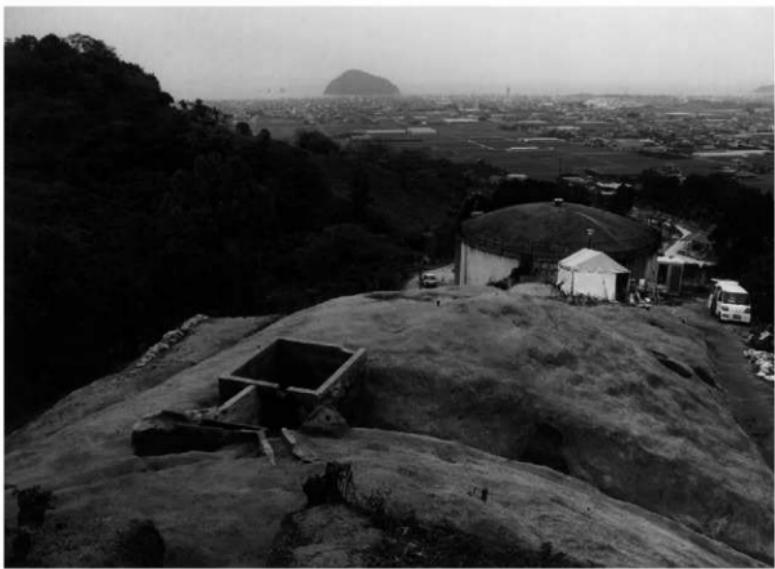
3. SK 9 完掘状況
(北東より)



1. 棕之原14号墳陶器壺出土状況①（西より）



2. 棕之原14号墳陶器壺出土状況②（西より）



1. 棕之原 14号墳と土坑完掘状況（南東より）



2. SD 1 完掘状況（北東より）



1. 棕之原15号墳A・B石棺検出状況（西より）



2. 棕之原15号墳A・B石棺、16号墳A主体完掘状況（北西より）



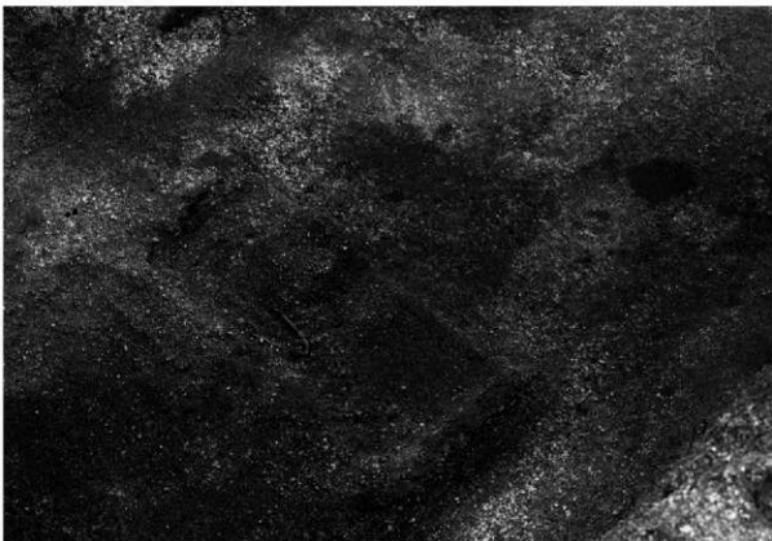
1. 榛之原16号墳A主体遺物出土状況（南より）



2. 榛之原15号墳A・B石棺、16号墳A・B主体完掘状況（南東より）



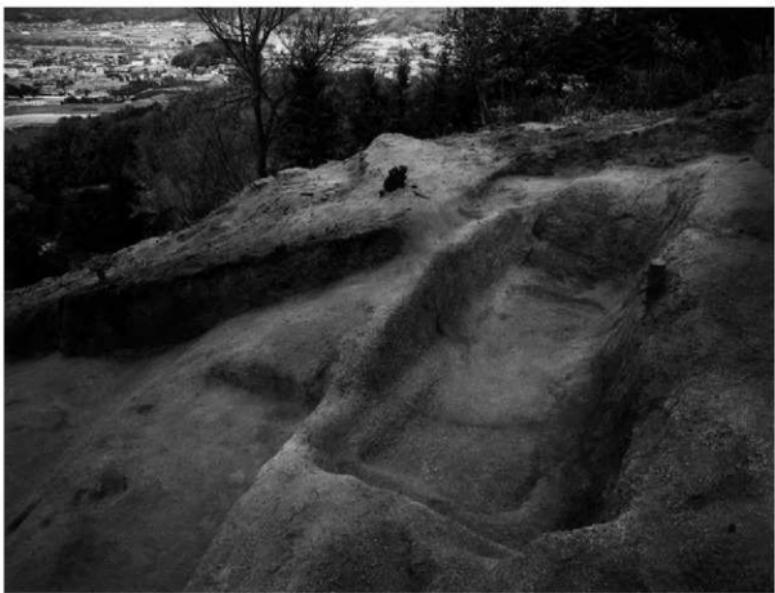
1. 棕之原 16号墳 B 主体粘土・赤色顔料検出状況（北より）



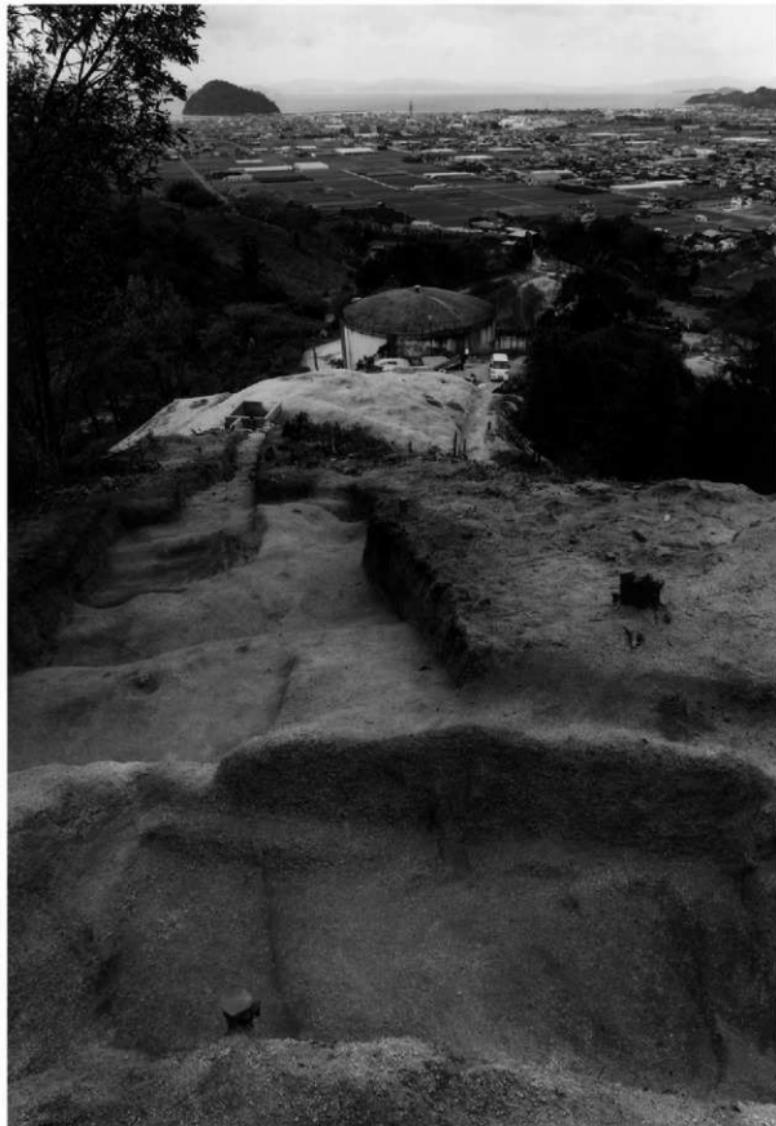
2. 棕之原 16号墳 B 主体遺物出土状況（北より）



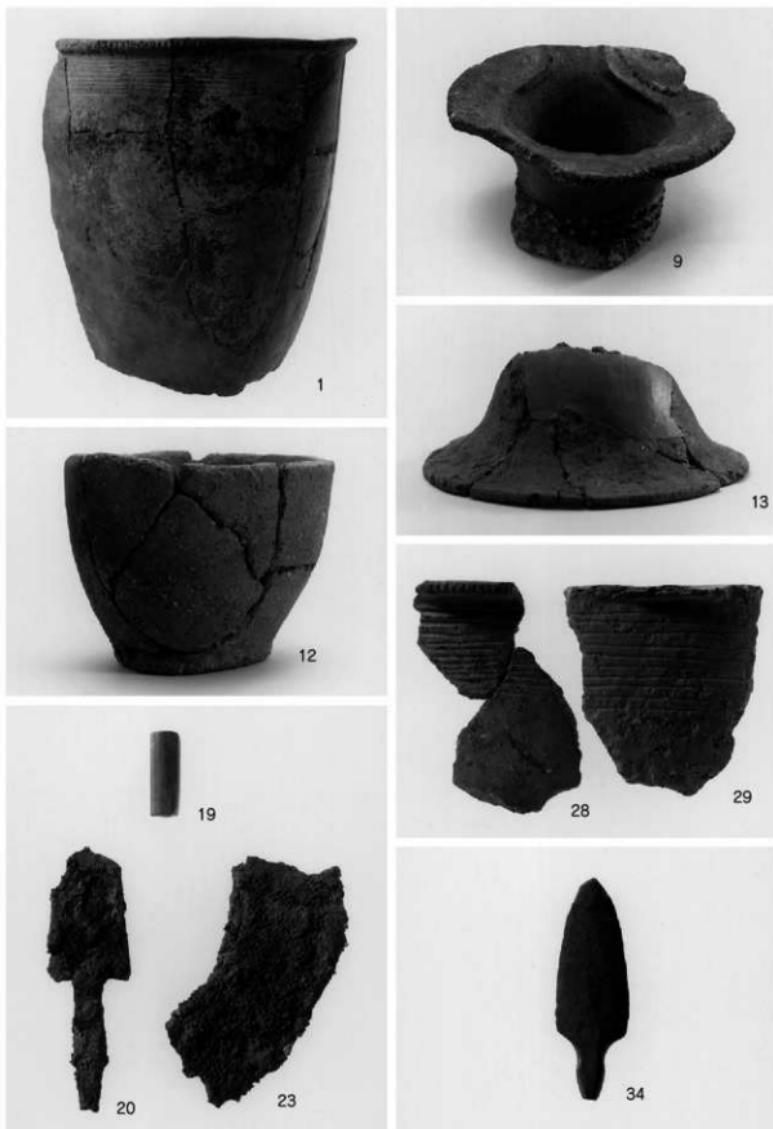
1. 棚之原 16号墳 B 主体棺外赤色顔料検出状況（北西より）



2. 棚之原 16号墳 B 主体完掘状況（南西より）



1. 調査区より鹿島を望む（南東より）



1. 出土遺物 (SK 1 : 1・9・12・13、棕之原 1・4号墳① : 19・20・23・28・29・34)



25



26



26

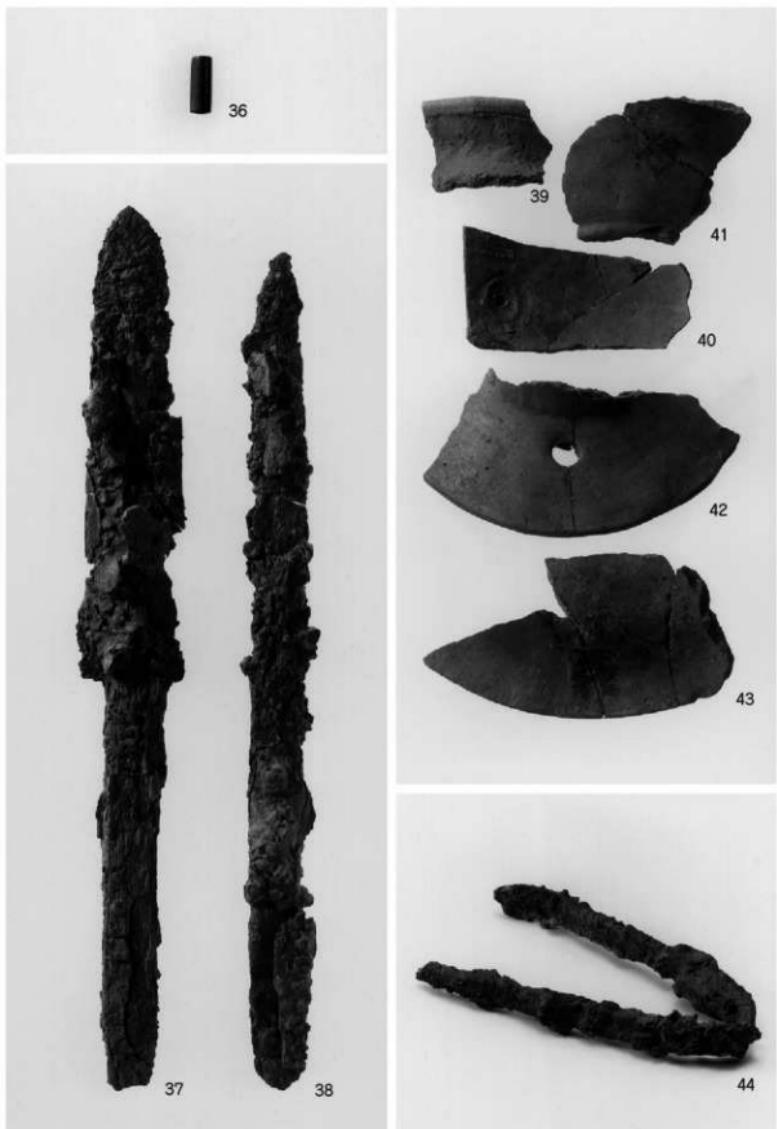


25



26

1. 棕之原14号墳出土遺物 ②



1. 桧之原 16 号填出土遺物 (A 主体 : 36 ~ 38. B 主体 : 39 ~ 44)

報 告 書 抄 錄

ふりがな	ほんだにいせき　たかたいせき
書名	本谷遺跡・高田遺跡
副書名	
卷次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第177集
編著者名	高尾和長・大西朋子
編集機関	公益財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒791-8032 愛媛県松山市南斎院町乙67番地6 TEL089-923-6363
発行年月日	西暦2015(平成27)年3月20日

松山市文化財調査報告書 第177集

本谷遺跡
高田遺跡

平成27年3月20日 発行

編 集 公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財團
発 行 埋蔵文化財センター

〒791-8032 松山市南斎院町乙67番地6
TEL (089) 923-6363

松山市教育委員会

〒790-0003 松山市三番町六丁目6番地1
TEL (089) 948-6605

印 刷 岡田印刷株式会社

〒791-0012 松山市湊町7丁目1-8

TEL (089) 941-9111(代)
